

消費に就いては、我が著者は、正當にして而も注目すべき意見を吐いてゐるが、この見解の核心はその後久しく無視せられ、マルサスの述作に至つて始めて充分な發展を遂げた。斯く言ふ私は、凡そ生産の増加はこれに相應した消費の増加に依つてのみ條件づけられるといふ命題を指してゐる

は、路加傳福音書第十九章第二十三節を引合ひに出さねばならなかつた。一學問上教へらるゝところ多き傍論は、マレーの『土地その他何等かの有價證券乃至寄託品より成る國立銀行案』(R. Murray: A proposal for a national bank, consisting of lend, or any other valuable securities or depositums. 4. London 1695.)及びチェンバーレンの『土地證券局の組織』(H. Chamberlen: The constitution of the office of land credit declared in a deed. Enrolled in chancery a. 1696. 12. London 1698.)が唱へた案である。これらの人々は、彼等の銀行及びこれによつて發行せらるべき流通用具の基礎を地價の上に置く計畫を、遂行しやうと努めた。この考へは、周知の如く、ジョン・ローの諸著述と實際上の詐欺との根柢に横はる思想である。従つて私は、十八世紀デイヴィッド・ヒューム及びアダム・スミスまでを含む第二論文に於て、再び本書に立ち歸らねばならなくなるであらう。アスジル『金以外の一正貨を創定する爲めに證明せられたる若干の主張』(J. Asgill: Several assertions proved in order to create another species of money than gold. London 1696. [Hollander's reprint of economic tracts.])は、全く後世のフィジオクラシーを想ひ起さしめる如き諸理由によつて、チェンバーレンの計畫を支持した。『我々が商品と呼ぶものは、地面から引き離された土以外の何物でもない。……』 Man deals in nothing, but earth! 【人の取扱ふものは、土以外の何物でもない。】商人とは、土地の一部分を他の部分と交換する爲めの代

るのである<sup>1)</sup>。即ちベティは、愛蘭土に於て二つの國民階級を區別した。一個の暖爐をも持たぬか、乃至は高々一個の暖爐を持つに過ぎない、小屋に居住するだけの家族十八萬四千軒及びより上流の家族にして多數の暖爐がある家屋を所有するもの一萬六千軒がこれである。第一の階級は、僅か煙草だけを除けば、總ての欲望を直接自家労働によつて充足し、自家の製作物は殆んど總て自ら消費するが故に、商業に寄與すべきものは殆んど何物をも與へない。ところで著者は問ふ、貴族の支出を制限すると、庶民を奢侈に習はしめると、果して何れがより多く公益に適ふかと。彼は斷然後者を採る。曰く、然らば庶民は今日より更に一層多く支出するであらう。併し儲けることも更に一層多くなるであらうから、その結果、全體はより富有となるであらう。前の場合には、それではなくてさへ廣く流行してゐる吝嗇を、更に一層廣く流行せしめ乍ら、而も國家には極く些少の利益を與へるに過ぎないであらうと。他の箇所では、愛蘭土人の怠惰がその厭ふべき素質に基く、とする見解を非難してゐる。『一

理人である』【二一頁】。

1) マルサス『經濟學原論』(Malthus: Principles of political economy, [considered with a view to their practical application. London 1820.] 三四五—五二二頁。



人の労働で四十人を養ひ得る馬鈴薯を以て満足し……  
 ……三日にして一軒の家を建て得る如き者たちに、  
 抑、労働する必要があらうか。また、祈禱と功德によつて彼等  
 を濟度すべく、従つてこれが行業は彼等によつて當然私淑せら  
 るべきかの古代の教父や近代の聖人等に近似するものこそ、即  
 ち斯かる生活方法である、と教へられながら、而も勞多きものと  
 はいへ兎に角これよりは優つた生活をする理由が、何處にあら  
 う。英蘭土への輸出が禁止されてゐるのに、何でより多くの家  
 畜を飼養するであらうぞ。充分な資本を持つて彼等の商品を  
 買入れ乃至はこれと交換に提供し得べき他のより、快適な外國  
 商品を持つてゐる商人たちが居らずして、どうしてより多くの  
 商品を生産しやうぞ。また英蘭土の法律によつて通商を禁止  
 束縛されてゐるのに、どうして商人たちが資本を所有し得やう。  
 ……  
 ……これと反對に、ペティは、不在地主制度、

1) 『政治的解剖』八一、九六頁以下【ハル、第一卷一九二、二〇一頁以下】。かの國民階級二分論が實益あることに就いては、最近に至つて復び、卓越した一人の經濟學者に依つて實證された。ヘルマン『國民經濟學的研究』(F. B. W. Hermann: Staatswirtschaftliche Untersuchungen. [über Vermögen, Wirtschaft, Produktivität der Arbeiten, Kapital, Preis, Gewinn, Einkommen und Verbrauch. München 1832.]) 三五四頁以下。

【Absenteeismus】こそ愛蘭土貧窮の原因たるべきものである、とする甚だ通俗の見解に異論を唱へる。一人の英蘭土人が愛蘭土で土地を買入れ、その地代を英蘭土で消費したところで、愛蘭土の國民財産がその爲めに減少せざるべきことは、恰も英蘭土の國民財産が小作料の送金に依つて失ふところのないと、寸毫も異らない。假令買入れた土地自體を英蘭土に移すことができるとするも、愛蘭土に残された殘餘の土地は、これによつて毫も影響を受けないであらう。況んや外國に對する單なる地代支拂が何であらう。不在地主制度の禁止は、どう敷衍して考へて見ても、結局、各人は自分の耕した土塊の上に居住しなければならぬ、といふことになるであらう。成る程斯くの如きが一般的平等となることは、勿論であらう。併し、それは單に貧困争亂、無政府の平等に過ぎないであらう<sup>1)</sup>。

ペティの實踐經濟學に於ける中核を成すものは、愛蘭土と英蘭土との合併に對する、熱心な賛成論これである。同一議會に對する兩國の比例的代表以外、彼はなほ、相互間の大移住によつて生ぜしめらるべき、兩國の融合を希望する。一部は政治及び法律上、一部は經濟上、多數の愚かな結果が生じたことは、從來兩者が分

1) 『政治的解剖』八二頁以下【ハル第一卷一九三頁以下】



離してゐたといふ事實に歸せらるべきものである。斯くて例へば、同一君主の臣民たちが、外國民と同じく、相互に關稅を支拂はねばならなかつたり、愛蘭土人が亞米利加に渡航しやうと思ふとき、甚しい費用と危険とを冒して、先づ英蘭土の海岸に廻航することを強制されたり、一般に多くの點に於て英蘭土よりは寧ろ外國とより親密に交通したりする如き、これである。それは英蘭土と威斯との間、南英蘭土と北英蘭土との間、その他に、類似の關所を設けると同じく、賢明ならざる策ではないか<sup>1)</sup>。——同じ見地から、ペティは有名な航海條例に依り、そのとき以來、英蘭土が獨占し來つた植民地に對する市場指定權【Stapelrecht】を非難する<sup>2)</sup>。これによつて當時の植民政策全體の基礎が消滅すべきは、勿論である！

最後に猶ほ私は、ペティの租稅論を述べやう。それに關して特に興味を惹くものは、系統的に租稅の源泉にまで溯らうとする彼の努力である<sup>3)</sup>。彼は、英蘭土の凡ゆる資本及び土地收益を、毎年の國

1) 『政治的解剖』三〇、三二以下、九九、一二二頁以下【ハル、第一卷一五八、一五九以下、二〇二、二一九頁以下】。生畜の輸入は既に千六百六十三年に、愛蘭土からの鹽漬肉のそれは千六百六十六年に、禁止されてゐた。

2) 『數篇』一六四頁以下【一六九九年版二五〇頁以下】。

3) 彼の著書『賢者には一言を以て足る』に於て。本書は、千六百六

民所得の八分の三、勞銀を八分の五と見積る爲め、租稅もまた八分の五は people【人民】に、八分の三は land and stock【土地及び資本】に賦課せられ、後者は更に分割されて家屋畜群動産その他に分賦さるべきことを希望してゐる。——合目的に賦課された租稅は、例へば不良に經濟を營んでゐる者たちから貨幣を取上げて、立派に經濟してゐる者たちの手に移し、徒食者たちを勞働に強制する等の爲めに、國民財産それ自體をも直接に利益することができ<sup>1)</sup>。この理由に據り、ペティは、和蘭で行はれてゐる如き間接稅を、甚だしく賞讃する。人民はその支に從つて課稅せらるべく、その所得に從つて課稅されてはならない。而も主として、飲食の如く、急速に滅失すべき商品の消費に課せらるべきである<sup>2)</sup>。從つてホッブスに於けると同説で、この見解こそは、一般に一世紀半以前から英吉利で通説となつて來た見解であると思ふ。——租稅の請負は、『これによつて王の得るところの二倍を國民が支拂はねばならないから』<sup>3)</sup>、ペティによつて非難され

一七九 十五年乃至六十七年對蘭戰爭中、堪え難くなつた租稅負擔のよりよき分課を勸める爲めに、執筆されたものである。

1) 『數篇』一二五頁以下【一六九九年版一九五頁以下】。

2) 前掲書一二九頁【一九九頁】。

3) 前掲書一六六頁【二五三頁】。



る。最後に眞に歴史的且つ實際的なのは、愛蘭土の地が、現在の低度な耕耘状態に於て、土地を甚だ過剰に持つてゐるのに、貨幣には不足してゐるとの理由を以て、この地に金納税の代りに寧ろ物納税（亞麻を以てする）と徭役労働とを要求する提案である<sup>1)</sup>。

1) 『數篇』 一三〇頁以下【一六九九年版二〇二頁以下】。『政治的解剖』七八頁【ハル第一卷一九〇頁】。拙稿『農耕制度の政策と統計との諸理念』(Roscher: Ideen zur Politik und Statistik der Ackerbausysteme, dritte Abhandlung. Im Archiv der politischen Oekonomie und Polizeiwissenschaft. Neue Folge. Bd. IV.) 一一頁以下参照。

## 第九章 自由貿易論者ノース

サーダッドリーノース【Sir Dudley North】の『貿易諸論』(Discourses upon trade, [principally directed to the cases of the interest, coynage, dipping, increase of money.] London 1691. 4.)が、アダム・スミス以前の時代に於ける最も注目し得る著作に属することは、疑ひを容れぬ。本書は實に、深い根據を持つと共に徹底的に論究された、自由貿易政策の體系であり、而も通説の認める如く、最暗黒なマーカンテイリズムの時代に著はされたものである。

サーダッドリーの兄はギルフォード伯爵【Earl of Guildford】で、チャールズ二世及びジェームズ二世兩朝の内大臣として、好人物流の薄志弱行と無節操との爲め、甚だ悲惨な役割を演じた人であつたが<sup>1)</sup>、弟の方は、自ら好んで商人となり、商館の支配人として多年コ

1) 兩人の弟ロージャー・ノース【Roger North】の書いた、ギルフォード卿及びサー・ダッドリー・ノースの傳記、進んでは、マコーレー『英國史』(Macaulay: History of England [from the accession of James II]) 第四章参照。ギルフォード卿は、これあるによつて始めて尊敬すべき穩和派となり得るところの、かの強い性格に於て、殆んど全く缺けてゐたが、所謂筒井順慶黨の卓越した黨員に屬してゐた。



ンスタンティノープル【Constantinople】及びスミルナ【Smyrna】に生活し、莫大な財産を携へて故國に歸へり、自家のレヴァント貿易を倫敦の地から續行した。マコーレーの言つた如く、『ノースは、貿易理論と貿易實務とに關して深い見識を持ち、自説を述べるに當つては、理路透徹英氣潑刺たる爲め、間もなく政治家たちにも認められるに至つた。政府は、彼に於て、聰明な顧問にして而も不誠實な奴隷を見出した。何となれば、彼が稀有の天稟には、無節操な主義と同情のない心情とが結付いてゐたからである。ノースは、チャールズ二世の下に於けるトーリー黨の反動時代郡奉行に任命され、斷乎たる決心を以て朝廷の復讐を支持し、彼の陪審官たちは、常に有罪の宣告を下した。【……】その報賞として士爵者となり、市參事會員となり、Commissioner of the Customs【税關長】となつた。』ジェイムス二世朝の議會に選出されるや、ノースは驚くべき短期間に、金融事項に於ける下院の指導者として頭角を顯すことができ、而も全く政府の意志に惟れ従つた。——斯様な人物が、ステュアート王朝の顛覆によつて、痛切な不安に陥るべき理由があつたことは、自ら明かである。彼の著書は、疑問の餘地なき功績を現はしてこの危険な立場を改善しやう、と言ふ希望を以て書かれたやうに思はれる。ノースの貿易自由論が奇矯なこと

は、彼自らよく謹つて居りこれを呼ぶに『それ自體正しいが、それと同じ程度に於て、多數人にとつては珍奇なる逆説』（序文）と言つてゐる。それ故ノースは、また萬一を慮り、この書は一人の友人によつて著はされ、彼は唯だこれを刊行したゞけであるかの如くに、装つた。併し、彼の信ずるところによれば、『自由と財産』なる合言葉を高唱する革命は、自由貿易論を非常に有利と認めるであらう、といふにあつたらしい<sup>1)</sup>。ところがノースのこの推測は、非常に誤つてゐた。英吉利では、革命が却つて、外國並びに自國の植民地に對する保護貿易及び貿易禁止制度の最高の發達を促した。我がノースの驚愕は、如何ばかりであつたらう。そこで彼のやうな性格の人物が、世に容れられない眞理を立派な形で公刊したのを、痛く後悔したことは必定である。彼の著書の百年以上に亙る不可解な湮滅は、斯う考へれば、正に簡単に解釋がつくであらう<sup>2)</sup>。

1) 政治上の大變革が國民生活を震撼しその束縛を解いた時代には、當面焦眉の諸問題から遠く離れてゐる他の領域に於てさへ、異端の諸見解が發表され、それが何の顧慮もなく極端にまで辯護されることは、決して稀ではない。Declaration of Rights【権利の宣言】起草に先立つ、千六百八十九年二月二日に行はれた、注目すべき議會討論だけでも、想ひ起すべきである。

2) 既にロージャー・ノースは、兄弟たちの傳記中で、經濟學の諸對象に關するサー・ダッドリーの深奥な諸見解を述べるに當り、彼の著書は金を



書物全體は、序文、利率引下げ論、鑄貨論の三部に分れ、その上、なほ追録の中には、凡ゆる注意が附け加へられてゐる。我々は、その思想を比較的體系的な順序に纏めるであらう。

富は、缺乏よりの自由及び多くの便宜品の享受と同じ意味を持つ。假令金銀は少しも存在しなくても、我々は富有となり貿易を通じて他者の餘剰を我がものと爲し得るであらう。彼は、富の源泉として勤勉を擧げる。

(Commerce and trade first springs from the labour of man. 【商業と貿易とは………第一に人間の労働から生ずる。】)(一二頁) 勤勉は、土地の果實又は工業上の生産物を造り出す。これらの財貨中金屬は、更に諸金屬中でも金

出して最早一部も手に入らない、と附言してゐる。(Life of Lord Guildford. p. 168. Life of Sir Dudley North. p. 180 ff. 兩書とも四つ折版である。)【譯者は兩書とも見ることができなかつた。】そこでこの傳記中に傳へられた諸抜萃文は、多數の専門家を驅つて、原本に對する入念な搜索をなさしめた。併しそれは徒勞に終つた。この書は失はれた昔の古典と同じ方法で、再發見されざるを得なかつた。そしてこの發見は實に偶然にも、有名な錢貨學者ルーディング【Ruding】の藏書賣立に際して行はれ、後千八百二十二年、エディンバラ【Edinburgh】で、その新刻が企てられた。今私の面前にある版は、千八百四十六年エディンバラのアダム・アンド・チャーレス・ブラック書店【Adam and Charles Black】刊行の四つ折版四十二頁の書物である。【商科大學圖書館は、ロッシュ引用の千八百四十六年再刻版を藏するのみならず、千六百九十一年刊の原本をも藏してゐる。】

銀は、他のものより本來美しくて量が少いから、特に高く評價される。これらのものが共通の交易尺度として用ひられる所以は、多分法律に基くものでなく、それが少量を以て高價となり、保存運搬に際し滅失せず、便利なるが爲めである(二頁以下)。貴金屬自體並びに便宜上これから鑄造された鑄貨には、甚だ適切にも二つの異つた利用を歸屬せしめてゐる。その一は、一種の度量衡として商業を容易ならしめてふ利用であり、更にその二は、節約された資本を永續的に貯藏するといふ利用(a proper fund for a surplussage of stock to be deposited in. 【資本の餘剰を貯藏すべき適當な基本】)(一六頁)これである。貨幣は、一つの商品で、これに就いては、過剰も起れば不足も起り得る(序文)。一國民の商業は、如何なる時にあつても、たゞ一定の貨幣量を必要とするだけであるが、この一定の貨幣量は、事情の如何により、或る時は大きくもなり、また或る時は小さくもなるべきものである。例へば戰時には、誰でも緊急の場合の備へを持たうと欲するが故に、貨幣需要は比較的大となり、平時には諸の支拂が比較的安に行はれる爲め、前とは全く反對となる。而も貨幣の干満は、政治家たちの干渉がなくても、それ自體既に調節される。貨幣が少量で而も退藏される場合には、造幣局は活動し、遂にはその不足も再び充たされるに至り、他方平和



の爲め、かの貯藏貨幣が誘ひ出され、通貨が過剰に流通する場合には、造幣局が活動を止めるのみならず、貨幣の過剰分も忽ちにして溶解し去られ、或る時は國內用に又或る時は輸出用となる（追録）。従つて、一國民は、その通常の交易にとつて必要以上の貨幣をも持ち得ないし、また必要以下の貨幣をも持ち得ない（序文）。それにも拘らず、人々は商業沈滞に襲はれたとき<sup>1)</sup>、その原因として貨幣不足を叫ぶのを常とする。何と馬鹿げたことであらう。抑、何人と雖も、それ自體の爲めに貨幣を求めたものでない。例へば、乞食はこれに代へてパンを購ふ爲めであり、小作農は穀物家畜その他を賣る爲めである。この販賣が不可能なときは、必ずやその根柢に於て、次の三原因中の一つが横はつてゐるのである。内國市場の在荷過多か、對外通商の擾亂（多分戦争に由るところの）か、或は最後に貧困による消費減退の何れか一つが、即ちこれである。従つて沈滞は、貨幣量の増加によつては除き得ず、唯だ上述諸原因の除去に依つてのみ、除き得るに過ぎない（一一頁以下）。

貿易均衡に關する通説は、ノースの明かに左袒する能はぬところであつた。

1) 恰かも當時英吉利には、大きな生産恐慌が起つてゐた。ロツクもこれを取扱つてゐる。これは、國內に起つた革命と、同時に國外で起つた戦争とから生じた、甚だ明白な一結果である。

彼から見れば、佛蘭西貿易東印度貿易地金貿易に反對する多くの饒舌は、均しく根據を缺いてゐる序文。何人と雖も、貨幣銀器その他の形に於て財産を持つてゐるが故に、より金持となるのではない。否、斯様な財貨を直接放置すれば、彼は却つて貧しくなるであらう。財産を増殖すべき状態に於て握つてゐる者こそ、最も富んだ者である（一一頁）。この理は、國民全體に就いても同じである。戦争の目的で輸出された貨幣は國民財産の減少であるが、それと反對に、商賣上輸出された貨幣はこれが増殖である（序文）。何となれば、商業は、過剰物の相互交換以外の何物でもないから（二二頁）。貴金屬の輸出を禁ずることが如何に愚であるかは、この主義を個々の商入又は個々の都市に於ける諸關係に移して見れば、最も明瞭に判かる。商品のみを輸出して貨幣の輸出を許さない都市は、暫時にして凡ゆる交易から遮斷され、その結果困窮に陥るであらう。ところが、商事に就いては、個々の諸國民の世界に對する關係は、個々の諸都市の國家に對する關係、個々の諸家族の都市に對する關係と、全く同じである（二三頁以下）。貿易に於ては、世界全體は單一の國民を形づくり、個々の諸國家は、この國民中の個々人に當るに過ぎぬ。それ故、一國民に於ける貿易上の損失は、全世界の貿易に於けるこれに相當したゞけの損失と見做さなけ



ればならない(序文)。従つて、貨幣の輸入も、本質上は、例へば丸太の輸入の如きと、有利の程度に於て實際異るところがない。相當な相異點があつたところで、それは高々、過剰に所持する必要ある場合には、貨幣の方が比較的運搬し易いといふくらゐに過ぎない。それ故、如何なる國家と雖も、何も夢中になつて貨幣保有高の心配をする必要はない。富んだ國民なら、決してこれが不足に憊むことはないであらう(二七頁)。——これと關聯して、ノースは、國內商業をも、相當に尊重してゐる。普通所謂富なるものは (plenty, bravery, gallantry 【豊富華美豪華】)、外國貿易なくしては維持するを得ないが、外國貿易もまた、內國商業なくしては維持することができない。兩者は相關聯してゐるのである(一五頁以下)。

著者は、地代と資本、利子との間には、充分な併行關係を認むべしと考へる。所謂 Interest 【利子】なるものは、Rent for stock 【資本貸子】以上の何物でもなし。Stock-lord 【金主】は Land-lord 【地主】に相當する。ノースは、過剰な土地及び資本がこれを必要とする人々に貸貸される、といふ事實だけからして、この兩者の所得を巧みに説明する。併しこの場合、地主は資本家以上に一個の利益を持つ。即ち、借手が土地を盗むことは不可能である。

この比較的大なる安全性があればこそ、地代は資本利子より低位になければならぬ。後者の大さは、凡ゆる商品の價格と同じく、借手の數と貸手の數との比率如何に依つて定まる。従つて、低い利率は貿易を増加せしめるものである、といふわけには行かない。寧ろ國民の資本を増加する貿易こそ利率を低くするものである、と言はねばならぬ(四頁以下)。利率切下げの爲めの凡ゆる強行法は、ノースの非難するところである。高い利率こそ却つて、然らざる場合恐らくは庫中に隠くされ又は裝飾等に使はるべき總ての現存貨幣を、貿易の方に導くものである。更に、甚だ異つた安全率の貸金に就いては、同一の利率が適當する道理はない。この點に關して強制を加へれば、大多數の貸金は、浪費を事とする領主たちの消費を奨励する爲めに貸し出されることとなり、従つて貿易より寧ろ奢侈に役立つこととなるであらう。故に世人が屢、賞讃する和蘭國民に就いて、我々の特に追隨すべき點は、利子の大きさの決定を全く債權者及び債務者間の自由交渉に委せたことこれである。貧しい國では、利率は高くなければならぬ。それを妨げる諸法律は、必ずや脱法せられるに至るであらう。何となれば、商品の掛買を通じ全く任意の價格で借入れを行ふが如きは、立法の決して妨げ得ないところであるから(六頁以下)。禁止令の脱法が可能



でないとするれば貿易の方が却つて減少するに至るであらう。これ、適當な利率のない處では、貸借は消滅するが故である（八頁）。

尙ほノースは、別の章に於て、貿易の自由に賛成してゐる。商事に於ける大抵の誤謬の由つて來るところは、個々の人々が自分たちに直接な私的利益を以て、善惡の一般的標準と見做す點に存する。そこで、自分自身の商賣で幾らかでも儲ける爲めには、その際如何に多くの他人が損失を被つても、少しも意に介しない輩が、澤山ゐるのである。何等かの賣るべき物を持つ者は誰でも、他の人々が自分に對して高い價格を支拂つて呉れるやうに、法律で督勵して欲しいものだ、と考へる。而も自分自身は、自由市場による諸利益に就いては、何一つ失ふことをも欲しないのである。ところが、一つの貿易部門又は連中に對し、他者以上に與へられる恩惠は、何れも濫用であつて、その程度に従ひ公益を減少せしめる。人々を強制して規則通りに通商せしめることは、これを利用する人々にとつては利益となるであらう。併し一人の臣民が獲るところは他の臣民が與へるところに限るから、國家はこれによつて寸毫も利益するところがない。如何なる商業でも、公衆にとつて不利益ではあり得ない。若し不利益だとすれば、人々はこれを中止すべきが故である。

苟くも商人たちの繁榮する處では、公衆——商人はその一部分を構成する——もまた繁榮する。如何なる法律も、商業に價格を命令することはできない。商業は自らこれを決定せねばならず、またこれを決定するであらう。若し夫れ法律の側から働き掛けることがあるとすれば、それは商業の妨碍となり、従つて有害である（序文）。總てこれらの理由に據り、如何なる國民でも、國家の政策によつて富有を致したものは、未だ嘗てない。否、商業と富とを與へるものは、平和と勤勉と自由とであつて、他の何ものでもない（追録）。

若し平和が確保され、正義が維持せられ、航海が束縛されず、工業家が獎勵されて、その財産と性格とに應じ、名譽と政府の公務とに與からしめられるときは、國民の資本は増殖し、従つて金銀は充實し、利率は低下し、貨幣の不足することはあり得ないであらう（二二頁以下）。

——ノースは、奢侈禁止法に對しては、殊に甚しく反對する。これらの法律は、通例貧しい國々に於てのみ見出されるところで、これこそ、その國に於ける貧窮の共働原因と見做さるべきものである。人間の無限な欲望は、活動（Industry and ingenuity）【勤勉と機敏】に對する、最も重要な刺戟である。若し人間が、必要缺くべからざる物のみを以て満足すべしとするならば、世界は貧窮となるであらう。茲に一つの法律があつて、人々の支



出を彼等自身行ふべかりし限度以上に制限するときは、それは同時に、彼等の活動を脅威することとなり、然らざる場合彼等の欲望の完全なる充足の爲めに發展せしめたであらうと考へられる活動をも、阻止することとなるに相違ない（一四頁以下、追録）。

當時甚だ緊急な問題であつた鑄貨政策<sup>1)</sup>に關して、ノースの與へた諸提案は、彼の交易自由論と完全に調和してゐる。そこでノースは、凡そ惡貨改鑄なるものは、その重量に於て爲されやうが、品位に於て爲されやうが、何れも詐欺であつて、債務者たちの利益の爲めに債權者たちに不利を與へ、而も國民財産に對しては些少の利益をも與へるものでない、と稱する。といふのは、この場合、單に稱呼だけは變へ得るとしても、鑄貨にとつて意義ある唯<sup>1)</sup>のものは、その内在價值なるが故である（序文、追録）。同様に造幣料なしに鑄貨を鑄造する英吉利の慣例に對しても、激烈な言葉を以て反對の意志を表明してゐる。曰く、斯くの如きは、絶えず銻解鑄造しつゝ、公共の費用を以て金鍛治と鑄造業者とを養ふ爲めの、不斷の運動である（序文、一一、一八頁）と。

1) 次章參照。

以上は注目に値する本書の主たる内容である。その特長描寫と嘆美との爲めには、次の言葉に優るものはあるまい。本書は、極めて僅少些末の變更を加へれば、少しも怪訝の念を起さしむることなしに、アダム・スミスの『國富論』中の一章を、それと類似の諸長所及びそれと類似の諸短所を含めて、作成し得るであらう。文體も獨特の興味を惹く。即ちそれは飾り氣なく自由であるが、力強い男らしさと機智に富んだ簡潔さを持つ。確かに著者は、爾かく單純な言葉を用ひ大した論理上の道具立てもなしに書いたことにつき、長々と序文で言ひわけする必要はなかつた筈である。尙ほ著者は、その對象を『哲學的』に把握したと自負してゐるが、それは、斯く言ふことによつて、十七世紀に甚だ光輝ある役割を演じ、殊に自然科学を甚だ有力に改革した *philosophia nova* 【新哲學】を想つてゐるのである。『古い哲學は、眞理より寧ろ抽象に拘泥み、有り餘る程の疑はしい捕へ難い原理を生み出す爲めに、諸の假説を形くるに没頭してゐた。例へば *in vacuo* 【空虚なる空間】に於ける諸原子の直線進路又は斜行進路質料と形相缺性中實球體 *fuga vacui* 【真空の逃避】その他これと同様な多數の假説の如きは、これである。併しそれによつて我々は何等確實なものを獲なかつた。然るにデカルト *Descartes* の卓拔な著書『方法論叙説』



De methodo】即ち現代に於て甚だ多くの承認と賛成とを見出してゐる著作の公刊以來、これら總てのシメラ【獅頭羊身蛇尾の怪物】は、忽ちにして消え失せた。そしてそれ以來、我々の知識は大部分機械的となつた。茲に機械的といふ言葉は、明瞭な諸眞理の上に立てられた、といふことを意味すると説明する以上、更に立入る必要はないであらう【序文】<sup>1)</sup>。これ即ち、ベイコンによつて開かれ、デカルトの特に數學的な諸勞作によつて繼續され、倫敦王立協會の『哲學論叢』で完成され、遂にニュートンの『自然數理哲學原論』(Newton: Principia philosophiae naturalis mathematica. 1687)に於てその頂點に達した、有名な學問的傾向を意味する。この傾向、これが尊敬すべき代表者、而も我々に最も縁の近い領域に於ける代表者に屬する者こそ、即ち、サー・ウィリアム・ベティとサー・ダッドリー・ノースとである。

1) 尙ほ私の同僚にして友人なるゲー・ハルテンシュタイン[G. Hartenstein]は、言ふまでもなく多くの異質的なものを混交してゐる上掲箇所から見て、ノースは本來の哲學には事實通じてゐなかつた、といふ結論を引き出したが、それは確かに正しい。東洋に於て而も商賣で送られたノースの青年時代は、斯かる研究を碍げたであらう。そして彼が、外觀的該博によつてこれを隠蔽しやうと思つたことは、宜しいことではない。

## 第十章 哲學者 ロック

英吉利國民經濟學が十七世紀の間に成し遂げた進歩が如何に大きかつたかは、ジョン・ロック【John Locke】(一六三二—一七〇四)をフランシス・ベイコンと比較して見れば、最も明瞭に判る。前者は、哲學といふ普遍的智識に於ては後者に劣つてゐるが、經濟學といふ特殊部門に於ては、正にそれと同じくらゐ後者を凌いでゐる。が兎に角、哲學史上に於けるロックの活動と名聲とを基礎付けてゐる同じ諸特色は、彼が經濟學上の諸著作に就いても、容易にこれを指摘することができる。即ち一方では嚴密な經驗論、個々の事實の冷靜な觀察と分析。これこそ凡ゆる觀念論や唯理論に對立するものである。而も尙ほこれと同時に、凡ゆる認識の最終の根據を求める潑刺たる努力。これこそ所謂生得の眞理てふ偶然的多様に満足せしめず、彼をして我がカントの先驅者にまで高めたところのものである。そこでロックは、國民經濟學の領域に於ても、一人の著述家から他の著述家へと機械的に傳誦され來つた多數の半ば正しい主張や前提から、これが一知半解の定り



文句をむき取り、鋭く観察され、厳密に分析された諸事實に還元したのである。彼は實に、凡ゆる國民經濟學的迷信に對する反對者である！併し、多數舊來の經濟學者たちが、全く個々の實際問題だけを研究したのに對し、ロックは特別の興味を以て、斯學の最も普遍的なる理論的根據、即ち、經濟學のうち心理學の領域に最も近く接する部門に没頭し、驚く程完全にこれを取扱つてゐる。誠にロックは、國民經濟學に於ける最初の偉大な體系樹立者であり、然る限りに於てアダム・スミスの尊敬すべき先驅者である！——最後に、ロックが經濟學上の諸勞作に於ても、英吉利革命の精神は否定すべくもないが、この點に就いては、ジェイムス二世暴政の有名な犠牲者、毀譽褒貶の甚しかつた信教自由の使徒、英吉利自然神教論の父にあつて、殆んど言及する必要はないであらう。

經濟學上に於けるロックの極めて豊富な勞作は、理論に對する著者の非常な嗜好にも拘はらず、實際問題を機縁として著はされた。『利子引下げ論考』(Some considerations of the consequences of the lowering of interest and raising the value of money. In a letter sent to a member of parliament. 1691.) 『貨幣價值引上げ再論』(Further considerations concerning raising the value of money. 1698.) 第一の論文中、法定利子引下げの結果を論じてゐる部分は、序文

の言葉に従へば、その公刊に先つ約二十年、即ち、大體、サー・ジョサイア・チャイルドとその反對者との間に於ける論争<sup>1)</sup>によつて興へられた印象が、まだ残つてゐた時分に、執筆されたものである。併し、所謂貨幣價值の引上げは、ウヰリアム三世治世の最初の七年間、公の諸討論に於ける甚だ普通の題目であつた。英吉利の鑄貨制度は甚だ悲むべき状態にあつて、ルキ十四世の如きは、これによつて當時の政府の没落を期待した程である。銀に比較すれば、金は國家によつて餘りにも高く評價された。正規重量の銀貨は大部分輸出されて了ひ、國內自體では毀傷銀貨のみが流通し、これと並んで新しく出された良貨は直ぐ様その姿を消したのは、實にこの理由に基く。その結果總ての物價は騰貴し、國內の信用も外國との通商も、共に甚しく攪亂された。當時、この悪弊を如何にして除去すべきかといふことに就いての數多い提案の中、一頭地を抜いてゐたものは、大藏省の一官吏ウヰリアム・ラウンズ【William Lowndes】の『銀貨改鑄論』(An essay for the amendment\* of the silver coins. 1695.)であつて、その書は約二割四分の品位輕鑄を唱へた。そこでロックは斷然これに反對し、總ての毀傷貨幣を單にその重量に従つてのみ受授すべしとする法

1) 上述一二六頁參照。



律以外、何等必要なものはない。斯うすれば、爾後縁の剪り取りは直ちに行はれなくなり、正規重量の貨幣は再び出現するに相違なく、交易上一瞬間と雖も貨幣の不足に悩むことはなくなるであらうと論じた。結論に於てロツクは、本論の實際上の内容を、次の言葉を以て概括してゐる。『我が現在の縁刻貨幣【milled money】【ロツクは milled money を意訳して vollwichtiges Geld と云つてゐる。當時英吉利には Hammered money と言はれた舊鑄貨と milled money と呼ばれた新鑄貨とが並存してゐた。前者は極めて幼稚な造幣技術を以て造られ、量目形態共に不齊一で、縁刻みなく、偽造變造するに容易であり、且つ屢、縁の毀傷が行はれた。clipped money とは即ちこれで、ロツクは Beschmittenes Geld と譯してゐる。そこで milled money が新たに造られるに至つたのである。これは進歩した造幣技術によつて鑄造され、その品位重量又は價值を變へなければならぬのは、抑、何故か。私にはその理由が少しも判らない。私は、この貨幣こそ今までに鑄造されたものうち最良の、而も偽造變造または毀傷【ロツクの原文には、茲に次の一句が挿入されてゐる】の他如何なる方法にてもあれ、これが詐欺的に減少せしめられること】から最も安全なものであると考へる。それは、【ロツクの原文には、茲に次の一句あり、我々の貨幣が還元せらるべき】法定の諸支拂諸計算その他【ロツクの原文では『その他』に適合せしめられてゐる。これが稱呼の引上げは、寸毫と雖もその價值に附け加へるところなく、我々の貨幣保有高をより、よく現狀に適合せしめるに至ることなく、一粒の銀と雖も英吉利に齎らさず、公衆に鑑一

文の利益をも與へない。それは唯だ、王と臣民の大多數とを欺き、萬人を惑はすこと、並びに縁刻貨幣と毀傷貨幣との双方を總て改鑄するといふ、全く【英原著の『全く』といふ副詞がない。】不必要な費用を國家に負擔させることに、役立つだけであらう。』【全集】第十二版 第四卷二〇四頁】 ロツクの勸告は、千六百九十六年乃至九十八年の大改鑄に際し従來の貨幣品位が維持せられたといふ限りに於て、充分効果があつた。——この兩論文以外にも、我々の目的にとつて重要なものは、『民政二論』(【Two】 treatises of government. [In the former, the false principles and foundations of Sir Robert Filmer and his followers, are detected and overthrown; the latter, is an essay concerning the true original, extent, and end, of civil government. London 1689.]) 中の『財産に就て』(Of property)なる章(第二編第五章)と『貧民救助に關する報告』(The report of the board of trade to the Lords Justices, respecting the relief and employment of the poor. [London 1698.])<sup>1)</sup>及び最後には、千七百四年刊行のチャーチルの勞作『航海全集』(Churchill: Collection of voyages.)——本書は簡単な航海史を含んでゐる——に對する緒論である。後者に於てロツクは、特に探檢旅行の諸利益を賞揚し

1) ロツクは、この役所の最初の Commissioners【委員】の一人であつた。サー・エフ・エム・イーデン『貧民の狀態』第一卷二四四頁以下参照。



てゐる。【本書で引用された明言されてゐないが、ロックの『全集』の引用頁数は、千七百四十年の第四版（全三巻）と全然符合し、その第十版を利用する。『全集』の頁数は、千七百四十年の第十版を利用する。『全集』の頁数は、千七百四十年の第十版を利用する。『全集』の頁数は、千七百四十年の第十版を利用する。』

國民經濟學上最も大きな事實根本的な意義を持つものは、就中、私有財産の起源に關するロックの諸見解である<sup>1)</sup>。惟へらく、理性と聖書とに従へば、土地は人類に對し共有財産として

1) 『民政二論』第二十五節乃至五十一節。英吉利革命の公文書・議會演説その他に於て property【財産】なる概念が演じてゐる偉大な役割を語るものは、ロックのこの研究の時代的意義を看過しないであらう。而も所有權概念の斯かる取扱ひ方は、永久に國民的なものとして残つた。自由黨のフォックス【Fox】は、その最も重要な演説の一つに於て（千七百八十三年十二月一日 East-India-Bill【東印度法案】に就いての）、自由に關する正統派的定義を組立てたが、その演説は、次の言葉を以て始つてゐる。It consists in the safe and sacred possession of a man's property etc.【それは、人の財産の安全にして神聖なる所有に存する、云々】。尙ほ上述一〇六頁以下参照。ホッブスとロックとは、ルーソー【J. J. Rousseau】以來甚だ大きな意義を獲るに至つたあの論争を、極めて特徴的に代表してゐる。その論争とは、即ち、所有は國家の認承に基くか、將又、個人の労働に基くかといふことこれである。この二つの學說中、專制的なホッブスが前説に、自由を好むロックが後説に賛成してゐる點を、看過されなことを祈る。

授けられたものである（第二十五節）。然るに各人は、自己の人格と労働との獨占的所有者であるから、彼の労働によつて土地から言はゞ解放したものは、即ち彼の労働と融合したものは、これを自らの手に收めることができる、少くともその社會に於ける他の成員の分として、尙ほ充分に残つてゐる限りでは（第二十七節）。抑、斯くの如き占有が行はれないとすれば、共有地の利用は到底考へ得べくもない（第二十六節及び第二十八節）。泉の水は萬人に屬するとしても、水瓶のうちにある水は、これを汲み入れた者に屬する（第二十九節）。勿論、自ら消費し得るところ以上のものは、所有するを許さない。これ獲得して而もこれを腐敗するに委せる權利を持つものは、一人もないからである（第三十一節）。同じことは、土地に就いても當て筈まる。即ち誰人でも、自ら開墾したところのものは、彼自ら所有することもできる（第三十二節以下）。而して天地開闢の時には（否、な）今日に於てさへ他人の分としてはまだ充分豊富に残存してゐた（第三十八節及び第四十五節）。『神自身は、土地を開拓すべしと命ずることに依り、その範圍内に於てこれを所有するを許した。而して労働と労働對象とを必要とするてふ、人間生活の條件は、必然的に私有へと導かざれば止まない』（第三十五節）。『更に労働の所有が、土地の共有より優越し得べきことは、一



寸見ると奇妙のやうに見えるが、事實は爾く奇妙なものではない。何となれば、労働こそ、實に萬物に種々異つた價值を賦與するものであるから。煙草又は砂糖を植え小麥又は大麥を蒔いた一町歩の土地と、耕耘の行れてゐない【ロツクの原文ではこ 共有として横はつてゐる】同じ一町歩の土地との間には、如何なる差違があるかを考へても見るがよい。然らば、労働による改良が、殆んど大部分の價值を作つてゐることを見出すであらう。思ふに、人世にとつて有用な土地生産物のうち、その十分の九は、労働の結果であると言つても、それは極く中庸を得た計算に過ぎないであらう。否、若し我々が使用されるに至る諸物を正當に評價し、これに關する種々なる經費に就き、これだけは純粹に自然に基き、これだけは労働に基くと計算するならば、大抵のものにあつては、百分の九十九までが、全然労働の勘定に入ることを見出すであらう【第四十節及び第四十三節。ロツクは、その證據として、帝王の如く大きな肥沃の土地を持ちながら、その衣食任は英吉利の日傭に劣る、かの亞米利加の酋長たちを指摘してゐる（第四十一節）。『辨實よりパンの方が、水より葡萄酒の方が、木の葉や皮や苔より羅紗または絹物の方が、價值がより大であるといふこと、このことは全く労働と經營とに基因する』（第四十二節）。——更に貨幣の發

明は、所有權史上に於ける一時期を劃してゐる。原始状態に於て人間が索めた大抵の財貨は、生活資料の如く直ちに滅失し易いものであつた。これらのものゝ貯へを集積して、然る後にこれを腐敗せしめることは、誰人にも許されてゐなかつた。併し、滅失し易い商品物を他人に與へ、これと交換されたより、耐久的な財貨を、（多分杏實の代りに堅果を）繼續的に使用する目的で貯藏することは、差支へがなかつた。このことは、労働により獲得したものにして而も使用し得る物は、所有して宜しいといふ原則と、全然相關聯してゐるところで、これらの耐久的な財貨の中に優先的に算入さるべきものは、貴金屬である（第四十六節以下）。然るに人間の異つた労働能力は種々異つた獲得能力の基礎ともなるものであるから、貨幣の發明は則ち人間に與ふるに、その獲得したものを貯藏しこれを増殖する機會を以てしたのである。貨幣のない處、即ち耐久性があり稀有で而も貯藏するに足る程價值大なるものが存しない處にあつては、家族の消費に利用し得る限度以上に、土地所有を擴張しやうと志す人が居ないことは、必定である。所有者たちが、自家生産物の買却により、他人から貨幣を獲得することを期待し得ぬ、亞米利加内地では、一萬町歩否な十萬町歩の最良の土地が耕され、家畜を供給されたとしても、果してそれに幾許の價值が



あらうぞ。』(第四十八節)

斯くてロツクは、ホップスとベティーとに次ぎ、價值と富とに關するかの國民的英吉利的見解の——リカルドとその學派とに於いてその頂點に達したところの——最初の代表者に屬するが所謂順なる貿易均衡のみが眞に富有を致し得るに過ぎないてふ見解に對する賛成に至つては、彼に於ても依然として見出されるところである。Spending less, than our own commodities will pay for, is the sure and only way for the nation to grow rich.【我が國自體の商品が支辨するに足るべき額以下を支出することこそ、國民が富有となる確實無二の方法である。】<sup>1)</sup> Riches are got.....by consuming less of foreign commodities, than what by commodities or labour is paid for.【富を獲得する途は.....商品又は勞働に依つて支拂はれるところより少量の外國商品を消費すること、これである。】(第二卷一二頁【第十二版第四卷二二頁】)。In a country, not furnished with mines, there are but two ways of growing rich, either conquest, or commerce.【鑛山を持たない國に於ては、征服か貿易か、この二途以外には富有となる方法がない。】(八頁【一三頁】)。更に十頁以下【十八

1) 『論考』(『全集』第二卷三六頁【第十二版第四卷七二頁】)。

頁以下]貿易均衡に關して爲されてゐる根本的な研究も、これと關聯してゐる。

ロツクの價格理論は、非常に完全である。『凡そ賣買されるものは、買手が餘計に居るか賣手が餘計に居るかに従つて、或は高價となり或は廉價となる。買手が多くて賣手が少ければ高くなり、賣手が多くて買手が少ければ廉くなる。それ自體又は一定の尺度と比較された一物の價值は、その分量が販路(vent)に比して少ければ少い程、愈、大となる。ところがこれを他のものと比較するか又は交換するときはその双方の價值の計算に當り、その分量及び販路をも顧慮しなければならぬ。一商品に於ける善き性質の存在増加乃至減少は、それによつて、分量乃至販路が相互の關係に於て、大となるか又は小となる限りに於てのみ、そのもの、價格を騰貴せしめ又は下落せしめ得るに過ぎぬ。』(二〇頁以下【三九頁以下】)。今日我々が使用價值と名けてゐるものは、ロツクに於ては、『自然的內在的價值』と呼ばれ、彼は、これを以て、人生の必要または便宜に役立つ物の性質と定義する。併し、何等かの物が、その一定量を他の或る物の一定量と不變的に同値たらしめる如き、使用價值を持つことは、ロツクの斷然否認するところである(二二頁【四二頁】)。これに反し、各商品の販路は、それが人間の考へ(勿論屢、非常に氣紛れな)に従つて必要乃



至有用なりてふ事實に倚存すとするには、ロックも賛成してゐる（一六頁【三〇頁】）。この原則の例として、ロックは既に、かの水——必要缺くべからざるものではあるが、それにも拘らず、その分量が消費に對して甚だ少量となつた時にのみ、價格を獲るに過ぎない——を擧げてゐる。我々が小麥の中に結石病を癒すてふ新しい性質を發見したとき、小麥は、これによつて無論より、有用とはなるであらう。併し販路と分量との比例がこれによつて變化することはまづないであらうから、小麥は必ずや騰貴しないであらう。同様に、ホップは、一年中最も悪いときに最も高いのが、普通である（二二頁以下【四〇頁以下】）。

——不變な價格尺度の要求は、ロックの方がベティーより、遙かに高い程度に於て充たしてゐる。曰く、最上等の製麵麩用穀、從つて英吉利では小麥は、長期間殊に永久地代決定の爲めには、最も適當な價格尺度である。勿論年々に就いて見れば、その收穫が異なる爲めにその價格は激しく變動する。併し七年乃至二十年を一括するときは、小麥は毫も流行に従はず、偶然に發芽せず、その生産は恐らくでき得る限り充分に消費を基として採算されるものたること、明かであらう。貨幣にあつては反對である。といふのは、その販路は絶えず同一で、その分量は徐々に變るだけであるから、二三年をとつて見れば、それは變動し

た他の諸商品の價值を最もよく測定し得るが、反對にそれは、例へば今日では、二百年以前の價值の十分の一に過ぎないのである（二四頁【四六頁】）。

貨幣に就いては、ロックは、多くの卓説と多くの謬説とを相混交して述べてゐる。

貨幣は一個の商品たること他の商品と同じである、とロックは卒直に述べる（一九頁【三六頁】）。貨幣の流通に關する重要問題に對しては、言ふまでもなくロックは、ある個所に於て必要な注意を拂つてゐる。彼は考へる、何れの國に於ても、地主や労働者や商人たちの信用を維持するだけの貨幣は、必要である。併しこれに該當するものが幾何であるかは、決定すること困難である。何となれば、それは常に貨幣の分量に懸るのみならず、その流通速度にも懸るから。同一のシリング貨は、ある時は二十日間二十人に支拂ひ得るが、他の時には一人の手中に百日間も止まる。例へば労働者たちが毎週勞銀を支拂はれる場合には、勞銀支拂がより長い間隔を置いて行はれる場合より、この流通部門に必要な貨幣量がより少かるべきは、明白である。そこでロックは、英吉利内の貨幣需要を、大體、毎年の勞働賃銀の五十分の一、あらゆる地主収入の四分の一、商人たちが年々現金で受取る額の二十分の一と見積つてゐる！。

1) 上述一七〇頁参照。



取引を停滞せしめぬ爲めには、最も少く見積つても、この金額の半分は、常に現金として存在せねばならぬ（一三頁以下【二三頁以下】）。例へば小作料が今より短い期限で支拂はれることに由る流通速度の増加は、これに依つて多額の貨幣節約が可能となる限りに於て、甚だ望ましいこととなる（二四頁【二七頁】）。この理由から、ロックは、仲介商人たちの人数が眞の必要を越へることや、博徒等が本来の交易から貨幣を撤去することを、甚しく非難する。併し諸製造工業就中、主として労働に頼るところの工業を奨励することは、特に推稱する。蓋しそれは、比較的最少限の現金を以て、その取引を行ひ得るからである（一五頁【二八—二九頁】）。——併し勿論ロックが、貨幣の価格は他の諸財貨の多少に對比された貨幣の多寡のみに懸ると絶えず主張してゐるは、上の諸見解と甚だ矛盾撞着する（一六頁【三一頁】）。何となれば、貨幣に對する欲求は、殆んど常に而も到る處に於て同一であるから、これが販路の變動は極端に少い。貨幣の不足を容易に補ひ得べき他物は存在しないから、その稀少性の増加はその価格を高め、それに對する逼迫を増す<sup>1)</sup>。従つて貨幣量の減少は、常に同一量の貨幣がより、多量な

1) 而も千六四九十四年には、英蘭銀行が創立されたのである。それ程までに、ロックは實際問題に於ける發明的天才ではなかつた。

る他物と交換される作用を持たざるを得ない（二二頁【四〇頁】）。各人は喜んで無制限に貨幣を受取りこれを保有するが故に（because it answers all things【何となれば貨幣はあらゆるものに應ずるから】）、貨幣の販路は常に充分である、否な充分以上である。従つて、他の諸商品に於ける如く、分量と販路との間の如何なる關係をも願意することなく、その分量のみを以て既に、その價值を決定するに足る（二三頁【四五頁】）。英吉利の貨幣保有高が半分だけ減少するとすれば、地代の半額は支拂はれなくなり、商品の半額は賣れなくなり、労働者の半額は傭はれなくなるか、乃至は各人が從來通例としてゐた貨幣の半額を以て満足せざるを得なくなるであらう（二五頁【四九頁】）。そればかりか、亞米利加發見以前と較べて、現在十倍の銀が世界に存在するとすれば、各個の銀塊は、依然不變の儘の諸商品に對し、當時の僅か十分の一だけにしか通用しないであらうから（二四頁【四七頁】）、ロックは、甚だ正しからざる歴史的主張に、心を奪はれてゐることとなる。彼はこの貨幣増加の中に眞の致富を認めない。何となれば、多額の金銀の絶對的所有が富有を致すのではなく、他の諸國民と較べての相對的多額所有のみが富有を致すのであるから（八、七四頁【一三、一四八頁】）。高々ロックの意見によつて示されてゐる觀念は、大きな天秤の一



方の皿には貨幣が他方の皿には貨幣を以て購ふべき諸商品が載つてゐて、而もその両方の皿が絶えず平衡状態になければならぬ、といふことに過ぎない。従つて貨幣量が増せば、その個々の個片は他の諸商品のより少き分量に相當し、その反對の場合にはこれが反對となる（二六頁【三〇頁】）。従つて孤立した國は、如何なる貨幣量を以てしても、大體同じ程度に於てその交易を營み得るであらう（二五頁【四八頁】）【三浦梅園、價原參照】。

尙ほロツクは、鑄貨の内在的價値をその外在的刻印から完全に區別することを識つてゐて、その兩論文に於ては、當時甚だしく推稱されてゐた raising the value of money 【貨幣價値引上げ】の諸方策に對し、甚だ倫理的且つ學問的な力ある言葉を以て、憤慨してゐる。『物の價格は、常に、それと交換に與へられる銀の分量に従つて、評價されるであらう。而して若し我々が鑄貨の重量を減少するときはその數量を増加しなければならぬ。これ即ち raising money 【貨幣價値引上げ】てふ大祕密の全部である！』（五六頁【一一二頁】）。<sup>1)</sup> 從來と同一の稱呼に於てより、價値の低い貨幣を鑄造することは、國家による毀傷以外の何

ものでもない。その相違は、次の點に存するのみである。毀傷の場合には、誰人も損失を強制されないが（言ふ迄もなく誰人と雖も、毀傷貨幣を受取る必要はない）官憲による貨幣改鑄の場合には、無論斯る事態が発生するのである（七三頁【一四六頁】）。ロツクは、總てこの種の方法が、債權者と債務者との財産關係をも變更するものであり、而も國家は、これによつて、寸毫の利益をも獲ないことを、注意してゐる（六八頁【一三五頁】）。而して交換用具に於ける事實上の不足を、惡貨改鑄によつて救済しやうと欲するは例へば軍隊に於て羅紗の不足に應ずるに物指の短縮を以てすると、選ぶところなき愚舉である（八八頁【一七七頁】）。——刻印の用に至つては、ロツクは甚だ正當にも、それが支拂に當り一々秤量吟味し難いといふ事實に根すことを見出してゐる（四四頁【八八頁】）。二つの異つた金屬は、同時に法定支拂用具とはなり得ない、との洞見に至つては、彼はその時代の實際家たちに甚しく先立つてゐる。何となれば、英吉利の立法は、周知の如く、千八百十六年に至つて始めて、斯うなつたのであるから。過當に低く評價された方の金屬は、使用されないで庫中に退藏されるか、外國人によつて輸出されるか、或は最後には、法律全體が死文徒法となるであらう。二個の物を價格上不斷に同一なる相互關係に於て維持することは、

1) ルキ十四 治下の佛蘭西に於ても、猶ほ甚だ愛好されてゐた財政策。



恰も重量の變化が種々なる原因に倚存する二個の物を均衡状態に保持すると同じく、不可能なことである。一個の海綿と一片の銀とは假令今日は同じ重量であるとしても、空氣の濕度が變化する毎に、銀は或る時は上り或る時は下るであらう〔四九頁以下〔九七頁以下〕〕。尙ほロックは、銀を以つて國內通貨として最も適した金屬だ、と説いてゐる〔五〇、七六頁〔一〇〇、一五一頁〕〕。彼は、ノースと同じく、總ての鑄造費を國家が負擔するといふ、千六百六十六年以來英吉利に於て行はれ來つた習慣に對する、反對者であつた。金匠その他による諸鑄貨の不生産的熔解を、事實上阻止すべき唯一の方策は、適當な造幣料これである〔九九頁〔一九九頁〕〕。輕卒な幣制改革に就いてロックが非難すべきものと考へてゐる點は、就中、その爲めに、計算の判らない一般人民が、經濟的思考の範圍で思ひ惑ふに至るべきこと、これである〔九五頁〔二八九頁〕〕。

今日我々が三大生産要素及びこれに基く三大國民所得部類を云爲する如く、ロックも既に、經濟上から見て、國民を次の四つの主要階級に分けてゐる。即ち、地主たち彼等の土地は原料を供給する。勞働者たち、彼等はこれに加工する。諸仲介

1) 上述、九六、一〇三以下、一七一以下、一九二頁参照。

者 (brokers) 即ち卸賣商人及び小賣商人等、彼等はこれを消費者の間に分配する。最後には更に、全然貿易に貢獻しない人々、學者、婦人、役者、下男たちその他〔一二、一五頁〔二三、二九頁〕〕。

貨幣及び資本なる概念は、未だ少しも正當に區別し得てゐない。殊に貨幣の價格と資本の利子とは、彼にあつては、實に屢、融合してゐる〔五頁以下〔九頁以下〕〕。capital【資本】の代りに、ロックは何時も money【貨幣】と言ふ。斯くて彼は、十七頁〔三三—三五頁〕に於て、貨幣に賦與するに、第一には交換を通じて諸の欲望を充足し、次には利子に依つて年々の所得を與へるといふ、二重の價值を以てしてゐる。利子獲得能力は、貨幣が本來具有してゐた性質ではない、契約又は法律によつて賦與された性質である。併しこの性質の減少、即ち利率の低減は、他の諸商品に對する貨幣の價格を壓迫するを得ない。何となれば、貨幣の分量はこれによつて影響されず、貨幣の價格は、唯だこの分量のみに懸るものであるから〔二二頁以下〔四二頁以下〕〕。諸貸金の形式的生産能性に就いては、十九頁〔三七頁〕に論じてゐる。彼は同處で主張する、小作農がその土地を以て小作料以上に儲け得る如く、貨幣の借手は借入金で以てその利子以上を儲けることができる、と。而もなほ、その少



し前には、貨幣は不生産的である、と言つてゐる。生産的な土地と異つて、貨幣は何物をも生産することができない、單に協定に依り一人の勞働の結果を他人の懷中に移轉するに止る。——ロツクは常に、警察の價格公定に對する敵であつたが<sup>1)</sup>、それと同様に、法律による利率低下を殊に非難してゐる（四頁以下〔七頁以下〕）。カルペパーやチャイルドとは全く反對に、斯かる法律を施行することの可能性にまで、異論を唱へて言ふ。それは恰も、強制價格を奢侈品に對して制定することが困難であり、必需品に對して制定することが全く行ふ可らざると、選ぶところはない。而も假令利率が斯様な仕方で事實上低下され得るとしても、それは、一つの階級に不當なる贈與をなす爲めに他の階級から奪ふことであつて、全體にとつては無益の業である。斯くし、それは貿易を困難ならしめ、公德を甚だしき危胎に置く。利率を低下せしむべき唯一の實行的にして而も有益な手段は、貨幣量を増加するか乃至は貸借の安全を増進することにのみ存する（三八頁〔七七頁〕）。なほロツクは、凡ゆる利息法に反對してゐるわけではない。當事者たちが何等の利率をも協定しなかつた場合に於ける訴訟の際、並

1) Things must be left to find their own price. 【事物はそれ自らの價格を見出すが儘に放置されなければならぬ。】（一八頁〔三四頁〕）。

びに若い未經験の債務者を法外に極端な高利貸的搾取から保護する爲めには、法定利率を定めて置かなければならぬ（三二頁〔六三—六四頁〕）。——尙ほロツクは、高利率を以て無條件的に貿易の妨害物と見做すことに賛成しない。この點彼の見解は、従來の通説と異なる<sup>1)</sup>。本來、低い利率が貿易にとつて有利なるは、當然である（三五頁〔六九頁〕）。それにも拘らず、エリザベスやジェームス一世やチャールズ一世の治下に於ける英吉利の繁榮を極めた通商と極めて著しい富の増加とは、利率が八歩及び一割に達してゐた時代に起つた。高い利率こそ、寧ろ繁榮せる通商の結果であつた（三三頁〔六六頁〕）。和蘭國民の低い利率は、法律乃至賢明なる商業政策に歸すべきでなく、も、現金の甚しい過剰によつて生じたものである（三四頁〔六八頁〕）。斯くてロツクはまた、外國からの貨幣借入が場合によつては有利となり得ることを疑はない。即ち借手たる内國人たちが、それによつて利子額以上を儲ける場合これである。併し、單なる消費の爲めに外國で借金する國は、第一には消費される諸商品の故に、次にはこれに對して更に支拂はれる利子の故に、二重に貧乏となるべきは、無論である（九頁〔一六頁〕）。

1) 上述一六二、一八九頁參照。



ロックは地代の低下を以て、減退しつゝある國富の確實なる兆候と見做す。併しこれは次の諸原因から發生し得る。(一) 土地の豊度と生産との減退。(二) 何等かの事情によつて土地生産物の消費が減少するか、乃至は市場に對し他處の土地がより、廉價に供給するか、或は最後に、租税が農夫の需要品を騰貴せしめ彼の生産品を下落せしめる場合に於ける、rent of that land【その土地の地代】の減少<sup>1)</sup>。(三) 例へば逆な貿易均衡の結果としての貨幣數量の減少(三五頁【六九—七〇頁】)。反對に土地價格の騰貴は、農耕が改善されるか、又はその國の貨幣量と富力とが増加するに依つてのみ、可能となる(六三頁【二二八頁】)。尙ほロックは現代の發達した地代理論に就ては殆んど豫想さへしてゐなかつたが、このことは彼が詳説する地代利子併行論に於て、最も明瞭に現はれてゐる(一九頁【三六頁】)。彼に従へば、地代と利子とは、全く同一の原因によつて決定され、唯だ土地が種々なる豊度を持つに對し、貨幣は種類を等しくする(一七頁【三三頁】)點に於て、異なるのみである<sup>2)</sup>。然るにも拘らず、地方の異なる

1) 我々は茲に、ロックが往々甚だ輕卒に書いてゐることを看取する。即ち明かに、第一の場合には總收穫が、第二の場合には純收穫が、考へられてゐるのである。

2) 上述一八八頁參照。

により土地價格が利子率の大きさに對して甚だ異つた比例を示す理由については、彼は甚だ立派に説明してゐる。即ち思へらく、諸工業地方に於ては、比較的大きな厚生と熱心な貯蓄とが、土地に對する比較的活潑な需要とこれに對する比較的些少な供給とを生ぜしめる(二〇頁【三九頁】)。地主たちの不良な經濟と莫大な負債とは、よし利子率が如何に低位に在らうとも、土地の價格を引下げ、その反對もまた然るであらう(二七頁以下【五三頁以下】)。なほ土地は、同額の年収益を持つ貨幣より、危險に遭遇すること少く、殊にその生産性を破壊することはより、容易でないから、平均して幾分高價でなければならぬ(三三頁【五五頁】)。

勞銀は、ロックに従へば、原則として、勞働者の諸必需品と一致する。これら需要品の價格が騰貴すれば、勞銀が直接に同じ比例を以て騰貴するか、乃至は勞働人口が貧民救濟基金の負擔となる(一九頁【五七頁】)。他方、その國の貨幣數量が減少したとき、これから生ずる價格に對する壓迫を、先づ感ずるものは地主であるが、次の瞬間には、勞働者もこれを感じずるに至る。何となれば、地代が下落すれば、地主は勞働者を解雇するか、彼等に支拂はないか、又は勞銀を切下げざるを得ないから(三五頁【七〇頁】)。尙ほ斯様な諸變動に於



て、抑、何れの階級が損害を被るべきかを決定する主力戦は、通常地主たちと商人たちとの間に於てのみ發生する。『何となれば、労働者の分前は、纔かに生計を維持する點を超えること減多にないから、この種の人々は、自己の考へをこれ以上に高め、乃至は自分たちの共同利益を求めて比較的富める人々と争ふべき時間も機會をも與へられてゐない。勿論或る共通の大不幸が、彼等を驅つて一般的動搖の中に結合せしめ、體面を忘れしめ、武装した腕を以て窮乏を脱するの擧を敢てせしめるときは、別である。その時こそ、彼等も往々にして富者に襲ひ掛り、洪水の如くに萬物を一掃することもある。併し斯くの如きは、額廢稅政の政府の惡政の場合を除けば、容易に起るものではない』(三六頁【七一頁】)。

租稅制度に就いては、ロツクは、『總ての租稅は、如何に工夫考案されやうとも、又直接には誰人によつて支拂はれやうとも、主たる財産が土地に存する國家に在つては、大部分は結局土地の上に落ちるものである』(五五頁)と言ふ重要な命題を樹立した。地主たちは、屢々彼等が怖れる地租の代りに商品稅を實施しやうと力めたが、實際には何時も更に餘計な出費を被つた。土地に賦課された諸稅は、その土地の地代に全然關係しない。それに反して諸の商品稅は、その全額に於て地代を壓迫するのみならず、更に地租より遙かに

高額の徵稅費が加算されねばならぬ<sup>1)</sup>。何となれば、今や従前よりも高價に購入した商人は、またより高價に販賣しやうと欲するし、生活必需品を高價ならしめられた労働者は、より多額の勞銀を獲得するか又は教區の厄介となるに至るが故である。地主だけは斯様に他へ轉嫁することは不可能である。従つて租稅は地主の上に落付くこととなる(二九頁以下【五七頁以下】)。それより後の方では、ロツクも、租稅が土地所有からそれを涸渴するまでに絞取られたときは、それは商業をも壓迫することを認めてゐる。併し最初の壓迫は、抑、租稅を如何様に賦課しやうとも、必ずや前者に落ちるものである(三一頁【六一頁】)。斯くてまた、貨幣保有高の減少も常に、最初は地主たちによつて感ぜられ、最後に商人たちによつて感ぜられるものである(三五頁【七〇頁】)。この場合商人等は、より廉價に販賣するが、買入れもまたより、廉價に行ふ。然るに地主たちは、買手の申出るところを以て満足しなければならぬ(三七頁【七三頁】)。——尤もこの議論の根據のないことは容易に判明するであらう。併し兎も角、租稅轉嫁論の如き甚だ困難な理論にあつては、初期の研究

1) ホツプス以來始つた學者間の間接稅偏重に對するこの反動は、當時の實際に就いても、認めることができる。私は千六百九十二年の新地租を想ひ起す。その土地臺帳は、今日に至るまで依然として存蔵してゐる。



者は相當な斟酌を要求することを得やう！ 尙ほ興味あるは、ロックが、或は存在することあるべき土地抵當を、彼の地租に於ては全然不問に附さうとしたことである。併し、これは、經濟上の論據からよりは、寧ろ道德上の根據からである。曰く、それは、不良な經濟に全く相當した刑罰である。尙ほまた、誰人と雖も、實際に所有してゐる以上の所有權を行使する必要はないと。更にこれと關聯して、ロックは、債權者をして相當な租稅負擔を爲さしめる助けとなるべき、抵當登記簿を推稱してゐる（三三八頁【七五頁】）。

通説に従つて彼も、人口増加は兵力並びに富力の増加である、と一般的な説明を下してゐる（三二二頁【六三頁】）。この上もなく教訓に富んでゐる説は、貧民救助に關するロックの諸見解である<sup>1)</sup>。現存政府の下に於ける貧窮の増加は、前兩朝に於ける如く、主として relaxation of discipline and corruption of manners【取締の弛緩及び道義の頹廢】に基く。救助を受けてゐる貧民たちのうち、少くとも半数はそのパンの全部を、残りの多數と雖もその一部を働き出すことはできる。そこでこれが救濟策として、彼は先づ、現行浮浪人取締規則の嚴格な勵行を唱へる。併し大

1) イーデン『貧民の狀態』第一卷二四四頁以下に據る。

抵の貧民は、必しも全然労働を欲しないわけではなく、寧ろ不熟練の爲め半ば無能力となつてゐるのであるから、第二の救濟策は、各教區に工手學校【working school】を設立することこれである。これらの學校の管理者は、一定の俸給以外、彼等の働きに依り救貧税に於て節約され得る限りの額の、一割に當る配當をも、支給さるべきである。尙ほ學校の手持材料中の一部は、家庭内で労働しやうと欲する貧民たちにも、分配しなければならぬ。三歳乃至十四歳の貧民兒童は總て、工手學校に出席せねばならぬが、この場合ロックは、これら子供たちの扶養の爲め父兄に對して施金を與へることを、眞面目に戒めてゐる。労働能力なき貧民たちは、經費の節約上比較的大きな救貧院に同居しなければならぬ。——但し、アン【Anne】の治世三年及び四年にロックの諸原則を實施しやうとした法案は、何等法律上の効力を發生しなかつた<sup>1)</sup>。

1) ロックと同じく貧民の使用と教育とによつて貧乏を防遏しやうと試みた著述に就いては、充分に文獻が揃つてゐる。これに屬するものとしては特に、有名な法律家サー・マシュー・ヘイルの小冊子『貧民救助論』（A discourse touching provision for the poor. [1683.]）（千六百八十三年公刊、但しイーデン『貧民の狀態』第一卷二一五頁に據れば、千六百五十九年執筆）がある。本書には、治安判事が諸教區をより嚴格に管督し、従前の諸救貧區を數群に統一し、且つ數年に互る救貧税を豫め徵集し、それに



具を調達する爲めに、最後に、二磅は監理者たちに對する一回の饗宴に、宛てるであらう。斯様にして製造された織物は、次いで、一部は子供たち自身に、一部は病氣又は頼る邊なき貧民たちに贈與されなければならないと。

よつて全國に互る救貧院網を設定することが、唱へられてゐる。著者はこの計畫の施行に依り、殆んど總ての貧困を絶滅するのみならず、同時に工業を著しく興隆せしめるといふ、實に希望に充ちた期待を懷いてゐる。尤も充分注目に値することであるが、彼は、この實行の可能性に對して懐かべき極めて重要な諸疑點は、總て自ら列擧してゐる。——これと同じ目的（但しその諸方策に至つは天才的な點はより少いが）を追及してゐるものは、リチャード・ヘインズの『救貧院建設案』(Richard Haines: Proposals for building in every county a working alms-house or hospital, as the best expedient to perfect the trade, and manufactory of linnen cloth. 1677.)である。イーデン第一卷一九七頁以下參照。——最もロックを勞働たらしめるものは、トマス・ファーミン【Thomas Firmin】の『貧民使用案』(Proposals for the employing of the poor. 1678.)【譯者は本書を見ることができなかつた。イーデン『貧民の状態』第一卷二〇二頁に據れば、本書はその後千六百八十一年可成りの増補を加へて再版されたといふ。慶應圖書館藏本の Some proposals for the imployment of the poor. London 1681. は、これであらう。但し、イーデン前掲書二〇二頁以下には十二頁に互るその抜粹を載せてあるから、ロックが茲に引用する限りでは、我々は原本の缺如による不自由を免れる。】で、大僧正ティロットソン【Tillotson】宛書簡の形式で公刊されてゐる。この著者は、浮浪人その他に對するものを除き、公設の強制作業場を非難してゐる。比較的善良な貧民たちは、單に彼等の住宅内で勞働する機會を獲さへすればよい、而も主として亞麻と大麻とを以てするがよい。何となれば、この場合は他の多くの工業に比すれば、勞働の方が資本を凌ぐこと大であるから。併し最も重要なことは、矢張り、貧民の兒童たちに仕事を教へることである。そこでファーミンは考へる、若し自分にして救貧の爲めに百磅を手に入れたとすれば、二十磅は讀書と紡績とを教へる婦人の俸給に、五磅は教場の借入れに、二十五磅は亞麻と大麻との購入に、二十五磅はこれによつて使用される子供たちの勞銀に、十五磅は糸の織布と漂白とに、八磅は所要の道



## 第十一章 英吉利世界商業のその後の興隆

107

チャールズ・ダヴナン【Charles Davenant】(法學博士)の外面的經歷に就いては、唯だ次のことだけを述べて置く。彼は千六百五十六年に生れ、千七百十四年に死んだ。彼は士爵<sup>†</sup>者の家に生れ、幾度も下院に選出され、暫くの間消費稅務官となり、終には輸出入總監となつた。青年時代の諸戯作をほかにすれば、彼の文筆上の活動は千六百九十五年乃至千七百十二年に屬し、實に次の諸著を公けにした。『戰費調達論』(An essay on ways and means of supplying the war. 1695.) 『東印度貿易論』(An essay on the East-India-trade. 1697.) 『英吉利の歳入及び貿易に關する諸論策』(Discourses on the public revenues and of the trade of England. 1698.) 『貿易均衡改善策』(An essay on the probable methods of making the people gainers in the balance of trade. 1699.) 『勢力均衡に關する諸論』(Essays on the balance of power, the right of making war, peace and alliances; universal monarchy. 【To which is added an appendix, containing the records referred to in the second essay.】 1701.) 『現代ホイッマ黨員氣質』(A

108



picture of a modern whig. 【In two parts.】 1701. 『舉國一致論』  
 (Essays on Peace at home and war abroad. 1704.) 『亞弗利加貿易  
 論』 (Reflections on the constitution and management of the trade to  
 Africa. 1709.) 『我が國貿易の一般狀況報告』 (Reports to 【the Ho-  
 nourable】 the commissioners for putting in execution the act, entitled,  
 an act for the taking, examining and stating the public accounts of  
 the kingdom. 1712.)<sup>1)</sup>

これら總ての著述は、著者自身の言葉に據れば、主として coun-  
 try-gentlemen 【地方のジェントルマンたち】の爲めに書かれた  
 ものであるが(第二卷七八頁、その中でダヴナンは、博識でもあ  
 り多才でもある人物として現れてゐる。彼が古典に關する根  
 本的研究を行つてゐたことは、リヴィウス【Livius】やタキトス  
 【Tacitus】等から引用した、多數の選擇宜しきを得た對句のうち  
 に現はれてゐる。同様に、その著『英吉利の歳入及び貿易に關

1) 以下引用するダヴナンの全集は、千七百七十一年次の標榜の下に  
 サー・チャーレス・ホヰツトウワースが編纂した、八つ折版五冊物である。—  
 The political and commercial works of that celebrated writer, Charles  
 D'Avenant, [LL. D. Relating to the trade and revenue of England,  
 the plantation trade, the East-India trade, and African trade. Collected  
 and revised by Sir Charles Whitworth, member of parliament. To  
 which is annexed a copious index. 5 vols.] London 1771.

する諸論策』にも、クセノフォン【Xenophon】の著書『ヘ  
 リポローン』【περι τροφῶν】の完全な翻譯と註釋とが附載  
 されてゐる。【全集】第一卷三〇三頁以下。A discourse upon  
 improving the revenue of the state of Athens, writ-  
 ten originally in Greek, by Xenophon, and made English from the  
 original, with some historical notes by W. M. Esq. With notes  
 upon the translation. 我々は、當時英吉利で、一般に古典の研究が、長  
 い衰微の狀態から再び興隆し始めたことを、忘れてはな  
 らない。——近世の國家諸學者中、彼が最も好んで利  
 用したものは、マキアヴェリ【Machiavelli】とリッシュュー  
 【Richelieu】の『政治的遺言』【Recueil des testamens politiques  
 du Cardinal de Richelieu, du Duc de Lorraine, de M. Colbert et  
 de M. de Louvois, divisé en IV volumes. 2 vols. Amsterdam  
 1749.】とである。英吉利法制史にも極めて精通してゐ  
 た。そして、彼が如何なる價值を國法學の研究に認めて  
 ゐたかは、第二卷二四〇頁以下、愛蘭土に於て總ての羊毛

1) 私は唯だ次の點だけを想ひ起す。即ちプリドー【Prideaux】の主  
 著は千六百七十六年に著はされ、スボン【Spon】及びホイーラー【Wheler】  
 の旅行は千六百七十九年に行はれた。ベントリー【Bentley】は千六百六十  
 二年に、ポッター【Potter】は千六百七十四年に、マークランド【Mark-  
 land】は千六百九十三年に生れた。アルブスノット【Arbuthnot】は千七百  
 四年頃『王立協會』に入り、ドッドウェル【Dodwell】は千六百九十二年以  
 來、デイヴィース【Davies】は殊に千七百三年以來、ラディマン【Ruddim-  
 an】は千七百二十五年以來文筆上の活動を行ひ、チシュル【Chishull】は千  
 七百十五年以降にその旅行を企てた。



加工を禁止すべき英蘭土の權能を推論する條下に、特に犀利に現れてゐる。總じてダヴナンにあつては、昔の大抵の著述家たちに於ける如く、國家學の個々の部門の分離が今日に比して遙かに劣つてゐることが、見出される。この分野に於ける大きな分業は、アダム・スミス以來普通となり、リカルド學派に至つてその頂點に達したのであるが、當時は未だ存在してゐなかつた。これは、或る點から見れば不完全と見做すべきであるが、——樹木は、比較的大きくなつて始めて大枝に分れ、その大枝が更に小枝に岐れる等、——それは同時に、偏見と唯物論とに對する重要な防護手段ともなつた。北亞米利加の諸植民地を機縁とした次の一句は、如何にもよい言葉ではないか。曰く、世界中の凡ゆる國々の厚生は、實にその國民の徳性如何に懸かる（第二卷四一頁以下）と。富有を極めた國民でさへ、徳義が頽廢すれば貧困とならざるを得ない。殊に國民經濟は、政治的自由の花咲く處にのみ繁榮し得る（第二卷三三六頁以下三八〇頁以下）——富なるものは、自由がなければ毫も價値を持たないであらうことは、全く度外視するとしても（第二卷二八五頁）——自由なる概念の主たる表徴は、ダヴナンにあつても常に所有の安固これである。彼は實際政治家として、ジェイムス二世を倒しウヰリアム三世を皇位に即かした諸思想の眞唯

中に、生活した。凡ゆる幸福従つてまた凡ゆる富の根本條件は、英吉利に於ては憲法で（第二卷三〇一頁以下三〇九頁）、この憲法が正に英吉利獨得の流義で七百年も續いたものとして、取扱はれてゐる（第二卷三〇二頁）。かの二大政黨は、聯合して革命を遂行したのだが、ダヴナンはこの兩政黨を一視同仁に取扱ふことができた。曰く、最初弊政に氣付いたものはホイッグ黨員で、救済策もその綱領に則つたが、この救済手段に對して事實上最も貢獻したものは、トーリー黨員であつた（第二卷三二九頁以下）と。序ながら、ダヴナンは、昔のホイッグ黨の綱領に忠實であつただけに、それだけまた、政友の多くの者が、在野黨の議席から出て政權を握るや否や、これらの綱領から離れたとき、甚だ不快に感ぜざるを得なかつた。彼はこれに對し躍起となつて反對する。それは特に、諷刺的對話篇『現代ホイッグ黨員氣質』<sup>1)</sup>に於て著しい。然る限りに於て、ダヴナンは決して黨人ではない。『劍を以て統治する暴君は、劍を持つ人々以外殆んど友を持たぬ。併し立憲的暴君は、（その場合國民が召集されるのは、單に彼等の投票によつて不正を確認する爲めたるに過ぎない）金持臆病者怠け者法律を識りこれによつて衣食する者野心を懐く

1) 殊に第四卷一七七頁参照。



僧徒その他總て平穩な世態人心に頼つて生存してゐる者たちを、その味方に持つ。而して茲に述べた人々こそ、大抵の國民にあつては比較的有力な部分を形成してゐるものであるから、斯様な暴君は滅多に王位から振り落されることがない』(第二卷三〇一頁)。衆望の聚つてゐた當時の王の偉績を以てしても、尙ほダヴナンをして、或は即位することあるべき悪い王嗣に對する英吉利憲法の保證、從つて議會の財政及び軍事協賛權を最も細心に保護せしめることを妨げない。對外政策に關しては、彼は、凡ゆる殊に佛蘭西流の世界君主國に對する歐羅巴の均勢の熱心な擁護者である。

ダヴナンの國民經濟學體系中(この場合に於て、即ち彼の著書の如き小冊子類にあつて體系を云々することができるとすれば、然る限り於て)中心點をなすものは、貿易均衡である。國富増加と順均衡とが本質上同じ意味を持つことは、多くの個所で保證されてゐる(第二卷一七二、一九五、一九九頁)。然るが故にこそ、英吉利國民經濟の最近の疑ふ可らざる進歩も、外國貿易の隆盛のみから發生することができ(第一卷三五九頁)、また如何なる國に於ても、均衡の超過こそ、國民財産を破壊することなくして國家の歳出を増加し得べき、限度を決定するもの、たらざるを得ないのである(第一卷一三頁)。同一

の理由から、ダヴナンは、貨幣を國外に送り出す必要のない防禦戰より、侵略戰の方が有害なことは、恰かも個々の傷害が衰弱より危険少きと同じである、と考へる(第一卷四〇三頁以下)。同様に、海戰の材料は總て國內で整へられ給料は總て國內で支出されるのに(第五卷四五一頁)、陸軍は諸外國を富ますから(海戰は陸戰より躊躇なく行ふことができる。それにも拘らず、輿論はこの點に就き謬見に充ちてゐる。斯くて例へば、『我が國貿易の一般狀況報告』(第五卷三六二頁以下)は、英佛貿易の均衡が英吉利にとつて甚しく逆である、とする通説を反駁する(尤もこの謬見の政治的愛國的諸論據に至つては、著者には甚だよく判つてゐたけれども)。曰く、併し茲に考慮すべきは次の事情である。英吉利は佛蘭西から買はない場合には、他の國々から而も恐らく比較にならぬ程高く買はざるを得なくなるであらう。反對に和蘭に對する外見上の順均衡は、主として、和蘭が、而も英吉利の損害に於て、甚だ多くの英吉利商品を第三國に轉賣することに、基因するものである(第五卷四三四頁)。更に東印度貿易に至つては、つまらない贅澤品に對し貴金屬を支拂ふのであるから、全歐羅巴がこれを斷念しやうと欲するなら、それは無論結構であらう。併し英吉利及び和蘭だけは、印度商品の國內消費によつて失ふところより遙かに



多くの利益を、對印度仲繼貿易によつて獲てゐる。従つてダヴナンは當時甚だ屢論ぜられた東印度貿易禁止論に、斷然反對である（第一卷九〇頁以下）。これに反し、英吉利が自國産羊毛製品の代りに印度産キャラクを使い前者を輸出することは、節儉といふ理由から見て好ましいことである。而も斯うしなければ、キャラクは英吉利産羊毛製品の外國販路をも害するに至るであらう<sup>1)</sup>。斯くて和蘭人は自ら進んで、例へば自國産の純良バタを外國に賣り、その代り自分たちはより廉價な英吉利バタを以て満足して來た。『羊毛工業で英吉利が利益するところは、國內で國民自體が消費する部分に依るに非ず、よその國々に賣られる部分に依るものである』（第一卷一〇二頁）。——ダヴナンの貿易均衡計算法は、チャイルドやマンが改良した方法と、本質上一致してゐる（第二卷一二頁以下、二三四頁、第五卷三六六頁）。この方法によつて、ダヴナンは、英吉利の年々の利益を二百萬磅とし、そのうち九十萬磅は植民地貿易に、六十萬磅は東印度貿易に、五十萬磅は英吉利本國の輸出に基くと見積つてゐる。——尙ほダヴナンは、必ずしも全く首尾一貫してゐるわけではない。すなはち例へば、國內販路に於

1) これ明かに、英吉利の羊毛生産高と印度の木綿生産高とは、確定的な増加し得ない大きなりてふ前提の下に於てのみ、眞理たるに過ぎない。

ては、一人の得るところは他人の失ふところに過ぎないから、國民全體としては富有となるものでない、と第一卷百二頁で言つてゐるが、第二卷の十九頁ではそれと反對に、外國貿易以外に國內商業も富の源泉と認められてゐる。斯くてダヴナンは切に警告する。決定的に有利な他の部門がこれによつて制限されることもあり得るから、凡そ如何なる商業部門と雖も、想像上の逆均衡の故を以て、これを切り棄ててはならない（第一卷三八七頁以上）。『總じて如何なる商業部門も、その國にとつては有利である、と保證することができ』（第一卷九九頁）。而も尙ほかの熱心に唱へられた Council of trade【貿易審議會】は、特に充分に均衡に注意し、これが或る特定の國に對して逆となつたときは、少くとも奢侈禁止法を以てこれに干渉しなければならぬ（第一卷四二五頁）。

上述したことから我々が期待し得るところより、比較を絶する程多岐に互つた根本的なダヴナンの見解は、貨幣と富とに關するものである。彼は、ポレックスフェン【J. Pollexfen】<sup>1)</sup>と『疲弊せるブリタイン』の著者とに對し、躍起

1) ポレックスフェン『製造工業に於ては、英吉利と東印度とは兩立せず』(J. Pollexfen: England and East-India inconsistent in their manufactures. 1697. 12.)



となつて論戦してゐる。このうち前者は金銀を以て唯一の眞實な富と説明し、後者は貿易均衡の主たる標準として鑄貨の製造記録を用ゐたが、これに對してダヴナンは言ふ。元來富とは、土地と勞働とが生んだ總てのものを言ふ。従つて一國民は、貨幣なくして富有を致し、然る後思ふ儘に貨幣を手に入れることができる。和蘭國民は、その貨幣保有額の三分の二を貸したとしても、その爲めに貧乏とはならないであらう。一國民の隆盛も現金の増加とは全く異つた兆候によつて、識別するを得る。彼は、例へば、船舶家屋商品在荷等の増加を擧げる。これらは、單に富の増加を示すといふだけに止らない。寧ろこれこそ富そのものゝ増加である、否な恐らくその最も有用な構成部分である（第一卷三五四頁以下）。他方高い利率低い地價と勞銀減少せる人口非耕地の増加等は、國民的貧窮化の徴候と見做される、假令國民中の個々人が、いつもその間にあつて、自己の私有財産を増大しやうとも（第一卷三五八頁、第二卷二八三頁）。富の詳細な定義（第一卷三八一頁以下）のうちには、凡そ『王と國民とを豊富と安樂と安全との状態に置くもの』は、總て包含される。従つて、嘗にそれ自體滅失し易い諸の物財のみならず、また諸の精神的な力や關係、例へば聯合その他の如きものまで、擧げられてゐる。その著『貿易均衡改善策』の

うちに、當時得らるゝ限り最も完全な英吉利の統計を載せたのも、正にこの理由から見れば、ダヴナンに取つては當然であつたやうに思はれる。彼は論ずる、何れの國民にあつても、輸入の方が輸出よりも價値が大である限り、假令前者が耐久的商品から成立たうが將たまた、速かに滅失すべき商品から成立たうが、兎に角その額だけは、貿易に於て利益するに違ひない（第二卷一一頁、と）。どう見ても、ダヴナンは、『疲弊せるブリテーン』等の諸謬見からはまだ完全に脱却してゐない。併しそれにも拘らず、これらの謬見は、僅かにもう半ば叩き棄てられた鎖の如く後に曳摺られてゐるだけに過ぎないことは、看取される。——ダヴナンの貨幣理論に至つては、servant of trade【貿易の使丁】、measure of trade【貿易の數取り】といふのが、貨幣の用に對する愛好の形容句であることから、判斷することができる。然り、貨幣は、確かに、計算を容易ならしめる爲めの數取りに比せらるべきである（第一卷三五五頁）。證券信用に關聯しては、次の可能性も認めてゐる。即ち、人は他の如何なる物でも、貿易の數取りに定め得る。而してこの物は、正に數取りとして認められてゐる處では、金銀と全く同じ用を勤めることができる（第一卷四四四頁）。非常に富有的な國民にあつては、やつと勃興しかけた斗りの國民に比し、比較的僅かしか現金を必要と



せず、従つて一定の點以後は、正貨の繼續的輸入が必ずしも特に好ましいことゝならないのであるが、これは何に據るかといふ觀察に至つては、甚だ巧妙である（第二卷【ロツシャ<sup>1</sup>の原著には第四卷とあるが第二卷の誤植であらう】一〇六頁以下）<sup>1)</sup>。

人口に關するダヴナンの主たる原則は、次の如くである。凡そ安樂に暮し得る處では、何處でも人口が増殖する（第二卷二三三頁）。殊に自由な國憲の下にあつては、人口は殆んど必ず稠密となる（第二卷一八五頁）。併し反對にまた、人口の増加は國民致富の最も有効な手段の一つでもある（第二卷三頁、第一卷七三頁以下）。従つて政治上の亡命客を受容れること（第二卷六頁）や多人數の家族に手當を與へること等は、就中推稱される（第二卷一九一頁）。併しダヴナンは、統計家キング【King】の前例に従ひ、國民の富を増加する人口階級とこれを減少する人口階級との間の相違を認める。第一種に入るものは、土地・技術乃至勤勞に依つて自分自身を養ふのみならず、また國民資本（nations general stock）の増加と他人の扶養とに貢獻する者である。第二種には、明かにベティド<sup>1</sup>に従つて、乞食や浮浪人たちの外に、病人や虚弱者や更に Cottagers【細農民たち】の家族全體までが編入される（第二

1) 反對に第二卷二三八頁参照。

卷二〇二頁。——更に興味あるものは、キングから採用した誤譯、即ち英吉利は六百年かゝつて始めて一千一百万の人口に増加するであらう、とする譯見これである（第二卷一七六頁）<sup>1)</sup>。

當時の嚴重な貿易禁止制度に對すれば、ダヴナンは大體に於て自由貿易の賛成者と呼ぶことができる。成る程ダヴナンは、航海條例の熱心な讚美者である（第一卷三九七頁）。彼は、極く初期の著作に於て、人間が單に自分たちの私的利益と個々の利潤追求とを念頭に置きさへすればよい處にあつては、總て事態は悪化せざるを得ないとの理由を以て、一般的にも單純な放任を警戒してはゐる（第一卷四二二頁）。併し、その最後の著書に至つては、貿易は唯だそれ自らの運行の儘に放任せらるべく、然るとき、それは自力のみによつて通商路を見出すに至るであらう、と考へてゐる。商人たちが奮勵して外國に於ける自己の利益を活潑に主張し、さへすれば、關稅が法外に高くなければ、諸の良港を持ち、海國精神と商才とを持ち、資源に富んだ國土と亞米利加の如き植民地とを持つ國民は、必ずや貿易によつて富有とならざるを得ない（第五卷四五三頁）。凡そ如何なる貿易國と雖も、政治上の諸

1) 前述一六七頁参照。



理由から例外を要求しない處にあつては、個人並びに全體の利益を計らんが爲め、抑、外國商品を最も安く輸入し得る處は何處であるか、といふ點に注意を拂ふに違ひない（第五卷三七八頁）。外國商品に對する一般的恐怖に依つて自國特産品の販賣を促進しやうと考へる國々は、時の經つに伴れ、殆んど又は全く貿易を失ふに至り、自國商品は賣残りとなつて自分たちの負擔となるを見出すに至るであらう。我が國の生産物を受取る諸國民は、我々が彼等の生産物の相當部分を受取るべきことを、常に豫期するものであるが、これは常規を逸した關稅によつて不可能となる。世界の表に於て多額の取引をしやうと欲するなら、他國が我が國に對して行ふより悪い仕打ちを、他國に加へてはならぬ。我々は、賣ると同様に買はねばならぬ。また單に自國の土地及び工業生産物の輸出のみによつて生存するといふ空想に耽つてもならない<sup>1)</sup>（第五卷三八七頁以下）。——ダヴナンに於けるこの比較的自由的諸見解は、彼自ら高い實際上の地位に坐つて英吉利貿易政策に關與したのち、始めて完全に徹底したものであるが、このことは何等の意味なしとしない。併しそうは言つても、彼は千六百九十七年既

1) 輸入禁止及び法外に高い關稅に反對する周到な諸理由（第五卷三七九頁以下）參照。

に、羊毛工業助長の爲め屍體を葬るには羅紗に包むべし、とする英吉利の舊い法律に對する反對者であつた。惟へらく斯くの如きは、寸毫の利益をも國家に齎らさない製品消費である。總じて貿易に關する法律は、殆んど全く貿易によつて國民が繁榮してゐる徴候とはならぬ（第一卷九九頁）。同様に、各國民が凡ゆるものを悉く自ら生産しやうと欲する、不幸な企てに對しても、彼は生涯反對者であつた。例へば英吉利は、絹工業、リンネル工業の不自然を行はず、寧ろ、天然の資源を持つ自國の羊毛生産自國の鯉漁業等を大とすべきである（第一卷一〇四頁以下）。この故にこそ、天道は異つた國々の自然を異つた構成となし、それによつて相互に助け合ひ得るやうにしたのである（第二卷二三五頁）。——周知の如く、穀物貿易に關しては、最も厭ふべき諸偏見が最も廣く且つ最も深く根ざすを常とするが、この穀物貿易に於て、我がダヴナンの不偏不黨は最もよく顯れてゐる。彼は、飢饉に對する國民の保險が私人たちによつて最もよく備へられることを、認めるのみを以て満足せず、『神の御名に於て』も彼等に利益を與へることを惜まず、この場合濫用を怖れることは、他の諸公務に於けるより更に少い（第二卷二二六頁以下）<sup>1)</sup>。

1) 上述一三七頁參照。——この機會に於てダヴナンは尙ほ（第二卷二



ダヴナンの精神生活上一つの重要な位置を占めてゐるは、亞弗利加及び東印度との通商に對する特許貿易會社の辯護である。彼はこれが反對者たちに呼び掛ける、現存諸制度の缺陷は極めて容易に認め得るが、新設すべき組織の短所を明かに豫知することは、如何なる人智を以てしても不可能である(第二卷一三五頁)と。regulated company【規制會社】即ち、一定の規定を遵守し一定の設備維持費を支拂ふこと等の條件の下に於ける自由貿易に反對し、現在の東印度會社に賛成する彼の論據は、爾來會社特許の延長毎に主張されたものと、大體軌を一にしてゐる。個人商人たちの競争は、東印度では商品價格を昂め、反對に英吉利ではこれを引下げるに違ひない。その結果生ずる諸の損失は、暫時にして多數の投機師たちを逐ひ出し、競争の極端な盈虚を交互更替せしめ、貿易自體に最大の損害を與へるに至るであらう。然るに無限に遠隔なこと、總てその地にある政府の特質及び和蘭人の嫉妬が、絶えず戰時組織を必要とするてふ理由を以てしても既に、世界中東印

二四頁) キング唱出の度盛——收穫の不足はこの級數に従つて穀價を高める——に就いて述べてゐる。斯様な度盛を普遍的に妥當せしめることの不可能であることは、拙著『穀物騰貴に就いて』(Ueber Korntherungen: [Ein Beitrag zur Wirtschaftspolizei. Stuttgart etc.] 1847.) の七頁で證明して置いた。

度貿易ぐらゐる切實に、一定の恒常性を要求する貿易部門はない。かの地にあつては、個人では弱い、即ち法律の保護がない。然るに要塞や海外商館等は、適當な頭割が不可能であることだけを以てしても既に、個人商人たちの租税によつては維持し得ないであらう(第二卷一二六頁以下)。そこでダヴナンは、長期に亙る確實な會社特權を繼續することに賛成の意志を表明し、これを導くに第二卷百五十三頁の恒常の原則に關する美しい常套語を以てしてゐる<sup>1)</sup>。——亞弗利加貿易に對しては、主として、その地で使はれてゐる資本の足りないこと、大した競争者がないこと、を理由として、ダヴナンは嘗て所謂『規制會社』を欲したこともあつた(第二卷三九頁)。併しその後、廣汎な根本的な歴史研究を基礎とした著書『亞弗利加貿易に關する諸考察』は、主として、この貿易の重要とこれに對する特許會社の必要とを證明する意圖を以て書かれてゐる。彼が擧げた諸論據のうち、自由な個人商業の場合には、國民の眞實の損益を計算するのが甚だ困難となること、及び個人々人たちより會社の方が一般に賢明であり従つてまた自家の利益をより正當に辨別するものであるといふ二個の理由は、勿論甚だ珍しい説として際立つてゐる

1) 上述一三五頁以下參照。



る（第五卷一三九頁以下）。

植民地貿易の利益に關する章では（第二卷一——七六頁）、殆んど全く次のことだけを述べてゐる。諸の植民地は、英吉利をして若しこれが無かつたならば發生すべかりしより多額な外國商品輸入を、その諸生産物に依つて補充するを可能ならしめる。従つて例へば、新英蘭土は、その穀物家畜材木その他によつて、西印度の熱帯植民を可能ならしめる以外、何の利益をも持たぬ。勿論西印度は、斯様な需要品を母國から供給して貰ふこともできやう。併し原料に於ては製造品に於けるより遙かに儲けが少いから、英吉利の工業製品が北亞米利加の生活資料その他との交換に使はれ、従つて熱帯植民地への供給が迂回して行はれる場合にのみ、新英蘭土は母國に利益を齎し得るであらう（第二卷二二頁）。凡そ植民地の獨立や植民地自體の工業は、ダヴナンにとつては厭ふべきものである。彼は西印度に重きを置く餘り、奴隸を以て第一の最も必要な植民原料であると説いてゐる（第二卷三八頁）。新英蘭土の植民地が他日何時か母國に齎し得べき諸の危險に就いては、チャイルドの見解に左袒してゐる（第二卷九頁）。それだけにまた、これら植民地に對し紐育に於て共同の議會を興ふべしとする彼の提案は、益々注目し値するものとなる（第二

卷四〇頁以下）。勿論母國內には、これと對立して、西班牙の印度評議會【Council of the Indies】の様式に則つた常置委員會を存置しなければならぬ（第二卷二九頁以下）<sup>1)</sup>。既にクロムウエルやジェイムス二世が政敵に對して行つた流刑植民地【Strafkolonien】の考へは、英吉利刑法の多數條項が甚しく嚴酷である點に鑑みて、ダヴナンも特にこれを推稱してゐる（第二卷四頁）。本質上植民地と見做すべき愛蘭土に就いては、ダヴナンは、一般に同時代の人々よりずつと寛大な意見を述べてゐる（第二卷二二—三六頁以下）。併し、例へば愛蘭土人は英蘭土以外の場所へその羊毛を輸出し得るであらう、といふ見解に對しては、甚だしい恐怖を懷き、これによつて『一撃の下に英蘭土の羊毛工業全體が滅亡すること』を豫期してゐる程である（第二卷二四九頁）。

租税に關しては、直接納税者必しも常に本來の擔税者に非ず、といふ洞見の充分な創始が見出される（第二卷二〇—一頁）。尤もロツクを想起せしめる立言（第一卷七七頁）たる All taxes whatsoever are in their last resort a charge upon land. 【凡そ如何なる租税でも、結局最後には土地の負擔となる】は、ダヴナンに於ては、何

1) 後の考へは、その後久しからずして、Lords of Trade and Plantations 【貿易植民院】の創設に依り、或る程度まで實現された。



等これ以上の發展を遂げなかつた<sup>1)</sup>。彼が最良の税種として推稱したものは、ロツクあるにも拘らず消費税であつて、その商業に及ぼすべき諸不利益は、これと結び付くべき市場警察や度量衡警察等の整備によつて償ふことができる(第一卷六二頁以下、第二卷二〇一頁)。租税の取立を請負はしめるは合理的かどうかといふ問題も、實に根本的に論究されてゐる(第一卷二〇七頁以下)。英吉利では、郵税と竈税と關稅と消費税とに就いて、徵稅請負制度が試みられて居た。そしてダヴナンは、餘り知られてゐない新しい收入、並びに、吏僚の無能力によつて收稅額の減少した收入に對しては、これを推唱してゐる。併し、それは常に短期間に限られ、而も請負人の收益最高限が嚴重に確定されてゐることを必要とする。租稅制度の政治上の性質に關する諸研究、例へば國民は新稅の賦課より寧ろ舊稅の違法なる繼續的徵收を甘受すること(第一卷二八五頁以下)並びに凡そ大規模な租稅體系の爲めに公の自由を脅す總ての危險に關する說の如きは、實に卓說である。

1) これはその後、ヴァンダーリント『貨幣は總てのものに應ずる』(Vanderlint: Money answers all things [or an essay to make money sufficiently plentiful amongst all ranks of people, etc. London] 1734.) に依つて行はれた。然る限りに於て、ヴァンダーリントはフィジヲクラットたちへの過渡を成してゐる。

—ダヴナンが、公債(周知の如く英吉利ではこれが躍進的發展は漸くこの時代から始つてゐる)に對し、劇しい嫌惡の意志を懷いてゐたことは、この最後の理由に據つて説明し得る。諸の公債は利率を高め、従つて貿易を沮害する(第一卷一八頁以下)。それは多數人を誘惑して無爲の金利生活をなさしめ、産業に不利益を齎す(第二卷二九四頁)。従つて英吉利は、彼の考へるところに従へば、國債の大部分を償却して了はない内は、經濟的にも繁榮し得ないであらう(第二卷二八三頁)<sup>1)</sup>。而も尙ほ總て巨額の國債に關する主要問題は、依然として常に自由なる租稅協賛權と公の自由一般とに對する甚しい危險これである。それ故我が著者は、和蘭流に國民全體並びに特に政府の節約を極めて斷乎として説いてゐる(第一卷三九〇頁、第四卷四三四頁)。

最後に尙ほ、ダヴナンが統計史上に占める重要な位置に就いて、述べなければならぬ。彼はこの點に於てベティの後繼者である、尤も必しも全く獨立獨歩してゐたわけでは斷じてなく、屢、グレゴリー・キング

1) 而もリズウェツク [Ryswik] の媾和締結(千六百九十七年)に際し、國家は僅かに二千百五十一萬五千七百四十二磅しか國債を持つてゐなかつた。——ハミルトン『國債考』(R. Hamilton: An inquiry concerning the rise and progress etc. of the national debt [of Great Britain. 2 nd. ed. Edinburgh 1814.]) 六五頁。



【Gregory King】の草稿を利用してゐるのみに止るけれども（第二卷一六五頁以下）<sup>1)</sup>。斯學の理論は、英吉利の歳入と貿易とに關する著書の序論たる興味ある論文『政治算術の用に就いて』(Of the use of political arithmetic) (第一卷一二七頁以下)のうちで、闡明されてゐる。併し、單なる數字上の統計家が甚だ容易に陥る物質主義否々拜金宗を以て、彼を誣ひやうとするならば、これ程不公正なことはないであらう。我が著者は貿易の發達が甚だ價值曖昧な進歩であることを、繰り返し繰り返し認めてゐる。貿易は富を伴ふが贅澤や詐欺や貪慾をも伴ふ。それは徳性と質朴な風俗とを破壊し、斯くて生じた國民の墮落は、必ずや終には、國の内外に於ける奴隸状態に至らしめねば止まぬであらう（第二卷二七五頁）。併し勿論、外國貿易なく、總て地代等は實物で支拂はれ、總ての領主が田舎に住む、父家長的狀態で、ふ單純さは、他の諸國民との競争といふ理由のみを以てしても、既に永續することができない。従つて大きな隣邦諸國に圍まれてゐる

1) キング『千六百九十六年に於ける英吉利の國勢』(Natural and political observations and conclusions upon the state and condition of England in 1696.)。本書は千八百一年に至り始めて、有名なチャームス【Chalmers】に依り、その著『大ブリテーンの比較的國力推計』(Estimate of the comparative strength of Great Britain.)の附録として、翻刻された。

小さな國々は、先づ貿易に従事し、斯くてその狭小を言はば人爲的に擴げて來たのである（第一卷三四八頁以下）。英吉利も、船隊の爲めには多額の貿易を必要とし、更に政治上の安全の爲めには船隊を必要とする（第二卷二七五頁）<sup>1)</sup>。

1) 私は上來、ダヴナンが東印度貿易の凡ゆる禁止に對し、熱烈な反對の意志を表明したことを述べた。この點に關しては、匿名ではあるが極めて注目に値する著書が、彼に左祖してゐる。『東印度貿易に關する諸考察』(Considerations upon the East-India Trade. London 1701.)。次の書は、標題こそ新しいが、その他に就いては少しも變つてゐない。『東印度貿易の英吉利に齎す諸利益に關する考察』(The advantages of the East-India Trade to England considered, wherein all the objections to that trade are fully answered. 1720.)。(マカロツク『文獻』九九頁以下)【本書はマカロツク『稀觀書集』(A select collection of early English tracts on commerce. London 1856. pp. 541 ff.)の中に再刻されてゐる。以下角括弧中の引用頁數は、總てこの再刻版頁數である。】——東印度貿易の反對者たちがその地の製造品の輸入に就き、英吉利産業の没落と英吉利よりの貴金屬流出とを怖れたので、對印貿易の味方たちは、できる限り徹底的にこの懸念の根據なきことを示さなければならなかつた。我が著者は、マカロツクがアダム・スミスと對比した仕方に於て、この業を行つてゐる。その冗長と重語とを論外に置けば、本書は、事實スミス學派の凡ゆる卓説と偏見とを想ひ起さしめるに足る。『東印度貿易は、有利な英吉利工業を毫も破壊せず、我々が維持しやうと欲するに違ひない職業は、一つとして國民から奪ふものでない。この苦情の據つて立つところは、印度から來る諸製品が、英吉利で同一物を造るに要する人數より、より少數の人々の労働を以て造られる、といふ點に存するが、これは承認することができる。そこ



又は他の極めて複雑な工業中の一局部に移される。これ、單純にして平易な仕事は極めて早く習得することができ、人はそれを爲すに極めて完全敏速なるが故である。斯くて東印度貿易は、甚だ複雑な仕事中の適当な部分部分を、個々の適当な職人たちにあてがひ、個々人の熟練に過度の負擔を課さないやうにさせる。……凡そ製造業に於て職人たちの差違が著しくなればなる程、個々人の熟練に残されてゐる部分が少くなればなる程、夫々の事業に於ける秩序と規則性とは益々大となり、同じ物はより僅少な時間で作られるに相違なく、労働は愈々少くなり、従つて勞銀は低落しなくとも労働の價格は低下するに違ひない。斯くて一片の布は、多くの職人たちによつて作り上げられる。即ち甲は刷梳・紡績、乙は織機製造、丙は織布、丁は染色、戊は仕上げと、常に適材が適處に割りあてられる。同じ織工が、紡績刷梳し、織機も製造すれば織布・仕上・染色もしなければならぬ場合より、織布を不斷専門の仕事とする場合の方が、彼の熟練敏捷の度を増すことは、理の當然である。同様に紡績工・晒工・染色工・織工が自家本來の仕事に専門不斷に従事する場合は、他の多數の事業によつて技術をかき亂されてゐる人がこの同じ仕事をする場合より、より熟練より敏捷であることは、理の當然である』【五九〇—五九一頁】。これに次いで、時計製造工業に於ける分業の諸利益が、矢張り同じ冗長さを以て指摘されてゐる。

で次の結果が生ずる。英吉利内で類似品をより多人數の労働を以て製作せしめる爲めに、印度の製造品を拒否することは、少人數でも同じくらゐよく爲し得る作業に對し多數の人々を使用すると、同様である』【五七九頁】。同じ理由を以てすれば、どんな有効な機械でも、どんな改善された作業方法でも、またどんなに舟楫の便の備つた河流でも、凡そこれらのものによつて労働が省かれる以上、これを放棄せざるを得なくなるであらう。ダンツイツヒ人がその穀物を送らうとしたとき、乃至は天が新しいマナの實を降らせたときは、これを拒絶せざるを得なくなるであらう。凡そ斯の如き點に於ける禁止は、多くの人力を無用に使ひ、人世の諸欲望をできる限り高價な仕方で充すべし、と強制することである。『斯う考へて來ると、どうしても、神はその恩恵を、使ふ心もなければ熟練もない人々に、與へ給ふた、と私かに言ひたくなる。何故といふに、一體我が國は、どういふわけで海に圍まれてゐるか。勿論國內の不足を、他の國々への航海てふ最少最易の労働によつて補はんが爲めである。これによつて我々は、アラビヤの香料を味ひながら、而もこれを産み出す焼け付く斗りの太陽を嘗て感じたことがない。自分の手で加工したこともなかつた絹に綺羅を飾り、嘗て植えたこともない葡萄園から酒を汲み、一度も掘つたことのない鑛山の財寶も我々のものとなる。我々は唯だ深く犁を入れて世界各國の收穫を刈り取りさへすればよい！』【五八五頁】。諸の機械や發明は、對印貿易と同じ働き、即ち個々人の勞銀を切り下げることなしに、同一量の労働をより廉くする働きを爲すから、更に又、必要と競争心とは、進歩への主たる刺戟であるから、印度貿易の解放によつて、我々は、英吉利工業上の發明その他に及ぼす著しい影響を、期待することができる。私の隣人が何等かの熟練によつて私より廉價に生産販賣するときは、私も自家の生産方法を改善し、より廉價に製造せざるを得なくなる。斯ふいふ理由から見て、『東印度貿易は恐らく英吉利の製造工業に、より多數の職人、より多くの秩序と規則性を齎すであらう。それは最も無用不利益なものを止めさせる。そこで、茲に使はれてゐる人々は、他の工業部門に移される、他の極めて單純容易な部門か、



## 【結 論】

擱筆に先だち、これまで我々が英吉利國民經濟學の發展を跡付けつゝ通つて來た二世紀を全體としてもう一度省みて見たい。

既述の如く、經濟學が發生したのは、英吉利の中世が退き、近世が癡學と産みの苦みとの間に突然躍り出して來た、あの表面靜かな併し内面深く動搖しつゝある時代に於てであつた。經濟學は先づ社會主義的批判としてこの状態に直面した、即ち、熱情的にその悪い方面に深く思ひを潜め、これを罰するが如くに一個の理想を對立せしめた。この理想こそ、自然その儘なる原始時代の諸礎石と精緻を極めた文化の諸成果とを結付けるべき、一個の理想であつた。これ言ふまでもなくユートピアの理想である。恰かも鍊金術が化學に先だち、占星術が天文學に先だつた如く、社會主義は本來の經濟學の前驅を爲したのである。——續く二世代にあつては、教會の改革か反動かといふ争が、餘りにも甚しく一般に行はれてゐた爲め、國民經濟はこれと並んで大した成熟を遂げ得る筈がなかつた。



唯だ、極めて廣汎な意義を持ち、且つ極めて緊切避く可らざる若干の實際問題が存續してゐたので、或る程度の成果を收めたゞけに止つた。封建的農業より經濟的農業への過渡及び貴金屬の價格低下がこれである。——十六世紀の終り十七世紀の初めに近づくにつれ、英吉利植民帝國の建設が非常な刺戟となり、新たに開拓された土地の富源や植民の初步その他類似の根本的な諸問題が考察されるに至つた。西班牙の征服植民地は、金銀に富んでゐたけれども、港灣に乏しく、歐羅巴式農耕に殆んど適當しない自然を持つてゐた。大陸諸國民は、大抵これに誘惑されて無数の邪道に陥つたが、英吉利植民地が北亞米利加の大西洋岸に限られてゐたといふ一個の幸運は、如上の諸研究をこれらの邪道から救つた。斯くて英吉利經濟學は、學問の上からも人氣の上からも、確固たる基礎を獲たのである。尤も差し當りこれを基礎として引續き開拓されたところが、まだ如何に少なかつたかといふ事情は、ベイコンの諸著作が證明してゐる。——十七世紀の前半を満たしてゐる諸の政治上の大鬭争は、始めの程は、經濟學に對する國民の興味を再び減少せしめざるを得ず、その理論は、僅かに數人の體系的頭腦の所有者により、而も取り分け普遍的な性質を持つと同時に國法學的、政治學的領域に境を接してゐる分野に於て、進められただ

けに止つた。——とは言ふものゝ、既に革命戰爭の中絶したとき、ステュアート王朝の再興以來は殊にそうであつたが、和蘭國民の經濟上大をなした秘訣を見習はうとする、一個の非常に明確な傾向が認められる。この傾向は、英吉利の世界商業——發達する力を持つてゐる國々にあつてはよくあることであるが、エリザベス時代の海賊生活から出發して殆んど充分に成熟してゐたところの——の興隆を、一步一步導いて行く。それは極めて多様な形で現はれて来る。曰く海上漁業の獎勵、曰く東印度貿易の是認、曰く利率引下げの熱望、曰く航海條例の辯護、曰く信教自由の追及、曰く直接税の代りとしての間接税の推稱、曰く國內に於ける商業自由の讚美。併し、その根本思想、即ち和蘭國民の宗教と政治とを愛好し、これが賢明と權勢とを嘆美し、その故を以てこれを模倣しやう、假令これによつてその友誼を失ふに至らうとも、といふに至つては常に同一である。その上、友誼は少くとも繼續的には、一度も失はれたことがなかつた。何となれば、上述の傾向は、更に進行して行く内に、三國同盟とウキリアム三世の登極とに導き、更に佛蘭西に對する激しい反感が結付いて、普に英吉利國民の政治上宗教上の態度を決定したのみならず、諸の經濟上の意見と願望とをも決定するに至つた。——ヒューム以前の英吉利經濟學は、偉大なる三



巨頭即ちベティとノースとロツクとに於て、これが最高頂に達した。茲に我々は、價値及び價格に關し、貨幣及び鑄貨に關し、利率及び勞銀に關し、貿易の均衡及び貿易の自由従つて極めて重要なやかましい問題に關する、諸理論が、アダムスミスと雖も極く僅かしか訂正すべきものを持たないであらうやうな風に、發展せしめられてゐるのを見出す。抑、經濟學は、精密自然科學と實際政策との間に於ける、或る中間的位置を占めるものであるが、これと同じく、斯學の斯くの如き大規模な勃興は、一方では同時代に起つた英吉利『自然哲學』の著しい隆興によつて、他方ではチャールズ二世、ジェームズ二世兩朝に於ける諸黨争が正に英吉利國民の政治科大學となつたといふ事情によつて、説明せらるべきである。——これにすぐ續く四十年間は、十七世紀末葉の二十五年間に於けるものと比肩すべき政治家も持たなければ、國家利益をも持つてゐない。この時代の國民經濟學上の文獻に於ても、精神力の幾分減退してゐることが認められるのは、恐らくこれと關聯してゐるのであらう。折衷學者ダヴナンが、既にその例證である。そこで英吉利國民生活をその最高點にまで導くべき、新たな飛躍を開始したものは、理論家としてはデイヴィッド・ヒュームであり、實際政治家としてはチャタム卿【Lord Chatham】であつた。

上述の諸考察が、その主たる内容に於て誤りなしとせば、斯學の歴史に關する經濟學者たちの通説は、輕微ならざる次の三點に於て變更されねばならないであらう。

(一) 國民經濟學の發展上、フィジオクライトに先だつ時期の全體をマーカントイル・システムの名を以て示す、我が一般流行の習慣は、少くとも一個の甚だ不十分な見解である。教科書界の傳統がマーカントイルリストに就いて畫くを常とする、有名な描畫は、十七、八世紀の比較的重要なならざる多數著述家連に就いては、常に當て篋まるけれども、極めて卓越した學者たちに就いては決して正鵠を得て居らぬ。成る程若干の點に於てはこれと一致することもあらう。併し他の而も重要な諸點に於ては全くこれから離れてゐる。マシヤチャイルドやダヴナンの如く甚だ異つた種類の人々を『マーカントイルリスト』といふ一語で特長づけるのは、恰かも加特力教史家が總ての新教學者は、ヘンゲステンベルヒ【Hengstenberg】からストラウス【Strauss】に至るまで悉く『非加特力教徒』乃至『邪教徒』といふ一語を以て、充分に表現したと考へると、全く軌を一にした妄言である。要するに、マーカントイルリズム【Merkantilisismus】とフィジオクラシー【Physiokratie】とインドストリー・システム【Industriesystem】とを、經濟學史上傳來の分類は、甚だ便利ではあらうが、併し



實際上は充分な根據を持たぬ。まづ精々の處、我が諸の教科書は、十六七世紀の文獻を、二つの異つた編で取扱ふを以て、満足すべきであらう。そこでその一が大陸に關するもので、依然として尙ほ『マーカントイル・システム』の標題を帯びるとすれば、その二は『舊英吉利學派』【*the English Schule*】と云ふ標題を付けられなければならぬ。

(二) アダム・スミスは、普通考へられるやうな程度では、彼の述べた諸眞理の發見者ではない。我々は、これまで、彼の先驅者たちを故意に小さくして彼の前に置く積りは、殆んどなかつたが、<sup>1)</sup>體系及び形式に對するスミスの驚くに堪えた才幹の爲め、自ら、これらの先輩がその値する以上に光を失はしめられたことも、また否まれない。スミスが體系の殆んど總ての輪廓は、その萌芽が比較的有力な諸先輩の多數に於て認められ得るといふ意味に於て國民的である。而も個々の點に於てさへ、黄金時代の實に多數の重要な成果は、半世紀乃至それ以前既に、これが直接の先輩を持つてゐたのである。<sup>2)</sup>勿論この洞察は毫もスミ

1) ダニエル・ウエイクフィールド 『經濟學に關する一論』 (Daniel Wakefield: An essay upon political economy. [2 ed.] 1804.) は、スミスが『偉大な』サー・ジェーム・ステュアートを最も熱心に利用しながら、忘恩至極にも決して引用しなかつたことを以て、露骨に彼を非難してゐる。

2) アダム・スミス分業論のマンデヴィユ『蜜蜂物語』 (Mandeville:

スの名聲を傷けるものでないことは、恰かも彼の學說の更に完全な發展が、彼の後繼者によつて示されたといふと、異るところはない。否なむしろ、彼を歴史の言はゞ中心點に置き、前人の總てを彼への準備として、後人の總てを彼からの發展として現はれしむることは、蓋し偉人に對して捧げられべき最高の讚辭であらう。

(三) 最後にまた甚だ多くの經濟學史書が残した印象

Fable of the bees, or private vices public benefits. 1714.) に於ける、リカルド地代論のアンダーソン『穀物法の性質に關する研究』(James Anderson: Inquiry into the nature of the corn-laws. 1777.) に於ける、マルサス人口論のベンジャミン・フランクリン『人口増加に關する諸考察』(Benj. Franklin: Observations concerning the increase of mankind. 1751.) に於けるが如くである。同様にプライスの減債基金論は、ナサニエル・グールドの『我が王國の公債に關する一論』(Nathaniel Gould: An essay on the public debts of this kingdom. [In a letter to a member of the House of Commons. 3 rd. ed. London] 1726.) 及び『公債論辯護』(A defence of an essay [on the public debts of this kingdom, etc. In answer to a pamphlet, entitled, A tract of the national debt etc. By the author of the essay. London] 1727.) に於て、國債を私有財産の上に割り充てやうとするリカルドの案は、アーチボルド・ハッチソンの『國債論』(Archibald Hutcheson: Treatises relating to the national debt. 1721.) に於て、最近の利子輕減策はジョン・バーナードの『國債利子引下げ策』(John Barnard: Considerations on the proposal for reducing the interest of the national debt. 1750.) に於て、その先驅者を持つてゐるが如き、その他この例は多い。



即ち十八世紀の中葉以後までは、経済科学に對する一種の單獨所有權乃至少くとも假所有權を持つてゐたものは、佛蘭西國民と伊太利國民とであつたといふ印象は、人を惑はすものである。クロムウエルの時代以降否に既にエリザベス時代に於てさへ、英吉利は、今日認められてゐると同じ様に國民經濟學の正統の國であつたと見做すことができる。斯くて英吉利國民は、常時既に多くの點に於て、爾かく甚しく遙かに後世に屬するフィジオクラシーより、著しく眼界が廣くなつてゐた。殊に彼等は、重要な實際問題が刺戟を與へた時にのみ理論を押し擴げるてふ、彼等獨特の國民性を、當時既に持つて居た。そしてこれは多くの進歩を妨げはしたが、併し無數の誤謬をも防いだのである<sup>1)</sup>。

1) スュリー主義 [Sullysmus] とコルベール主義 [Colbertismus] との對立、進んでは、フェジオクラシーとマーカンティル・システムとの對立が、主として田舎と都會とのより深刻な對立に基くものとすれば、シェーンが『新經濟學研究』(J. Schön: Neue Untersuchung der Nationalökonomie [und der natürlichen Volkswirtschaftsordnung. Stuttgart etc. 1835.])の一四頁に於て、既に昔の英吉利國民が斯様な諸偏見に陥らなかつたことを説明する爲めに、この國の憲法が都市と田舎との間に於ける凡ゆる激しい對立を妨げてゐる、といふことを以てしたのは、確かに誤謬ではない。

## 補遺二編

## 【一】本論一四〇頁補遺

第三章の結論に當り、英領植民地建設の個々の志士たち全體を結合すべき言はば焦點として、サー・ウォーター・タラーを描寫したと同じく、本章<sup>1)</sup>を完結するには、パロネット・サー・ウキリアム・テムブル [Sir William Temple] (一六二八—一七〇〇)【<sup>六</sup>九九年】を以てせねばならない。この偉大な外交家は、その教養殊に經濟學上の教養に於て、コルベールからも多くのことを學んでゐるが、英吉利から言へば、全く字義通りに、和蘭との連衡の主たる代表者である。彼は三國同盟成立の仲立をし、ウキリアム三世とジェイムス二世の皇女との婚儀を準備し、ドウキット並びにオレンジ公とも親しく交つた人物であるが、同時にその『和蘭觀』(Observations upon the United Provinces of the Netherlands. 1672. 8°)の中で、和蘭の隆盛に關する極めて立派な描寫を、而も同國の衰微し始めた丁度その瞬間に行つてゐる。本書は、歴史

1) 『貿易に於ける和蘭の榮の模倣』といふ標題がついてゐる第七章。



編に於ては尙ほ多くの遺憾な點を残して居り、用語も可成り不齊一で、或る時は魅力の籠つた美文であり、或る時は氣障であるかと思ふと、また或る時は明かに無頓著に取扱つてゐるが、それが記述的特殊統計の傑作に屬することは疑を容れない。テンプルは和蘭國民の特性描寫を次の對句を以て結んでゐる。「空氣より土地がよく、名譽より利潤が求められる處、機智より分別に富み、善い氣分よりよい氣立に富み、歡樂より富の多い土地、定住するより旅行することを好み、欲しい物より見るべき物に富み、愛すべき人々より尊敬すべき人々の多い土地」<sup>1)</sup>。——尙ほ我々が明かに觀取する如く、テンプルは、和蘭の事情に關する描寫を、英吉利に對する實際上の關係から見て書いてゐるが<sup>2)</sup>、殊に *The cause of their fall in 1672* 【千六百七十二年に於け

1) 千八百十四年倫敦版『全集』第一卷一五〇頁【一七〇頁】。【ロツシャーが本書で引用してゐるテンプルの『全集』は、千八百十四年版であるが、私は便宜上次の版を利用した。The works of Sir William Temple, Bart. Complete in four volumes octavo. To which is prefixed, the life and character. A new edition. London 1770. [...]頁]内の頁数は、總て千七百七十年版の頁数である。尙ほロツシャーの引用文とこの千七百七十年版原文との間には、間々一致しない箇所があるけれども、それはロツシャーの底本たる千八百十四年版とこの千七百七十年版との相違に基くか、又は他の原因に基くか、遺憾ながら判明しない。】

2) 就中『全集』第一卷一三〇頁以下【一五〇頁以下(?)】参照。

る和蘭没落の原因」なる最後の章は、今日の英吉利國民にとつて極めて多くの肝銘すべき暗示を提供するであらう。

この論文以外、尙ほ我々の目的にとつて重要なものは、『愛蘭土に於ける貿易増進に關する一論』(An essay upon the advancement of trade in Ireland. 1673.)であるが、それは當時の總督エセックス伯の希望に基き、テンプルが執筆したものである<sup>1)</sup>。本編は、テンプル自身の考へからすれば、本全集中和蘭に關する諸相當篇に照應し、世界中最も富むな國土を、最も貧乏な最も發達の遅れた國土に、對立させたものである<sup>2)</sup>。テンプルに従へば、各國民の富は、土地が成長せしめるところのもの(growth of the soil)<sup>3)</sup>より、寧ろ人間の勞働から生ずる。和蘭の河川運河網の長所に就いて、その上では書いたり食べたり寝たりしながら、而も同時に舟行するを得ると述べてゐる箇所があるが、その最後にテンプルは呼んで曰ふ『如何なる國でも、勞働しつゝある【……】人々の時間は、最大の國產品である』<sup>4)</sup>と。これこそ、彼が人口而も相對的人口

1) 『全集』第三卷一頁以下【五頁以下】。

2) 『全集』第一卷一六四頁【一八四頁】。

3) 『民衆の諸不滿に就いて』(Of popular discontents.) (『全集』第三卷五八頁【六〇頁】)。

4) 『全集』第一卷一二九頁【一四九頁】。従つて今日の Time is mo-



を甚だ重視してゐる理由である。『和蘭は』と彼は言ふ『良港によつて富有を致したわけではない。【一七七〇年版には、これに「相當する字句は見當らぬ」】それは寧ろ、港灣が貿易を伴ふものではなく、却つて貿易の方が港灣を充たしこれを繁榮に赴かしめるものである、といふことの極めて著しい證據を提供する。尙ほ和蘭は、内國産の自然生産物によつて富有となつたのでもない。それは寧ろ、經營の助けによつて、凡ゆる外國産原料の加工によつて、自らは歐羅巴の共同倉庫となり市場の要求する商品を各地に供給することによつて、又その海員たちが世界の共同運搬夫（蓋し適稱である）となることによつて、富有となつたものである。そこで、若し貿易の發生が港灣に乃至内國産原料品に基因し得ないとすれば、（和蘭はこの二つの見地よりすれば、最少最悪のものを持ち、愛蘭土は最多最良のものを持つ【七〇年<sup>下</sup>は幾分これと異つた言ひ廻しをしてゐる】）それは他の如何なる源泉から生じ得るであらうか。何となれば、我々が經營に就いて語るときは、それと並んで更に、甲の國に於て國民を勤勉ならしめ乙の國に於て怠惰ならしめるものは一體何であるか、と尋ねなければならぬから。私は思ふ貿易の真正の起源と基礎とは、狭少の地域に密

集した多數の人口に存する。これによつて凡ゆる生活必要品は騰貴し、總じて持てる人々は貯蓄に導かれ、而も持たざる者たちは勤勉を強制されるか又は窮迫に陥る<sup>1)</sup>。屈強な身體を持つ人々は労働に身を投じ、然らざる者はこの不足を補ふに、何等かの發明又は熟練を以てする。これらの習慣は、先づ必要から發生するものであるが、模倣によつて増大し、時が経つにつれてその地の第二の天性となる。而してこの事情が海に面する土地に存するとき、如上の習慣は必然的に發して貿易となる。これ蓋し第一に、爾く多數の人々の生活に必要であり、而も國內に缺乏してゐる物は、外國から輸入せざるを得ず、第二にはまた多數の國民と狭少な國土との爲めに土地が甚だ高價となり、この途による財産の改善 (improvement of money) は些少に止り、従つて多大なる利益によつて危険を補ひ得べき海に向ふことゝなるから<sup>2)</sup>。他の箇所では、同じ發展経路がより簡單に次の如く

補遺

1) 同様に、和蘭人の國民性たる潔癖も、その氣候から説明される。

若し和蘭國民が絶えず掃除したり磨きを掛けたりしなければ、その氣候は、總ての金屬を直ちに錆びさせ、總ての材木を腐敗せしめるであらう（『全集』第一卷一三二頁【一五二頁】）。和蘭の立派な舗道も、この土地の泥濘と濕潤とによつて強ひられたものである（同處）。

2) 『全集』第一卷一六三頁以下【一八三頁以下】。第三卷二頁【六頁】は、殆んど遂語的に同一で、唯だより簡略であるに過ぎない。

ney【時は金なり】と似てゐる。上述、一〇一頁以下、一六〇頁以下、二〇一頁以下参照。



書かれてゐる。『和蘭の稠密な人口は、この地に勤勉を植え付けそれを習慣たらしめ、それに據つて凡ゆる種類の製造工業と貯蓄とを、更にまたそれによつて一般的富を植え付けた』<sup>1)</sup>。従つて人口が稠密なことも和蘭國家の偉大と權勢との主因である<sup>2)</sup>。

従つてこのことは、フォルボネー、ゾンネンフェルス、ネッカー等をして、人口増加論を自己の經濟學體系の中心點たらしめた後世の見解を、その儘思ひ起さしめる。この點は、テムブルが同時代のチャイルドに比し<sup>3)</sup>人口増加に關する諸自然法則を理解することが遙かに少かつただけに、愈、以て目立つ。マルサスの法則に就いては、少しも氣付いてゐなかつた。『一國に於ける人口は繁殖健康壽命に有利なる氣温によつて増殖するか、又は生國に於て安易たり得ない人々を信用せしめて、その地に引き

1) 『全集』第一卷一七一頁【一九一頁】。

2) 『全集』第一卷一六二頁【一八二頁】。同時代のスピノザ【Spinoza】も惟へらく、Imperii potentia ex civium numero aestimanda est. 【國家の權勢は、市民たちの數に據つて見積られる。】——『政治論』(Tractatus politicus) 第七章第十八節【キルヒマン獨譯本(Benedict von Spinoza's politische Abhandlung. In Philosophische Bibliothek, herausgegeben, beziehungsweise übersetzt., erläutert und mit Lebensbeschreibungen versehen von J. H. v. Kirchmann. Berlin 1771.) 九九頁。】

3) 上述一二九——一三〇頁参照。

寄せる如き政府の下に於ける、安易なる諸状態によつて増加する。一度この事情が動き始めると、火が新しい火を生み出す如く、貿易は新しい貿易を生み、既に多數の人々が集つてゐるその土地に、更に多數の人々が寄つて来る』<sup>1)</sup>。和蘭の稠密な人口も、殆んど移住のみによつて説明される。そしてこの移住を發生せしめたものは、和蘭國民の寛容と安全と自由とに對する、隣邦諸國に於ける宗教上の迫害と内亂とである<sup>2)</sup>。他方に於て諸の植民は、殊に規則的な植民に於て然りであるが、我が筆者から見れば、人口數減少の主たる手段と考へられる。我々は、唯だ外國人たちの收容と國內自體に於ける出生數の増加とに依つてのみ、これを免れ得るであらう。この最後の見地から、テムブルは、家族の多數な家父たちに報酬を與へること、二十五歳になつてもまだ結婚しない人々に重税(彼等の所得の三分の一までの)を課することを唱へ、而してこれによつて、同時に道徳の改善をも期待してゐる<sup>3)</sup>。

1) 『全集』第三卷二頁以下【七頁以下】。

2) 『全集』第一卷一六六頁以下【一八五頁以下】。

3) 『民衆の諸不滿に就いて』(『全集』第三卷五七頁以下【五八頁以下】)。早婚と多數家族とに酬ゆるに免稅を以てし、上流階級にあつては更に年金を以てさへした、千六百六十六年ルキ十四世の勅令は、既に千六百八十三年従つてコルベール逝去の直後に、廢止された。フォルボネー『佛蘭



経営と並んで第二の大きな富の源泉即ち貯蓄に就いては、テンプルはこれに観察を下す絶好の機会を、和蘭に於て持った。彼は總じて消費に對し特別な重要を置いてゐる。而してこれに關する諸觀察は、彼の書いたものうちにあつても、最良のものに屬する。テンプルが富の概念に於て相對的要素をすつと前景に置いてゐるのは、正にこの理由に據る。エンクワイゼン養老院【hospital at Enchuyzen】で提供して呉れるもの以外には何も必要としない、と説明してテンプルの與へた心附を拒絶した老水夫は、生れてこの方始めて會つた唯一の金持ちである、と我がテンプルは説明してゐる。『富と貧とに關して一體何といふ夢幻的な評價が、世の中に行はれてゐるのであらう。百萬金を求めるものは王侯で、一文しか求めないものは乞食である。而もこの男は、貧者でありながら寸毫も求めるところがなかつた』<sup>1)</sup>。和蘭人の國民性たる貯蓄は、元來必要によつて命ぜられたものであるが、後にはそれが名譽となつた（一三六頁【一五六頁】）。『彼等に一般的な富は、各人が支出する以上を所持すること、もつと適切に言へば、多少に拘らず兎に角收得すべきものより

西財政史』第一卷三九四頁を見よ。テンプルは、彼の提案に際し、確かにこれを眼中に置いてゐたものであらう。

1) 『全集』第一卷一四〇頁以下【一六〇頁以下】。

支出する方が少いことに存する。經常的支出の總計は収入に等しかるべしといふが如きは、彼の地の人々の頭には存在しない。そして萬一斯様な場合があつたとすれば、彼等は少くともその年は無爲に過したと考へる。斯様な生活の仕方は、恰も他の國々に於ける放蕩な又は法外な放蕩と同じく、この地の人々の評判を悪くする』（一三八頁【一五八頁】）。凡ゆる經費の極めて詳細な豫算と極めて整然たる秩序とが結付けられてゐるので、自分は、公私の建築工事にして、未だ嘗て豫定期間に落成しなかつたものを見たことも聞いたこともなかつた、とテンプルは保證してゐる（二三九頁【一五九頁】）。後にアグム・スミスの爲した如く<sup>1)</sup>、テンプルも既に二種の奢侈を分けてゐる。その一は家屋や家具に向けられるもの、その二は食物や衣類や召使に向けられるものこれである。第一種の奢侈は、晉に和蘭に流行してゐるといふに止らず、また實に第二種のものに比しより、良い奢侈でもある。それは大して果敢ないものでもなく、大して無駄なものでもないし、健康や事業にとつてそれ程不利なものでもない。如何なる場合にも、第二種のは、全く浪費者のみに而も自己の個人的虚榮満足の爲めに限られてゐるが、第一種のもの

1) 『國富論』第二編第三章。



は、嘗に一家の富を形成するのみならず、公共の美觀と國家の名譽にも貢獻するところ大である（一三九頁【一五九頁】）。『和蘭程多くの貿易を營み、而も和蘭程僅かしか消費しない國はない。和蘭は印度産香料と波斯産絹物との大親方であるが、自らは粗末な羅紗を着け、自國産の藥味や魚類を食べる。然り、彼等は自國の最も美しい織物を佛蘭西に賣り、自家の消費用としては英吉利産の粗末なものを買ふ。自國産の最上、パタは全世界に送り、自國用としては最も安いものを愛蘭土又は北部英蘭土から買入れる。要するに、彼等は、自らは決して耽らぬ奢侈品を無限に供給し、自らは決して味はぬ享樂品を商ふのである』（一七六頁【一九五頁】）。最大の政治家たちでさへ、極めて質素に生活する。勿論、そうしなければ、諸の重税や市參事會の無限な權勢は、國民の進んで耐え忍ぶところとはならないであらう（一一三頁【一三四頁】）。尙ほテムブルは、激務に従ふ人々が早く老衰しない爲めには、一定程度の娛樂が必要であると考へてゐる。それ許りでなく、彼はこのことを生理的に説明する途を知つて居り、凡ゆる聯邦の官吏たちが名譽のみならず富にも結付けられてゐる事實を、これによつて根據付けてゐる（二四三頁以下【一六三頁以下】）。この國民の常食がこの國民生來の勇氣に著しい影響を及ぼしてゐると考へてゐるのも、こ

のことと關聯してゐる（二四六頁【一六六頁】）。

尙ほテムブルは、結局に於て、體系の人といふより、寧ろ、常識の人であり、社會的教養を持つた人であるから、理論經濟學の分野に於ける知識に至つては、可成り缺陷がある。『低い利率、と高い地價とは、國民の數が多いことの結果であり、又凡そ利益の擧がる見込のある事業に利用し得るだけの貨幣が常に存することの原因でもある』（一七一頁【一九一頁】）。他の箇所ではまた、英吉利に於ける地代が數年この方甚しく低下した現象を説明せんとしてゐるが、そこで彼は、結局これが原因として、人口の減少、上流階級に於ける舶來品の大消費、萬人の生活様式が以前より華美となつたことを認めてゐる<sup>1)</sup>。從

1) 『全集』第三卷二〇頁【二三頁】。その眞の原因は、恐らく、當時殆んど歐羅巴全土を支配してゐた穀價の異常なる繼續的低下に、存するものであらう。そして更に後者は、就中千六百六十年以降、諸の戦争と革命とに充ちた一世代を閉ぢたところの、かの深靜なる平和の一結果であらう。類似のことは、千八百二十年以降にも、體驗された。戦争その他を免れた諸地方は、從來共同して他の諸地方の爲めに生産しなければならなかつたが、これ等の地方は矢張り従前通りその耕作を繼續した。從來戦争の巷であつた處は、新たに耕作を始めた。假令、打續く災禍から免れた後には、今や諸の希望や計畫を著しく緊張せしめることが人間の本性でないとしても、這般の事情のみを以てして既に、過剰生産を説明するに足るであらう。このことは、瑞西に於て殊に明瞭に觀取される。同國は三十年戦争こそ免れたが、その代り千六百五十四年以降多年に互る農業恐慌を經驗し、穀物は倍落



つてこれら諸原因のうち少くとも最初のもつと最後のものは、正に相殺せられるであらう。貿易の均衡に就いては、我がテンプルは、同時代の佛蘭西學者たちと精神上の縁者である。『貿易が富を造るといふことは、決して例外のない原則ではない。國民を貧困ならしめる貿易もあり得る。』……貿易から生ずる國富の唯一確實な尺度は、他國の消費の爲めに輸出されるものと自國の消費の爲めに輸入されるものとの比例、これである。この比例の眞正の基礎は、國民一般の勤勉と貯蓄、又はこれらのもの、反對に、存する。勤勉は、土地生産物にしる製造工業品にしる、兎に、角輸出用の商品を生産する國の國産を増加する。貯蓄は、自國品又は外國品の消費を減少し、後者の輸入を減少するのみならず、前者の輸出をも増加する。何と

し、地價は下落し、多數の破産、移住（千六百六十年以降）、農民一揆等を生じた。英吉利では、當時多くの人々は、この苦難の原因を、次の事情、即ち、愛蘭土の農耕が多數の英蘭土移植民たちに依つて甚しく促進されたことに歸した。そこで愛蘭土産家畜の輸入が禁止されたが、勿論テンプルは、これに對して論戦してゐる。（『全集』第三卷、七、一九頁【一一、二三頁】。第七卷、一八三頁【二〇二頁】参照。）尙ほサー・ジョサイア・チャイルドの佛譯七三頁、一二四頁以下【英原著、一一頁、四五頁以下】、並びにトツク『物價史』（Tooke: History of prices, [and of the state of the circulation, from 1793 to 1856. London 1838-57. 6 vols.]）第一卷二四頁を見よ。

なれば、總ての内國産生産物のうち、國內で消費される部分が少くなれば少くなる程、輸出される部分は愈々多くなるから。凡そ商品にして、その價格は如何にてもあれ、兎に角一つの市場を見出さぬものはないが、この市場に於ては、最廉の價格で供給し得る者がその支配者となる。而して斯る支配者となるものは、何時でも、怠惰奢侈なる人々の生活し得ない價格を以てして尙ほ且つ繁榮し得る、極めて勤儉力行なる人々である（一七五頁以下【一九四頁以下】）。そこで、外國商品の輸入は、貨幣を以て支拂はれず内國生産物を以て支拂はれる限り、國民を貧しくするものではない、といふ『世俗の謬見』に對しても、反對する。『一國と外國貿易上の總ての友邦との間の勘定を決済するに當つては、輸入價值と差引いて輸出價值が幾らかでも不足してゐる限り、それだけは必然的に地金で補はれなければならない』（一七六頁【一九五頁】）。同じ理由から、内國商品の使用に於ける奢侈は貿易にとつて有利である、とする一般の通説をも排斥する。勿論それは、國を貧困ならしめる貿易には有利となるであらうし、又事實外國商品に於ける奢侈ほど有害ではなからう。併し、内國品に始つたものは外國品にまで進むであらう（二七七頁【一九六頁以下】）。茲に既に我々は、後ダヴナン<sup>1)</sup>が體

1) 上述二三頁参照。



系化した見解に逢着する。即ち、敵地に於て行つたルキ十四世の成功した攻撃戦は、佛蘭西軍の俸給を持ち出したのであるから、自國の國境内に於て行はれた従前の防禦戦に比し、佛蘭西を疲弊せしめること大である<sup>1)</sup>。——このマールカンティリズム流の雲霧の中から洩れ出でた日光とも言ふべきは、愛蘭土の貿易制限を機縁としてテムブルが警告的に呼んだ次の言葉である。Where they sell, they will be sure to buy too. 【販賣した處からは、購買するに至ることも、必定である】<sup>2)</sup>。唯だこの重要な命題の諸歸結は、これ以上彼の意識に上らなかつた。尙ほテムブルは、原毛を輸出して織布を輸入し乍ら、而も均衡が決定的に順となつた場合のあることを認めてゐる<sup>3)</sup>。——貨幣を増加する爲め又は少くともこれを國內に確保する爲めに、名目上鑄貨の稱呼を高めることに對しては、テムブルは極力反對の意志を表明してゐる<sup>4)</sup>。

テムブルの諸著作は、政治心理學の領域に於ける立派な觀察に甚

1) 『オルモンド侯に奉るの書』(To the Duke of Ormond: The measures to be pursued by England. 1673.) 『全集』第二卷二三七頁【二三二頁】。

2) 『全集』第三卷一九頁【二三頁】。

3) 『全集』第一卷一七八頁【一九七頁】。

4) 『全集』第三卷五頁以下【九頁以下】。

だ富んでゐる。斯くて例へば、商業上の繁榮と信教上の自由、商業上の繁榮と政治上の自由との間に於ける内部的關聯に關する彼の説明<sup>1)</sup>や、商人的氣象と軍人的氣象との對立に關する彼の描寫(一四五頁以下【一六五頁以下】)の如きは、卓説と見做すことができる。彼は甚だ冷靜な態度を以て、中世の諸王侯領を貴族や騎士たちに、諸の自由國や都市を個々の國々の商工業者たちに擬してゐる。初めの程は、後者は前者から輕蔑され、これが御用を勤め、これを尊敬してゐたが、そのうち種種時勢の移るとともに、後者のうち若干のものは、勤勉と貯蓄とに依つて富強となり、前者のうち若干のものは、戦争と浪費とに依つて貧窮となつた。斯くの如くにして、商人たちも終には騎士の様になり、騎士たちも商業を好むに至つた(一八二頁【二〇一頁】)。テムブルは、少しも偏見に囚はれることなく、和蘭國民相互間の交易に於て一般に普及してゐる誠實を説明するに、彼等の勝れたる徳義を以てするよりは、寧ろ、彼等が文化の段階を以てする。このことたるや、恰も戦争が訓練を要求する如く、商業は必ず相互間の公正を要求するといふ必然性に基き、若しこれなきときは、全體はバラ／＼になつて了ひ、商人たちは棒手振りとなり、戰士たちは追剥

1) 『全集』第一卷一六二、一六五頁【一八二、一八五頁】。



となるであらう。従つて、テムプルが、かの和蘭國民の徳義に就いて言及してゐる場合は、唯だ彼等が自分たちと同じやうな専門家とともに法律の範圍内で通商する場合だけに限られる。他の機會に於ては、和蘭國民も相手方の無智と朴訥とに依つて、相當に儲けることを試みてゐる（二三四頁【一五四頁】）。

愛蘭土の國富を増進する爲めにテムプルが提出する諸提案は、殆ど全く1)次の一點に歸着する。この島の假睡しつゝある諸力は、自然に目を覺ますことはできないから、國家に依つて覺醒せしめられ、その間隙は國策に依つて補充せられねばならない。そこで例へば、愛蘭土にとつて甚だ適當してゐる亞麻工業を獎勵する爲めには、從來の獎勵金以外、國家又は總督が自らの資財を以て大きな亞麻工場を建て、終には、この工業部門が國民のうち根を下ろすまでに至らしむべきことを提唱してゐる。或はそれが餘りにも困難であると見做されるならば、亞麻生産者たちに對し、その商品の安全なる販賣と低廉なる價格とを保證する爲め、少くとも國費を補給しなければならぬ（二二頁以下【第三卷一五頁以下】）。海上漁業獎勵の爲めには、大會社を創立し、魚類の處理法に關する諸警察法規を

1) 人口を増加する爲めの一般の方策は、當面の場合にあつても主たる對策を成すものであるが、この點は無論措いて問はぬこととする。

定めると共に、各種の特權や納税の免除等を許さなければならぬ。否なテムプルは更に進んで、議會及び治安委員會 *commission of the peace* への被選舉權を、これら會社の關與者だけに限るべきこと、並びに政府もその株に参加すべきことをさへ、薦めてゐる（二三頁以下【二七頁以下】）。愛蘭土産の食用肉や牛蠟やバターや皮革類の輸出を不評ならしめた數多くの詐欺瞞着を豫防するには、その取引を一定の指定市場に制限し、而もこの市場に於ては、嚴重な警察的検査並びに檢印制度を制定せねばならぬ（二四頁以下【二八頁以下】）。船舶業を獎勵する爲めには、比較的大きな柵樹はどれでも、造船に適當した一定の強さに達しないうちは、その伐採を禁ずるが宜しい（二六頁【二九頁】）。併し何より先ず商人階級の榮譽を高めなければならぬ。即ち總督は、極く重要な開港場に住む商人たちの代表者中から、二人の樞密顧問官を指名しなければならぬ（二七頁【三〇頁】）。同様にまた馬匹飼育の如きは、總督が品評會に關係したり受賞者たちを總督の賜餐に招待すること等に依つて、獎勵し得るであらう（二二頁以下【二五頁以下】）。——如上の政策は、明かに全部コルベールの重要な政策の模倣であつて、比較的低下な一定の文化段階に於ては、勿論推稱すべきものである。交易の流れが未だ餘りに微弱過ぎ、國中の欲望を一年



中に互つて充足すること能はざる處にあつては、言はゞ一定の貨物集散地及び大市開催期に於てこの水を堰くことが有益であらう。外國の販路に頼らねばならない生産が、多數なる教養の低い小生産者たちの間に分散されてゐる場合には、他の場合に於て大きな私的企業者たちが、(而もこの場合には勿論よりよく)成就するところの用、即ち一方では、消費の要求を絶えず知悉し得る状態の中に生産者たちを置き、他方では、これが適當なる充足に對する保證を消費者たちに與へるといふ用は、國法又は品評會がこれを賦與し得るであらう。國立の諸工場に對しては、偉大なる貿易自由の友ジュー・ペー・セーが國費に依る諸試験に對して適用したと同じことが、言はれ得る場合もあらう。最後に、總じて、*Et grum et iners videtur sudore adquirere quod possis sanguine parare* 【あなた方が血を以て産み出し能ふものを汗を以つて獲んとするは、怠惰且つ無能と見られる】といふ凡ゆる野蠻民族に共通の原則が、未だ尙ほ支配してゐる處にあつては、自由なる營利を尊敬せしめる爲めに政府の行ふ積極的干渉は、重要な文化の手段となるを得る。これによつて我々は、斯くの如き諸提案が、コルベールの佛蘭西にとつてより、當時の愛蘭土にとつて、更に遙かに躊躇なく施し得るものに相違ないことを、識るであらう。從來愛蘭土では、國家が甚

だ多くのことを積極的に妨礙し來つたから、今やこれから積極的な助長をさへ期待することができた。従つて英蘭土や和蘭の如き國々に對しては、テムブルは未だチャイルドと大して異つたことを考へる必要がなかつたのである。

愛蘭土が英吉利の植民地として占めてゐる位置に就いては、テムブルは、彼の時代に通例な諸見解を持してゐる。愛蘭土の貿易が、その諸部門中の何れか一つに於て、英蘭土の貿易を危険ならしめる如き競争を行ふに至るや否や、これが『獎勵は制限されるか又は撤去されねばならない。』斯くて、例へば、愛蘭土の羊毛工業の如きは、本島自體の普通の需要に應ずべき少數の粗製品に限られる。『何となれば、陛下の兵力と富力と光榮とは、主として英蘭土の健康及び勢力に懸ると考へられるから。』反對に、或る種の他の部門、例へば亞麻工業の如きは、決して壓迫してはならない。假令英蘭土からであるとするも、法外に多額の商品を輸入することは、愛蘭土から貨幣を流出せしめ、内地商業の經營にとつて充分なだけの保有正貨が、最早存在しない程度にまで至らしめ、斯くて惹起される一般的不満は、英蘭土にとつてさへ危険となり得るであらう(九頁以下【一三頁以下】)。最近發布された英蘭土への生畜移出禁止令は、テムブルの斷然非難するところである。それは、唯



だ特定侯伯領の利益になるだけで、全国にとつては有害となる。英蘭土はその爲めに可成りの額に上る運賃及び肥飼の利益を失ひ、同時に愛蘭土人たちは、皮革、バター、鹽漬肉貿易に於ける英蘭土の競争者として、海外諸市場に現はれざるを得なくなり、一般に英蘭土の市場と絶縁することゝなる（一九頁【二三頁】）。——愛蘭土の不在地主制度をテンプルが如何に判断してゐるかは、貿易均衡に關する彼の見解から見れば、これを推定するに難くない。この制度は、本島の政情を以てすれば當然であらう、少くとも従來はそれに付きものであつた。併しそれだけまた、反對に愛蘭土の貿易と富とにとつては、有害な作用を及してゐる。この不在地主制度がなかつたなら、莫大な自然的資源を持つてゐる愛蘭土は、歐羅巴中で最も富むな地方の一つとなり、英蘭土王國の權勢と歳入とを甚しく増進したであらう。然るに今までのところでは、それは寧ろ『我が國の弱い側面であり、値する以上の血と金を費さしめたのである』（四頁以下【八—九頁】）<sup>1)</sup>。

### 【三】 本論二四九頁補遺

ダヴァンと同じく、英吉利經濟學の舊い國民的諸基調を、愈、強力に侵入し來るコルベルティズムと融合させやうとした、折衷的傾向に屬する他の極めて繙讀に値する一書は、『貿易鑄貨並に證券信用に關する論策、附録、無免許營業者サンズ氏に對して東印度會社が提起した訴訟事件に關する、博學なる一訴訟代理人の議論』(A discourse of trade, coyn and paper credit: and of ways and means to gain and retain riches. London 1697, printed for Brabazon Aylmer. pp. 167 in 8°. To which is added the argument of a learned counsel, upon an action of the case brought by the East-India-Company against Mr. Sands, an interloper. 1696. pp. 77. in 8°.) これである。——この匿名著者の人物に就いては、筆者は何等の推量をも敢てしない。出版者は、甚だ慎重に書いた序文の中で保證して言ふ。著者の名前は私自身にも全く判つてゐない、従つてこの草稿を讀んで頂いた多數専門家の判断が、本書の無害にして公益の爲めとなることを納得せしめて下さるまでは、私も印刷を引受けることを躊躇したと。筆者には、この優雅ならざる、或るときは重語的であり、或るときは極めて支離滅裂な、併し常に力強い、用語上の特質は、その原作者が商人であることを、露はしてゐるやうに思はれる<sup>1)</sup>。

1) 博士アッシャー【C. W. Asher】君は、私宛の一書簡中で、本書は、

1) 上述一七六頁以下参照。



それはさて置き、本書は、當時英吉利で經濟學の下に理解されてゐたものゝ可なり完全な摘要である。それは、貿易均衡論を以て始まり、次いで鑄貨と地金との價格關係を研究し、然るのち富の最も一般的なる源泉てふ問題に應へてゐる。利率と證券信用とに關する諸研究が直ちにこれに續き、最後に残りの全部は、常に均衡の見地から見た英吉利貿易の統計的綜括によつて占められてゐる。而してこの場合、最も徹底的に述べられてゐるのは、東印度貿易とその會社制度の有用性である。斯くて、貿易は言はゞ他の凡ゆる經濟學上の諸考察を貫く絲となつてゐるが、このことは、英吉利の比較的古い文獻にあつては極く通例のことと、この點同時代の獨逸の文獻に對し、特色ある對照をなして居る。即ち彼にあつては、その識れる限りの事柄が、殆んど總て國有地並びに王權制

恐らく、サー・ダツドリ・ノースの書いたものであり、以前に述べたやうな性格に従ひ、今や彼は、比較的人氣ある意見に依つて萬一を僥倖しやうと試みたものであらう、といふ想像を述べてゐる。事實多くの個所は、甚しくノースを想起せしむるものがあり、用語も或る程度までこれを裏書きするであらう。彼は、恰もノースが哲學上の諸引用の如く、不自然不適當に聖書の語を引用してゐる（一六五、一六七頁参照）。レヴァント貿易偏重の言を再三述べてゐることも、上の假定の支持として利用し得るであらう（一〇三、一二六、一三九頁。）上述一八二頁以下、一九四頁を見よ。【譯者は本書を参照することができなかつた。】

度の研究に結付いてゐるのである。

富の源泉に關しては、我が匿名者の學説は、誰より先づ、テムブルを想ひ起さしめる。労働と貯蓄とは、個々の家族のみならず國民全體をも富ましめる。總て他の致富の途は、これらのものが無ければ、自ら不充分となるであらう（八〇頁）。我々は労働によつて富を獲得し、貯蓄によつてこれを確保せねばならぬ（一五八頁）。他の箇所では、富といふ概念が動産よりも嚴密に定義され、且つ次の言葉さへ附け加へられてゐる。Labour, industry and Foreign trade; good husbandry in the consumption and expense of the goods of foreign nations and in all our dealings with them (p. 153). Foreign markets, which only can increase riches (p. 54). 【労働と經營と外國貿易。外國産諸財貨の消費使用に於ける、及びこれ等のものに關する我々の取引の總てに於ける、巧妙な處置（一五三頁）。外國の諸市場（これのみが富を増すことを得る）（五四頁）】。従つて我々は、富の起源に就いて論じてゐる箇所の抑、の始めに、次の四個の労働部門が明確に述べられてゐるのを見出す。曰く、土地の内部からの發掘、並びにその所産を更に加工すること。海上に於ける漁獲と諸外國への魚類販賣。他の外國民に轉賣すべき諸外國商品を以てする商業。最



後に、外國に於ける航運(四三頁)。——諸の動産に對して、著者が富の第二の範疇と見做してゐるものは、地代を生ずる土地所有である。ところで彼から見れば、實際、地主たちは、或る點に於て最も重要な階級である。『英吉利の重心は土地に存し、従つて貿易の均衡がどうなるかといふことも、その所有者たちに懸つてゐる。』彼等は、國民の消費を適當な限度内に保つべきか又は破滅に導くべきか、といふ基調を決定すべき人々である(二五九頁以下)。凡ゆる商業上の課税は、實際には、少くとも壓倒的部分に於て、地主たちにかゝる(一五六頁)。併し地代並びに地價の一般的な而も永續的な騰貴は、總て貿易上の順均衡だけの結果である、と彼は考へる。増加した貨幣量は生産物の價格を騰貴せしめ、土地の買手乃至小作人を増加するであらう(四三頁)。他方彼はまた、高い生活資料の價格は、高い地代の原因に非ず、その結果である、と主張する(三七頁)。或は萬一、一般物價の騰貴が惡貨改鑄に起因すべしとするも、地代は恐らく價格に於て共に騰貴すべき最後のものであらう(二九頁)。

勞働は上に述べた様な意義<sup>1)</sup>を持つから、人口の多いことは富の主要な基

1) The stock of the nation, which depends on labour and upon which all must live. 【國民の資本、それは勞働に倚存し、萬人は總てこれによつて生活せざるを得ない】(四六頁)。

礎となる(四三頁以下)。而も主として、國民中の下層階級の増加が重要である。多數の貧乏な移住民は、少數の富有なものより、永續的には恐らくより多く我が國富を増進せしめるであらう(五一頁以下)。併し彼等を充分に勞働せしめなければならぬこと、勿論である(四四頁以下)。従つて著者は、休日が多いことに對する反對者で、それが如何に多額の費用を要するかは、充分計算する途を識つて居り、二百萬人の勞働者では、一日六片として五萬磅となるといふ(四九頁)。彼は高い勞銀をも敵視してゐたが、それは商業と土地とに對する負擔となるが爲めのみならず、特にそれが怠惰に誘ふが故である(四七頁)。従業者たちの個人的幸福に就いては、大抵のマーカントイリスト等と同じく、顧慮してゐない。手工業者たちが餘りに多額の金を支出すれば、それだけは彼等の商品に附け加へられ、従つてその販賣を困難ならしめる。そこで彼は英吉利國民の生活方法が最近非常に安樂となつたことを、痛く歎いてゐる。勞働者たちが奢侈によつて高い勞銀にありつき、これによつて再び怠惰に赴いた、といふことの中に存する矛盾は、彼の注意を惹いてゐない(八二頁以下)。——この際甚だ注目し値するは、著者が今日の所謂生産的勞働と非生産的勞働との間に認めてゐる區別である。彼は完全に次のことを認める。『精神勞働



は、肉體労働と並存する。前者は、社會の扶養にとつて絶対に必要であり、社會は、統治の爲めにも自由と所有との確保の爲めにも、職業の分岐なくしては存續し得ない。これなくしては、工業も助長されないのであらう。従つて多くの人々は、肉體的労働から解放されてゐなければならぬ。これは單に、彼等が大財産と高位とを持つてゐるからといふ理由に基くのみならず、また自ら全く精神労働に身を捧げんが爲め』従つて統治禮拜司法警察その他に従事せんが爲めである。それにも拘らず、『年額一萬磅乃至二萬磅の所得を持つ土地及びこれに加ふるに金山をも所有してゐるジェントルマン、更に多額の利益、乃至は、収入又は所得に對する請求權を持つてゐる牧師、法律家、醫者たちと雖も、國家を富ましたり、乃至は、自ら富と餘裕とを持つなどは、思ひも及ばないことである。彼等は、労働階級の助けなくしては、必要品も、これを購ふべき貨幣をも、獲られないであらう。これらの事情は、如何に屢々考量してもなほ過ぎることはあり得ない。……とところで、他人の汗と骨折とのお蔭で富と必要品とを所有する人々が、これらの人々の扶養の爲めに労働する人々に比して、より多數である場合には、國民の富が消盡され、缺乏と貧困とがそれに伴ふといふ危険が生ずるに違ひない。』従つて著者は、後の職業を犠牲にして前の職

業へ集る傾向を甚しく助長して來た、英吉利の教育方法を悲んでゐる（四四頁以下、一五六頁）<sup>1)</sup>。

貿易、均衡なる語を以て、我が著書は、その時代に一般的なあの觀念を言ひ表はさうとしてゐる（三頁以下、一五七頁）。均衡を算出する際の注意深い方法も（五五頁以下）、決して獨特なものではない。良い部門と見做されてゐる商業部門は、『我が原料品や製造品を使用する商業部門（我が土地の價值と我が貧民の雇傭とは、これに倚存する）、我が海員と航運とを増加せしめる部門（我が權勢はこれに倚存する）、我が貿易を營む爲め又は我が安全の爲めには直ちに必要となる如き諸商品を、我々に供給して呉れる部門、乃至は、輸入する以上に輸出する部門（我が國富の増進はこれに倚存する）』であり、反對に悪い部門は、『輸出する以上に輸入するか、精製品を輸入するか、又は我が國自體の商品の使用を妨げるやうな、何等かの財貨を輸入する部門、乃至は、我が國自體の製造品の代はりとして使用し得る如き製品の加工を、外國民たちに行はしめる爲めに、我が羊毛その他の諸原料を輸出する部門、或は、必要缺く可からざるものでなく、單に遊惰と奢侈とを増加する傾向を持つ

1) 上述一六六頁參照。



に過ぎぬ諸商品を輸入する部門、又は外國の船舶乃至は外國の代理店や商人たちによつて營まれる部門、或は又最後に、貨幣や地金の輸出によつて行はれる部門、これである。如上の事柄は、貿易の試金石として利用し得るであらう(五八頁以下、五頁以下)。嘗てマンが主張した原則からの例外、即ち和蘭ヴェニス・フロレンス・ジェノアが、全く何等の損害をも被らずして貴金屬を輸出したことは、何等自國産の特産品を持たず、従つて單に良港船舶その他によつてのみ、即ち一般に外國間の取引の媒介者としてのみ、利潤を期待し得るに過ぎない國々だけに對して、我が著者はこれを適用しやうとしてゐる(六頁以下)。自由港も、斯様な國々だけにとつては、例へばレヴァントに對するリヴォルノの如く、此處に言はゞ諸外國の倉庫を建ててゐるが爲めに、適當してゐるが、英吉利の如く、それ自身の商取引を持つ國は、自由港の爲め、仲繼貿易で利益する以上に、輸出入その他に於て損害を被るであらう(七八頁以下)。尙ほ著者はある場合には、自國産の原料又は魚類の輸出は決して有害となり得ない(五頁)、と主張しながら、他の場合には、我々は勿論往々にして貨幣を高價に買ひ過ぎることもある(二七頁)、と認めてゐるが、これは一個の矛盾である。決して買戻すことなく、單に販賣するだけに止まる、といふ多數マーカンテイリストたちの理想

は、それ自體矛盾した、従つて不可能な事柄たること——これは認めてゐない様であるが、この場合には報復手段を豫期せざるを得ぬといふ事情を熟考すべきことは、彼もまたこれを求めてゐる(五九頁)。——凡そ英吉利の貿易部門が順か逆かといふことの吟味に際しては、彼は亞弗利加との貿易を特に重視してゐる。これ、この場合には、然らざる限り賣残りとなるべき全くの不用品や粗末な羊毛製品が輸出され、反對に金や象牙や奴隸が主として輸入されるからである。後のものは、一部は植民地に於て缺く可らざるものであり、一部は貴金屬の對價として西班牙人に賣却される。『従つてこれ程擴張する値打ある貿易部門は減多にない』(二二八頁以下)。他方東印度貿易は、歐羅巴の列強が從來この爲めに敵對し合つて來たものではあるが、決して獎勵すべきものでない。それは甚だ多額の貴金屬を吞込んだので、『印度の王様や印度成金たちの圓天井は、歐羅巴に對して、恰も博徒に對する博奕場の如きものとならうとしつゝある。』加之、英吉利の製造品は、國內及び外國市場に於て、印度の製造品の爲めに不利益極まる競争を強ひられなければならぬ(九六頁以下、一二六頁)。

内國商業は、國民經濟上、上述の有用ではあるが、不生産的な勞働と、類似した關係に立つ。



個々の營業者たちは、これによつて富有となり得るであらう。併し國民全體の財産は毫も増殖せず、單に所有者の人物を代へるだけに止る(四〇頁)。眞實の富 (treasure) は、金銀坑を持たない國にあつては、掠奪と征服とによる場合を除き、唯だ外國貿易を通じて獲得し得るに過ぎない(一六四頁)<sup>1)</sup>。従つて餘り多くの人間が内國商業に身を投ずるときは、眞に生産的なる商業部門にとつて、甚だ不利となるであらう(一五四頁)。とは言へ、この制限の範圍内では、著者は、内國商業の有用な事否な必要なことをさへ、充分に認識してゐる。而も造船業もこれが一部門をなし、又製造業者が輸出品の製造をなす爲め、乃至は輸入業者が彼等の輸入品を販賣する爲めに、助けとなるやうな凡ゆる商業も、また同様である。故に内國商業は、假令直接には富を増さないとするも、凡そ比較的大なる外國貿易の不可缺の一條件ではある。同様のことは、地主その他裕福ではあるが何等の商業をも營まない總ての人々にも當て嵌まる。彼等も、消費者として、乃至は原料の供給に就いて共

1) 商人たちは、單に彼等自身の利益だけを眼中に置き、その利潤が輸出によつて即ち外國人から獲られるか、又は輸入によつて即ち自分たちの同胞から獲られるかを、顧慮しない。國家を富ませるものは前者だけで、後者が奢侈的消費に近づいたときは、國家を貧窮に陥れることもあり得る(一四八頁)。

働する。従つて國民は全部、或る程度まで、貿易に参加してゐるものであつて、この事情を適當に顧慮すれば、我々は種々異つた種類の職業間に生ずる總ての敵對を抑へざるを得なくなるであらう(四二頁)。

實踐經濟學の分野に於ては、本書は通常のマークン・ティル・システムより遙かに商業自由、に近づいてゐる。併し凡ゆる場合に於ける如く、この場合にも、完全に首尾一貫してゐるわけでない。國內では、著者は、何等かの仕方で交易を制限しやうとする、總ての法律やギルド組合法その他を、排撃してゐる(四一頁以下)。總ての商業は、『二三少數人の利益の爲めに制限せず、産業を奨励する爲め廣く解放して、各人に自由なる開業を許すべきである』(一二五頁)。諸の新發明だけに特權を與へなければならぬが<sup>1)</sup>、それは、短期間のみ

1) この機會に私は、最初の英吉利特許法 即ちジェームス一世の治世二十四年法律第三號を、想ひ起す。獨逸では大體同時代に、最初の發明特許を認めることができる。この觀念全體が如何に新しいものであつたかは、十六世紀に於て疑ひもなく最も才智に富み而も最も賢明な人物に屬してゐた、サクソン選侯モーリッツの言葉のうちに、極めて明瞭に表はれてゐる。即ちストルベルグ伯[Graf Stollberg]が、揚水機の發明者に對し、伯に前以て知らせることなくサクソン國で斯様な工場を建てない、といふ義務を負はしたと聞いたとき、侯は道徳的な憤懣に充たされたのである。——フォン・ランゲン『モーリッツ選侯の生涯』(v. Langenn: Leben des Kurfürsten Moritz.) 第二卷五七頁。——併し古人も既に、發明特許に就いて



に限るべきである(一三六頁)。彼は奢侈には殆んど考慮を加へてゐない(一六五頁以下)。併しそれと同じ程度に於て奢侈禁止法からも原則として何物をも期待してゐない(八一頁)。政府の利率引下げに對しては、ロツクと類似の諸理由を以て反對する(六二頁以下)。同じく彼は生産または航運を困難ならしめ、それに依つて物價を外國の競争者に比して騰貴せしめる如き課税を悉く非難する(五四頁)。従つてこれも復た以前既に一度ロツクに於て遭遇したところの間接税反對論である。——對外通商に關しては、最高の原則はこれである『貿易の自由は貿易を多額ならしめる爲めに、これが多額はそれを有利ならしめる爲めに、無條件的に必要である。』但し商人たちを富ませるが、一般國民に損害を與へるやうな貿易には、極く例外として制限を加へても宜しい(六〇頁)。そこで著者は、英吉利産の羊毛を加工せずして輸出することに對する、古い禁令に就いては、甚だ慎重に述べて言ふ。羊毛が國內で而も上手に加工され得るなら、この禁令は有利であらう(五三頁)と。他の箇所では、原料並びに製造品(Products—manufactures)の輸出關稅全廢を唱へてゐる(一四六頁)。彼は貨幣及び地金

考へてゐた。アテナイヴス(Athenaeus: [Deipnosophistae.(?)]) 第十二の二二。【譯者は兩書ともに見ることができなかつた。】

の自由なる輸出が公益を害する可能性あることを認めてゐるが(一四八頁)、『併しこれが禁止は、未だ嘗て如何なる國にあつても、何等の良結果を生じたことはなかつた。』それは決して實施することさへできぬ(九頁)。甚だ多數のマーカンテイリストたちは、政府の名目的貨幣價値引上げに依り、貨幣を國內に保持することができると考へてゐるが、彼は大抵の場合これに反對し、斯様な政策の上に或は掛けらるべき總ての希望に反對する爲め、その不正にして恥づべき性質及びそれが單に以前契約された債務關係に著しい影響を及ぼし得るに過ぎないことを立證してゐる(一〇頁以下)。商品の輸入に關しては、疑ひもなく有害な均衡を生ぜしむべき貿易部門を抑制する必要を論じてゐることは、勿論である。『法外に多くの貿易制限が不適當たり得ると同じく、極度に甚しい自由は危険である』(一五〇頁)。併し本來の禁止なるものは、何時でも第一には上からの單純なる模範次には高い關稅で、比較的穩和な諸手段が引續き全く無効となつた時に限つて、最後の補助手段でなければならぬ(五八頁)。國內に於ける數百萬の人々は、貿易によつて生活してゐるのであるから、それだけに、このことは甚だ慎重に處置しなければならぬ(五九頁)。



東印度會社を模した特權貿易會社に對しては、著者は決して味方とはならなかつた。彼の書物の大部分はこの問題に捧げられてゐる(九六—一四四頁)<sup>1)</sup>。彼は、廉い價格で多額の取引をなすことによつて生ずる利潤は、高い價格で少額の取引をなすことからは生ずる利潤よりも、より確實であり<sup>2)</sup>、一國民は、商業利潤が少數者の間に分配されるときより多數人の間に分配されるときより、多くの利益を受けるといふ原則を持してゐる(五四頁)。ところが特權會社は、できる丈け僅少な危険と、できる丈け廉價な購入と、できる丈け高價な販賣とを、目的とするを常とし、従つてそれは商業を常にできる丈け狭く制限することと結付いてゐる。新市場の發見は、大膽な冒險者たちに負ふ場合が非常に多いが、この種

1) 殊に一二〇頁以下、會社の辯護者たちの慣用の諸理由を總括してゐる箇所に於て。

2) この格言の流行は實際に於て、比較的低い文化段階に對し比較的高い文化段階を特徴付ける、最も重要な諸表徴の一つである。それは少數の人々に對立する場合に較べれば、より人道的でありより愛國的であるのみならず、同時にまた、より有利でもある。ところで非必要品にあつては流行の變遷による危険をそれ程多く被らない、必需品にあつては寧ろ人口の増加その他に望みをかけることができる。そこで競争は、特に技術上相手方を凌駕することに集中し、反對の場合には、相手方の合法的又は非合法的なる排斥に集中する。従つて競争は、前の場合には、當然、國富の主たる源泉を、より豊富に流出せしめる。

の會社にあつては、氣樂で安全であるが爲め、このことは考へ得べくもない(一三一頁)。これらの會社にあつては、通常、公衆の利益が會社關係者たちの利益の背後に押しやられる(一三六頁)。後者の間に於ても、原則としては、株式が彌が上に少數人の手中に集中される爲め、暫時にして極めて著しい不平等を作り上げる。例へば、東印度會社の最盛時、資本の四分の一は十人の人々に、その半額は四十人足らずに分配されてゐた如き、これである(二〇一、二二五頁)。尙ほ、彼等の特權が、結局に於ては、會社に對する二割乃至五割の納税を、商品の買手全體に強ふることになるといふ點は、看過するとしても(二二三頁)、諸特權會社が彼等に委託された商業部門全體を倫敦に集中することは、不公平である(二三〇頁)。従つて著者は、大きな Joint-stock-companies 【合本會社】を、土耳其會社の方法に倣つて所謂 regulated companies 【制規會社】に轉換すべきことを、勸告してゐる。斯くの如くにすれば、我々は、彼等の利益と貿易自由の利益とを結付け得るに至るであらう(一三九頁以下)<sup>1)</sup>。

1) 著者自身は、一四一頁以下で他の一書『貿易新論』(New discourse of trade, December 1692.)を引合に出してゐるが、その書では、貿易會社その他に就き、彼の考へと甚だ類似した見解が展開されてゐる。なほ上述、一三五、二四〇頁参照。



本書中最も價值ある部分に屬するものは、手形、流通と紙幣とに關する諸編である。其處で我々は、次の事柄が甚だ明確に論述されてゐるを見出す。即ち場所の空間的隔離、支拂期限の時間的隔離、手形に比較せられたる貨幣の過不足、——これらから發生する爲替相場上の總ての變動にも拘らず、猶ほ原則的なる根本觀念は常に、一つ國に於ける銀一磅は他の國に於ける銀一磅だけの價值を持つ、といふ觀念これである（一二頁以下）。尙ほ著者は經驗に富んだ事業家として、國際通商上の決濟の大多數が商品對商品の交換を通じて行はれることを、充分によく辨へてゐる（二二、五九頁）。——紙幣に關する彼の諸見解は、英蘭銀行が千六百九十四年に設立されたこと、及びジョン・ローの有名な著作『貿易貨幣論』(Trade and money considered.) [ジョン・ローには Trade and money considered. なる著書 supplying the nation with money. Edinburgh 1705. の誤植又は誤記ではあるまいか。慶應圖書館はこの股本を所蔵してゐたさうであるが、震災で焼失した。併し幸なことに、中央大學の松浦要教授は本書の喪失前それをタイプライターに打たせて珍藏され。] が千七百五年に著はされたことを想へば、甚だ興味津津たるものがある。金屬貨幣は不必要であつて、紙幣のみで充分にこれを補ふことができるとする、當時既に流布してゐた意見に對すれば、我が著者は二重に先見の明があつたわけである（六三——七八頁）。それは、從來英吉利で行はれて來た

實際上の諸經驗によつて、充分に説明するを得る。商人等から貨幣を預つた倫敦の金匠たちが、これに對して流通證券を發行することは、千六百五十年以來通例となり、大火災（千六百六十六年）の時分には、僅か一人の金匠で百二十萬磅に當る手形を流通せしめてゐた者があつたさうである。他方金匠たちは、その預金を國庫に貸付けるを常とした。従つて有名な Shutting of the Exchequer 【國庫閉鎖】（千六百七十二年に於ける）が、その結果として、甚だ廣範圍に互つた信用破壊を生ぜざるを得なかつたことは、當然である。そこで我が著者は教へた。金銀は到る處で價值を持つが、紙幣はこれを發行した國の中に限られ、而もその場合にも、その據つて立つ基礎即ち信用が、良好な状態にある限りに於てのみ過ぎぬ。従つて一國民が、證券信用を頼りにして、金屬貨幣を外國に貸出すときは、今日金持ちとして通つてゐながら、明日は貧窮状態に陥ゐることもあり得る。況や國富の眞正なる試金石たる大戦争に際しては、それは正に多數の大商人たちにとつて臨終の床ともなる。従つて貨幣の不足を補ふには、證券信用は甚だ有用であるが、それが貨幣を驅逐したときは、それと同じ程度に於て危険である（六四頁以下）。多少の證券信用は結構であるが、それが一般的となり進んでは過多となるときは、自己の重荷の下に崩壊する危険



を、それ丈け餘計に冒すこととなり(六六頁)、通常これを最も多く用ひ従つて舊に復することが極端に困難となつた瞬間に役に立たなくなる(六七頁)。従つて著者は商業手形の流通が力の及ぶ限り容易ならしめられた場合には、特にそれを是と考へる。將來の併し確實なる租稅收入を基礎とする大藏省證券も同様である。總てその他の場合にあつては、證券信用が優良な基礎の上にのみ立ち、且つこの基礎以上に少しでも出ることを防ぐ爲め、適當な制限を附すべく、官憲は監視せねばならない。何となれば、斯かる人爲的な富の所有者たちは、現實の貨幣を持つ人々が惡貨改鑄や商業の獨占的攫取に依つて行ふところより、更に甚しくこれを濫用するといふ誘惑に曝らされてゐるから(六七頁)。ところで斯かる制限の下に於て銀行の用は、割引その他を容易ならしめること以外には、國家の現金を倍大することに存する。銀行家は一千磅の預金を得、これを以て業務を營み、且つこれに對して一千磅の銀行券を與へるが、それがまた貨幣として流通する。尤も彼は一般的取付けの起り得べきことを、絶えず考慮に入れてゐなければならぬこと、勿論である(六九頁以下)。土地抵當の確實性は甚だ大きい、土地を基礎とする

銀行券は、これを隨時貨幣に轉形することが不可能である限り、決して貨幣としては流通しないであらう(七一頁)。銀行券の信用全體は、一定の時これを即座に現金と變へ得ることに、基いてゐる。支拂地に於てこれを受取るべしとの法律上の強制は、その爲め債務者たちが、以前の契約關係に基いて破産せしめられ得る限り、寸毫の助けともならぬ。著者は甚だ適當にも、凡そ斯様な手段を以て、政府の貨幣鑄造に對比してゐる(七一頁)。同じく適當にも彼は、貨幣財產 (estates of money) を現金に換へる必要につき、三つの段階を區別してゐる。我々が抵當付で貸與するものは、通常諸の買入れ又は子供の持參金と決めてはゐるが、斯様な機會の到來するまで喜んで寢かして置く、財産部分である。我々が政府に貸付ける部分は、約定の辨濟期到來まで恐らく使はないであらう、と考へられる部分である。ところでこれらの用途の何れにも宛てられなかつた部分に就いては、我々は日常の諸支拂又は不慮の場合に具へる爲めに、これを保持して置く。この手許現金だけが、銀行券に振向け得るに過ぎない(七二頁以下)。尙ほ銀行券は甚だ小額の支拂には適さない。これに對しては、我々は決して現金を缺き得ないであらう(七四頁)。以上の考察全體は、次の言葉を以て終つてゐる。曰く『銀行券は貨幣の支拂猶餘を獲る爲めの、一

1) 上述一三四頁參照。



個の擔保たる用をなすに過ぎないから、それは決して新しい貨幣たる名前に値しない』(七八頁)<sup>1)</sup>。

従つて本書全體はヤームス神の性質を持つ。その一面は全くベテューとノースとロツクとを想起せしめる。然り、これらの人々の諸研究は、最も相應しい文體を以て繼續されてゐる。これに反して他の一面は、この直ぐ次の時期に於ける遙かに劣つた經濟學者たち例へば、『英吉利商人』【British Merchant; or, commerce preserv'd. London 1721. 3 vols.】の著者【チャールレス・キング(Charles King)を指す】やジ・シュア・ジーやその他これに似て十八世紀の最初の三分の一期を支配した學者たちに、接してゐる。

これをもつとよく理解する爲めに、私は結論として更に次の事情を想ひ起さう。即ち我が著者が執筆してゐた時代は The very Nadir of English prosperity 【英吉利の繁榮のどん底】と呼ばれるだけの理由が充分にあつた秋である<sup>2)</sup>。ウ・リアム三世が英吉利の自由と

1) アムステルダム及びヴェニス銀行は、これら諸國に於ける政府の存続する限り存続するであらう、といふ六四頁の豫言は、全く眞理である。

2) ハラム『英吉利憲政史』(H. Hallam: Constitutional History of England [from the accession of Henry VII to the death of George II. 3rd. ed. London 1832. 3 vols.]) 第十五章【第三卷一八一——一八四頁】。

全歐羅巴の獨立との爲めに、ルキ十四世を敵として戦はねばならなかつたあの戦争は、彼の國家の財政をこの上もなく甚しく涸渴せしめて了つた。新たなる重い地租(千六百九十年以降の)は、土地所得の少くとも二割を吞込んだが、既に千六百九十三年の頃諸消費税が従前(革命前)の収入の約半額餘りに、諸關稅の如きはその半額以下にまで低落してゐたので、それだけ不足を告げることとなつた。英蘭銀行は、主として國債の借入れを容易ならしめる意圖を以て、設立されたものである。併し、その銀行券は忽ちにして二割だけ、大藏省證券は少くとも四割だけ、額面以下に下落し、終に後者の如きは、八歩の利率を以て整理されるに至つた。國庫の缺損は甚だ恐るべき程度に増加し、千六百九十六年には、陸海軍に月々の給料を支拂ふことさへ、殆んど不可能となつて了つた。總破産は、戸口にまで迫つてゐた。一般的な思惑の時期と當然これに續いた商業恐慌とは、私人間の信用を揺り亂して了つた<sup>1)</sup>。 Certainly the vessel of our common-

1) 注目に値する著書『英吉利の保全』(Angliae Tutamen, or the safety of England, being an account of the banks, lotteries, mines, diving, draining, metallic, salt, linen, lifting and sundry other engines, and many pernicious projects now on foot tending to the destruction of trade and commerce and the impoverishing of this realm. By a person of honour. London 1695. 4°) 參照。



wealth has never been so close to shipwreck as in this period; we have seen the storm raging in still greater terror round our heads, but with far stouter planks and tougher cables to confront and ride through it. 【實に我が國家といふ船がこの時期に於ける程、難破に瀕してゐたことは、嘗てなかつた。我々は、自分たちの頭を旋つて愈々怖ろしく荒れ狂ふ暴風雨を見て來たが、而もこれに對抗しこれに乗り切るべき、遙かにより、頑丈な船板とより、強靱な鎖とを持つてゐた。】(ハラム)



8967

本書引用書目

並びに

譯者が確め得たその所在



著者名書名に次いで角括弧中に収めたものはその書の所在、最後にイタリックで表はしたのはこの邦譯書の頁數を示す。尙ほ (H) は商大圖書館藏本、(K) は慶大圖書館藏本、(T) は帝國圖書館藏本、(F) は福田先生藏本の略。\*印は Roscher 引用書を示す。(昭和三年八月調)

\* **Anderson, A:** An historical and chronological deduction of the origin of commerce, from the earliest accounts. Containing an history of the great commercial interests of the British empire. Carefully revised, corrected and continued to the present time. London 1787-9. 4 vols. [(H) I-2-165, (K) 5X-12].....61, 132, 168, 175

\* **Anderson, J:** Inquiry into the nature of the corn-laws. 1777. [(K) E7-45] — *do.* (*In* McCulloch: A select collection etc.) [(H) I-2-106, (K) E 8-110, (F) III-68].....257

\* **Asgill, J:** Several assertions proved in order to create another species of money than gold. London 1696. *Hollander's reprint.* [(H) I-2-101, (H) Eng. 34, (K) E10-95, (F) II-178a].....174-175

\* **Athenaeus:** Deipnosophistae.....290

**Bacon, F:** The works of Francis Bacon, Baron of Verulam, Viscount St. Alban and Lord High Chancellor of England. Collected and edited by James Spedding, Robert Leslie Ellis, and Douglas Denon Heath. London 1876-1888. 14 vols. [(H) 5308, (K) F10-38] — *do.* London 1857-9. 7 vols. [(F) I-17-23, (K) F10-38] .....71-89

\* **Bacon, F:** De sapientia veterum. 1609. — *do.* (*In* Works. VI. pp. 605 ff., *Eng. tr.* VI. pp. 689 ff.) [(H) 5308, (K) F10-38, (F) I-22] .....75

\* **Bacon, F:** Novum organum. 1620. — *do.* (*In* Works. I. pp. 71 ff., *Eng. tr.* IV. pp. 37 ff.) [(H) 5308, (K) F10-38, (F) I-17]...76

**Bacon, F:** History of the reign of King Henry VII. 1622. (*In* Works. VI. pp. 1 ff.) [(H) 5308, (K) F10-38, (F) I-22] — *\*do. Lat. tr.* Historia regni Henrici VII. Edit. Lips. 1694.....79, 83, 84-85



- \* **Bacon, F:** De dignitate et augmentis scientiarum. 1623.— *do.* 2 ed. Paris. [(F) Pr-234] — *do.* (In Works. I. pp. 431 ff., *Eng. tr.* IV. pp. 275 ff., V. 1 ff.) [(H) 5308, (K) F10-38, (F) I-17].....73
- Bacon, F:** Essays or counsells, civil and moral. 1625. (In Works. VI. pp. 367 ff.) [(H) 5308, (K) F10-38, (F) I-22] — \**do.* *Lat. tr.* Sermones fideles, ethici, politici, oeconomici: sive interiora rerum. Lugd. Batavorum. 1644. [(H) Lat. 16] .....74, 77, 78-83, 86, 87-89
- \* **Bacon, F:** Sylva sylvarum, or a natural history in the centuries. 1627.— *do.* (In Works. II. pp. 325 ff.) [(H) 5308, (K) F10-38, (F) I-18] .....75
- \* **Bacon, F:** Descriptio globi intellectualis et thema coeli. 1653.— *do.* (In Works. III. pp. 715 ff. *Eng. tr.* V. pp. 501 ff.) [(H) 5308, (K) F10-38, (F) I-19] .....76
- \* **Bacon, F:** Parasceue ad historiam naturalem et experimentalem.— *do.* (In Works. I. pp. 369 ff., *Eng. tr.* IV. pp. 249 ff.) [(H) 5308, (K) F10-38, (F) I-17] .....75
- Bacon, F:** Certain considerations touching the plantation in Ireland. Presented to His Majesty. 1606. (In Works. XI. pp. 114 ff.) [(H) 5308] — \**do.* *Lat. tr.* Cogitata de coloniis in Hiberniam deducendis. ....86
- \* **Bancroft, G:** History of the U. States, from the discovery of the American continent. 13 ed. Boston 1846. 3 vols. [(H) Ges. 11] — *do.* The author's last revised ed. New York 1888-89. [(K) HI 14] .....88
- \* **Barbon, N:** An apology for the builder; or a discourse shewing the cause and effects of the increase of building. 4. London 1685. (In McCulloch: A select collection etc.) [(H) Eng. 852., (K) E8-110, (F) III-68].....169
- \* **Barnard, J:** Considerations on the proposal for reducing the interest of the national debt. 1750.....257

- \* **Bodin, J:** Responsio ad paradoxa Malestretti de caritate rerum eiusque remediis.— *do.* (reprint) Helmestadii 1671. [(H) Lat. 55] — *do.* *Eng. tr.* (In Monroe: Early economic thought, selections from economic literature prior to Adam Smith. Cambridge 1924.) [(H) I-8-137, (F) III-17].....40-41
- \* **Bodin, J:** Discours sur les causes de l'extrême cherté, qui est aujourd'huy en France, et sur les moyens d'y remédier. Paris 1574. (reprint) [(H) Fr. 151].....40
- Bodin, J:** Les six livres de la republique. Paris 1577. [(H) S. 4560, (F) III-129, (F) YY. 76.] — *do.* 2 ed. Paris 1577. [(H) Fr. 150] — *do.* *Lat. tr.* De republica libri sex. Farisile 1586. [(H) S. 61] — *do.* 2 ed. 1591. [(H) Lat. 53, (F) YY. 96] — \* *do.* 7 ed....40, 41
- \* **Carli, G. R:** Dissertazione dell'origine e del commercio della moneta. Milano 1804. (In Scrittori classici italiani di economia politica. pt. moderna. tom. 13.) [(H) I-2-94, (F) II-94, (K) E16-13-50]...23
- \* **Carlisle, Christopher:** A brief and summary discourse upon the intended voyages to the hithermost parts of America. (In Hakluyt; Principal navigations, voyages, traffiques and discoveries of the English nation. III. pp. 182 ff.) — *do.* Everyman's library ed. VI. pp. 80 ff. [(H) I-11-58, (F) XIX-10] .....52-54
- \* **Chamberlen, H:** The constitution of the office of land credit declared in a deed. Enrolled in chancery a. 1696. London 1698. [(K) E21-143] .....174
- \* **Child, J:** Brief observations concerning trade and the interest of money. By J. C. London 1668. [(H) Eng. 301, (F) III-6] — *do.* (Type-written) [(K) 6X-15].....124
- Child, J:** A treatise, wherein it is demonstrated that the East-India trade is the most national of all foreign trades. By φιλοπατρις. London 1681. [(H) Eng. 303, (K) E19-11, (F) III-6].....124
- \* **Child, J:** Confutation of a treatise, intituled: A justification



of the directors of the Netherlands East-India Company. 1688.....124

\* **Child, J:** Traité sur le commerce et sur les avantages qui résultent de la réduction de l'intérêt de l'argent. Amsterdam et Berlin 1754. [(H) Eng. 304].....124-140, 270

**Child, J:** A new discourse of trade. London 1693. [(K) E24-49] — *do.* 2 ed. London 1694. [(H) I-2-136] — *do.* (presumably 3 ed.) 1698. [(K) E11-54, (H) III-7] — *do.* 4 ed. London (without date.) [(H) Eng. 302.] — *do.* 5 ed. Glasgow 1751. [(K) E11-13, (F) Br. 155].....124-125

\* **Coke, R:** A treatise, wherein is demonstrated, that the church and state of England are in equal danger with the trade of it. London 1671. [(H) Eng. 339, (K) E24-58, (K) E25-92].....159

\* **Coke, R:** Reasons of the increase of the Dutch trade, wherein is demonstrated, from what causes the Dutch govern and manage trade better than the English. London 1671. [(H) Eng. 339].....159

\* **Coke, R:** Englands improvement in two parts, the first part relates to the strength and wealth, and the latter to the navigation of the kingdom. London 1675. [(H) Eng. 339].....159

\* **Cotton, R:** A speech made by Sir Robert Cotton before the Lords of His Majesties most Honourable Privy Council touching the alteration of coyn. London 1651. (*In* McCulloch: A select collection etc.) [(H) I-2-108, (H) Eng. 855, (F) III-70, (K) E8-106].....96

\* **Cradocke, Fr:** An expedient for taking away all impositions and for raising a revenue without taxes, by creating banks for the encouragement of trade. London 1660.....173

\* **Culpeper, T:** A tract against usurie. Presented to the High Court of Parliament. London 1621. [(K) E24-36] — *do.* (*In* Child: Brief observations etc.) [(H) Eng. 301, (F) III-6].....121-123

\* **Culpeper, T:** A tract against the high rate of usury. 1641. ....121-123

\* **Dante, A:** Divina comedia. Con note di P. Costa e d'altri. Milano 1863. 3 vols. [(H) II-57b-32] — *do.* Firenze 1889. [(K) HB-73] — *do.* Milano 1900. [(F) XVI-43] .....81

\* **Davenant, C:** The political and commercial works of that celebrated writer, Charles D'Avenant, LL.D. Relating to the trade and revenue of England, the plantation trade, the East India trade, and African trade. Collected and revised by Sir Charles Whitworth, Member of Parliament. To which is annexed a copious index. 5 vols. London 1771. [(H) I-2-143, (H) Eng. 388, (K) E17-77, (F) Br. 189, (F) ZZ. 619].....133, 134, 155, 226-247

\* **Davenant, C:** An essay on ways and means of supplying the war. 1695. (*In* Works. I.) [(H) I-2-143, (H) Eng. 388, (K) E17-77, (F) Br. 189, (F) ZZ. 619] .....225

**Davenant, C:** An essay on the East-India trade. 1697. [(K) E19-16] — *do.* (*In* Works. I.) [(H) Eng. 388, (H) I-2-143, (K) E17-77, (F) Br. 189, (F) ZZ. 619].....225

**Davenant, C:** Discourses on the public revenues and of the trade of England. 1698. [(K) E24-78] — *do.* (*In* Works. I & II.) [(H) Eng. 388, (H) I-2-143, (K) E17-77, (F) Br. 189, (F) ZZ. 619] ..... 225, 226

**Davenant, C:** An essay on the probable methods of making the people gainers in the balance of trade. 1699. [(K) E2-97] — *do.* (*In* Works. II.) [(H) Eng. 388, (H) I-2-143, (K) E17-77, (F) Br. 189, (F) ZZ. 619] .....225, 235

\* **Davenant, C:** Essays on the balance of power, the right of making war, peace and alliances; universal monarchy. 1701. (*In* Works. III.) [(H) Eng. 388, (H) I-2-143, (K) E17-77, (F) Br. 189, (F) ZZ. 619] .....225

\* **Davenant, C:** A picture of a modern whig. 1701. (*In* Works. IV.) [(H) I-2-143, (K) E17-77, (F) Br. 189, (F) ZZ. 619].....225



- \* **Davenant, C**: Essay on peace at home and war abroad. 1704. (*In Works. IV. & V.*) [(H) Eng. 388, (H) I-2-143, (K) E17-77, (F) Br. 189, (F) ZZ. 619].....226
- \* **Davenant, C**: Reflections on constitution and management of the trade to Africa. 1709. (*In Works. V.*) [(H) Eng. 388, (H) I-2-143, (K) E17-77, (F) Br. 189, (F) ZZ. 619.].....226, 241
- \* **Davenant, C**: Reports to the Honourable the commissioners for putting in execution the act, entitled, an act for the taking, examining and stating the public accounts of the kingdom. 1712. (*In Works. V.*) [(H) Eng. 388, (H) I-2-143, (K) E17-77, (F) Br. 189, (F) ZZ. 619] .....226
- \* **de Wit, J**: Mémoires de Jean de Wit, grand pensionnaire de Holland. Traduit d'original en Français par M. de ×××. La Haye 1709. [(H) Fr. 2133].....136
- \* **Digges, D**: The defence of trade, in a letter to Sir Thomas Smith, governour of the East-India Companie etc. From one of that societie. London 1615. [(K) E24-35] .....92
- \* **Eden, F. M**: The state of the poor; or a history of the labouring classes in England, from the conquest to the present period. London 1797. 3 vols. [(H) I-2-177, (H) Eng. 455, (K) 3X-36] ..... 11, 19, 25, 28, 33, 37, 140, 172, 199, 200, 220-221, 222
- \* **Evelyn, J**: Memoirs, illustrative of the life and writings of John Evelyn, Esq. F. R. S., author of the "Sylva," etc. etc. Comprising his diary, from the year 1641 to 1705-6, and a selection of his familiar letters. To which is added the private correspondence between King Charles I. and his secretary of state, Sir Edward Nicholas, etc. 1818. —*do.* The diary of John Evelyn, with an introduction and notes by Austin Dobson. (The globe edition.) London 1908. [(F) XV-102] .....142
- \* **Farmer**: On the learning of Shakespeare.....35

- \* **Firmin, T**: Proposals for the employing of the poor. 1678.—*do.* 2 ed. Some proposals for the employment of the poor. London 1681. [(K) Q7-228] .....222-223
- \* **Fitzherbert, A**: The boke of husbandrie. London 1523.—*do.* (*In Certain ancient tracts concerning the management of landed property reprinted.* London 1767.) [(H) Eng. 1969] .....13
- \* **Fitzherbert, A**: The boke of surueyinge. An M. D. XXXIX. London 1523. — *do.* (*In Certain ancient tracts concerning the management of landed property reprinted.* London 1767.) [(H) Eng. 1969] ..... 13
- \* **Forbonnais, F**: Recherches et considerations sur les finance de la France depuis l'année 1595 jusqu'à l'année 1721. Basle 1758. 2 vols. [(H) I-39-523, (H) Fr. 1801] .....134, 265
- \* **Fortrey, S**: Englands interest and improvement, consisting in the increase of the store and trade of this kingdom. Cambridge 1663. (*Hollander's reprint*) [(H) I-2-103, (K) E10-95, (F) II-178e) — *do.* (*In McCulloch: A select collection etc.*) [(H) Eng. 856, (K) ES-105, (F) III-66] — *do.* 3 ed. 1713. [(H) Eng. 529] .....158
- \* **Franklin, B**: Observations concerning the increase of mankind 1751. (Extracts from the works of Dr. Franklin, on population, commerce etc. *In McCulloch: A select collection etc.*) [(H) I-2-106, (H) Eng. 852, (K) ES-110, (F) III-68].....257
- Galiani, F**: Della moneta libri quinque. Neapel 1750. [(F) III-20] — \**do.* Milano 1803. 2 vols. (Scrittori classici italiani di economia politica. Pt. moderna, tom. 3-4) [(H) I-2-94, (H) Ital. 1, (K) E16-13-50, (F) II-84, 85].....96
- Gee, J**: The trade and navigation of Great-Britain considered. London 1729. [(H) Eng. 554, (F) III-21] — \**do.* 1730. [(H) I-2-154] — *do.* 4 ed. London 1738. [(H) Eng. 551] — *do.* 5 ed Glasgow 1750. [(F) Br. 262, (H) Eng. 552].....140



- \* **Gilbert, H:** A discourse written to prove a passage by the Northwest to Cathaia and the East Indies. (*In* Hakluyt: Principal navigations etc. III. pp. 22 ff.) — *do.* Everyman's library ed. V. pp. 92 ff. [(H) I-11-58, (F) XIX-9].....45-46
- \* **Gilbert, H:** A briefe relation of the new found land, and the commodities thereof. (*In* Hakluyt: Principal navigations etc. III. pp. 152 ff.) — *do.* Everyman's library ed. VI. pp. 19 ff. [(H) I-11-58, (F) XIX-10] .....46-48
- \* **Godfrey, M:** A short account of the intended bank of England. London 1694. [(K) E24-66] .....173
- \* **Gould, N:** An essay on the public debts of this kingdom. In a letter to a member of the House of Commons. 3 ed. London 1726. (*In* McCulloch: A select collection etc.) [(H) Eng. 853, (H) I-2-110, (K) ES-107, (F) III-67].....257
- \* **Gould, N:** A defence of an essay on the public debts of this kingdom, etc. In answer to a pamphlet, entitled, A tract of the national debt etc. By the author of the essay. London 1727. (*In* McCulloch: A select collection etc.) [(H) Eng. 853, (H) I-2-110, (F) III-67, (K) ES-107].....257
- \* **Graunt, J:** Natural and political observations upon the bills of mortality, chiefly with reference to the government, religion, trade, growth, air, diseases etc, of the city of London. London 1662. (*In* The Economic writings of Sir William Petty. II.) [(H) I-2-141, (F) III-76].....155
- \* **Grotius, H.** De iure belli et pacis: libri tres, in quibus jus naturae et gentium, item juris publici praecipua explicantur. Ed. nov. cum annotatis auctoris. Amsterodamum 1601. [(H) II-57b-19] — *do.* Accompanied by an abridged translation by W. Whewell DD. with the notes of the author, Barbeyrac and others, edited for the Syndics of the university press. Editor's preface dated Cambridge 1853. [(F)

- XVII-44-46, (K) HJ-273] .....83
- \* **Haines, R:** Proposals for building in every county a working alms-house or hospital, as the best expedient to perfect the trade and manufactory of linnen cloth. 1677. [(K) Q7-226].....222
- \* **Hakluyt, R:** The principal navigations, voyages, traffiques and discoveries of the English nation, made by sea or overland to the remote and farthest distant quarters of the earth at any time within the compasse of these 1600 yeares. — *do.* Everyman's library ed. London etc. 1907-13. 8 vols. [(H) I-11-58, (F) XIX-5-12] .....44-56
- \* **Hakluyt, R:** Notes framed by M. Richard Hakluyt of the middle Temple Esquire, given to certaine Gentlemen that went with Martin Frobisher in his Northwest discoverie, for their directions: and not unfit to be committed to print, considering the same may stirre up considerations of these and of such other things, not unmeete in such new voyages as may be attempted hereafter. (*In* Hakluyt: Principal navigations etc. III. pp. 45 ff.) — *do.* Everyman's library ed. V. pp. 165 ff. [(F) XIX-9, (H) I-11-58] .....48-50
- \* **Hale, M:** A discourse touching provision for the poor. 1683. [(K) Q7-220] .....221-222
- \* **Hale, M:** History of the common law of England. 6 ed. London 1820. [(K) HJ69].....133
- \* **Hallam, H:** Constitutional history of England from the accession of Henry VII to the death of George II. 3 ed. London 1832. 3 vols. [(H) II-13-558] — *do.* 4 ed. London 1842. [(K) P11-61] — *do.* 7 ed. London 1854. [(F) V-35, 36, 37] .....298-300
- \* **Halley, E:** An estimate of the degrees of mortality of mankind, drawn from the curious tables of the births and funerals of the city of Breslaw, with an attempt to ascertain the price of annuities upon lives. (*In* Philosophical transactions. vol. 17. London 1693. No. 198.).....155-156



- \* **Hamilton, R:** An inquiry concerning the rise and progress etc. of the national debt of Great Britain. — *do.* 2 ed. Edinburgh 1814. [(H) Eng. 646] — *do.* 3, enlarged ed. Edinburgh 1818. (*In* McCulloch: A select collection etc.) [(H) Eng. 853, (H) I-2-110, (K) E8-107, (F) III-67].....245
- \* **Harrington, J:** The oceana of James Harrington and his other works. The whole collected, methodiz'd and review'd etc. By John Toland. London 1700. — *do.* Dublin 1737. [(H) II-13-544, (F) III-L50]. — *do.* London 1771. [(H) Eng. 654] — *do.* London and New York 1887. [(K) P 10-179].....112-119
- \* **Hariot, T:** A briefe and true report of the new found land of Virginia: of the commodities there found, and to be raised, as well merchantable as others. (*In* Hakluyt: Principal navigations etc. III. pp. 206 ff) — *do.* Everyman's library ed. VI. pp. 164 ff. [(H) I-11-58, (F) XIX-10] .....55-56
- \* **Harrison, W:** Description of Britain.....19, 37
- \* **Helferich, J:** Von den periodischen Schwankungen im Wert der edlen Metalle von der Entdeckung Americas bis zum Jahre 1830. Nürnberg 1843. [(H) Mon. 1225] .....22
- Hermann, F. B. W:** Staatswirtschaftliche Untersuchungen, über Vermögen, Wirtschaft, Produktivitaet der Arbeiten, Kapital, Preis, Gewinn, Einkommen und Verbrauch. Muenchen 1832. [(H) I-3-82] — *do.* 2 Aufl, Muenchen 1874. [(F) II-172, (K) E10-6]...176
- Hobbes, T:** The English works of Thomas Hobbes of Malmesbury; now first collected and edited by Sir William Molesworth. Bart. London 1834-95. 11 vols. [(H) 5335, (K) HF 12].....100-112
- \* **Hobbes, T:** Elementa philosophia de cive. Paris 1642. — *do.* Paris 1648. [(H) S 52] — *do.* Amstelaedamum 1696. [(H) Lat. 175].....100-112
- Hobbes, T:** Leviathan; or the matter, forme, and power of a

- common-wealth, ecclesiasticall and civill. London 1651. [(H) II-8-32A, (F) III-L53] — *do.* *Lat. tr.* Leviathan. Sive de materia, forma et potestate civitatis ecclesiasticae et civilis. [(H) S. 57].....100-112
- \* **Hume, D:** History of England from the invation of Julius Caesar to the revolution in 1688. Reprint of the ed. of 1786. London etc. 3 vols. [(H) Ges. 188] — *do.* Philadelphia 1876. 6 vols. [(K) H13-16.].....46, 81
- \* **Hume, D:** Essays, moral, political and literary. 1741-42. (*Reprint.*) London 1875. 2 vols. [(H) II-32-46, (K) M6-26, (F) I-104, 105].....1
- \* **Hutcheson, A:** Treatises relating to the national debt. 1721. ....257
- \* **Jacob, W:** An historical inquiry into the production and consumption of precious metals. London 1831. 2 vols. [(H) Eng. 745] — *do.* Philadelphia 1832. [(H) I-7-23].....26, 33, 37
- \* **King, C:** The British merchant; or, commerce preserv'd. London 1721. 3 vols. [(H) Eng. 816-6].....298
- \* **King, G:** Natural and political observations and conclusions upon the state and condition of England in 1696. (*In* Chalmers: Estimate of the comparative strength of Great-Britain, during the present and four preceding reigns; etc. London 1794.) [(H) I-2-175, (H) Eng. 284, (F) Br. 150].....246
- \* **Lamb, S:** Seasonable observations for the encouraging of foreign commerce. 1657.....172-173
- \* **v Langenn:** Leben des Kurfürsten Moritz.....289
- \* **Latimer, H:** Frvtefvll sermons preached by the right reuerend father, and constant martyr of Jesus Christ M. Hugh Latimer, newly imprinted: with others, not heretofore set forth in print, to the edifying of all which will dispose them selues to the readyng of the same. London 1575. [(H) Eng. 816 (23)] — *do.* London 1607. [(F) III-47]



- .....23-32
- \* **Law, J:** Money and trade considered with a proposal for supplying the nation with money. Edinburgh 1705. [(K) E14-153] — *do.* London 1720. [(H) Eng. 816 (44)] — *do.* Glasgow 1750. [(H) I-2-144] — *do.* Glasgow 1760. [(H) Eng. 816 (42)].....21, 294
- \* **Lewis, M:** Proposals to the King and parliament; or a large model of a bank, showing how the fund of a bank may be made without much charge or any hazard, that may give out bills of credit to a vast extent. London 1678. [(K) E24-75].....173
- \* **Lingard, J:** A history of England, from the first invasion of the Romans to the commencement of the reign of William III. 1819-30. 8 vols. — *do.* 6 ed. London 1854-55. 10 vols. [(K) HH42] — *do.* 6 ed. Dublin 1874. 10 vols. [(T) 8-9].....89
- \* **Locke, J:** The works. 4 ed. London 1740. 3 vols. [(T) K50] — *do.* 9 ed. London 1794. 9 vols. [(H) II-32-40A] — *do.* London 1823. 10 vols. [(F) I-142, (K) HF-14] — *do.* 12 ed. London 1824. 9 vols. [(H) II-32-40].....195-220
- \* **Locke, J:** Some considerations of the consequences of the lowering of interest and raising the value of money. In a letter sent to a member of parliament. 1691. (*In Works.* 12 ed. IV.) [(H) II-32-40, (F) I-142, (K) HF 14].....196-199, 204-220
- \* **Locke, J:** Further considerations concerning raising the value of money. 1694. (*In Works.* 12 ed. IV.) [(H) II-32-40, (F) I-142, (K) HF 14].....196-199
- \* **Locke, J:** Two treatises of government. In the former, the false principles and foundations of Sir Robert Filmer and his followers, are detected and overthrown; the latter is an essay concerning the true original, extent, and end of civil government. London 1689. (*In Works.* 12 ed. IV.) [(H) II-32-40, (F) I-142, (K) EF 14]...179, 200-204
- \* **Locke, J:** The report of the board of trade to the Lords

- Justices, respecting the relief and employment of the poor. London 1698..... 199, 200
- \* **Locke, J:** The whole history of navigation from its original to this time (1704). Prefixed to Churchill's Collection of voyages. (*In Works.* 12 ed. IX.) [(H) II-32-40, (F) I-142, (K) HF 14].....199
- \* **Lowndes, W:** A report containing an essay for the amendment of the silver coins. 1695. [(F) III-49] — *do.* (*In McCulloch: A select collection etc.*) [(H) I-2-108, (K) E8-106, (F) III-70].....197
- \* **Macauley, T. B:** History of England from the accession of James II. London 1849-61. 5 vols. [(K) HH. 25, (F) V-66] — *do.* Copyright ed. Leipzig 1849-61. 10 vols. [(H) Ges. 265].....181, 182
- \* **McCulloch, J. R:** The literature of political economy; a classified catalogue of select publications in the different departments of that science. London 1845. [(H) I-1-17, (F) III-50, (F) Br. 523] .....5, 91, 142, 143, 156, 160, 172
- \* **Malthus, T. R:** Principles of political economy considered with a view to their practical application. London 1820. [(H) I-3-46, (H) Eng. 906, (K) E 12-14, (F) II-233].....175
- \* **Mandeville:** Fable of the bees. or private vices public benefits. 1714. [(F) III-53] — *do.* 3 ed. London 1724-9. 2 vols. [(H) I-54-49] — *do.* 5 ed. London 1728. [(K) Q2-121] — *do.* 9 ed. Edinburgh 1755. [(H) Eng. 931].....256
- \* **Mill, J:** History of British India. 5 ed. with notes and continuation, by H. Wilson. London 1858. [(K) H2-38].....124
- \* **Misselden, E:** The circle of commerce, or the balance of trade, in defence of free trade, opposed to Mylners' "Little and his great whale," and poised against them in the scale. London 1623...91
- More, T:** Libellus vere aureus, nec minus salutaris quam festivus de optimo reipublicae statu deque nova insula Utopia. Lovan 1516. — *do.* Cöln 1555. — *do.* Hannover 1613 [(H) Eng. 1039]



—The Utopia of Sir Thomas More, in Latin from the edition of March 1518, and in English from the first edition of Ralph Robinson's translation in 1551, with additional translations, introduction and notes, by J. H. Lupton, B. D. Oxford 1895. [(H) I-4-12A, (K) F12-104]—*do.* edited by T. R. Lumby. [(F) XI-176].....7-20

\* **Mun, T:** A discourse of trade from England unto the East-Indies, answering to divers objections which are naturally made against the same. By T. M. London 1621. [(H) I-7-2, (H) Eng. 1046]—*do.* 2 impression corrected and amended. London 1621. [(H) Eng. 1046, (K) E19-1]—*do.* (In McCulloch: A select collection etc.) [(H) I-2-108, (F) III-66, (K) E8-105, (H) Eng. 856].....91-92

\* **Mun, T:** England's treasure by forraign trade, or the ballance of our forraign trade is the rule of our treasure. Written by Thomas Mun of London, merchant, and now published for the common good by his son, John Mun of Bearstead. London 1664. [(K) E11-4]—*do.* (In McCulloch: A select collection etc.) [(H) Eng. 856, (H) I-2-108, (F) III-66, (K) E8-105]—*do.* London 1713. [(H) Eng. 1045]—*do.* Ashley's economic classics. London 1903. [(F) III-62, (F) Br. 610, (K) E11-24] .....92-97

\* **Murray, R:** A proposal for a national bank, consisting of land, or any other valuable securities or depositums. London 1695. [(K) E25-87] .....174

**North, D:** Discourses upon trade, principally directed to the cases of interest, coynage, clipping, increase of money. London 1691. [(H) Eng. 1087]—*do. Reprint.* Edinburgh 1846. [(H) I-2-102A]—*do. Hollander's reprint.* [(H) I-2-102, (K) E10-95, (F) II-178J]—*do.* (In McCulloch: A select collection etc.) [(H) I-2-108, (K) E-8-105, (F) III-66].....181-197

\* **North, R:** Life of Lord Guildford.....181, 183-184

\* **North, R:** Life of Sir Dudley North.....181, 183-184

\* **Paterson, W:** Conferences on the public debts by the Wednesday-Club in Friday Street. London 1695.....173

\* **Peckham, G:** A true report of late discoveries and possession taken in the right of the crowne of England of the newfound lands by that valiant and worthy gentleman, Sir Humphrey Gilbert Knight. (In Hakluyt: Principal navigations etc. III. pp. 165 ff.)—*do.* Everyman's library ed. VI. pp. 42 ff. [(H) I-11-58, (F) XIX-10].....52-54

\* **Pepys, S:** Diary of Samuel Pepys.—*do.* With an introduction and notes by G. G. Smith. [(H) II-39-201]—*do.* Diary, and correspondence. London 1906-10. 8 vols. [(K) B10-78].....144

\* **Percy, P:** Reliques of ancient poetry. [(K) B10-75].....39

**Petty, W:** The economic writings of Sir William Petty, together with the observations upon the bills of mortality, more probably by Captain John Graunt, edited by Charles Henry Hull, Ph. D. Cambridge 1899. 2 vols. [(H) I-2-141, (F) III-75, 76].....145-180

**Petty, W:** The Petty papers. Some unpublished writings of Sir William Petty, edited from the Bowood Papers by the Marquis of Lansdowne. London 1927. 2 vols. [(H) I-8-631, (K) P16-66].....145

**Petty, W:** A treatise of taxes and contributions, shewing the nature and measures of crownlands, assessments, customs, poll-money, lotteries, benevolences etc. London 1662. (In Writings. I.) [(H) I-2-141, (F) III-76]—\**do.* 3 ed. London 1679. (In Tracts; chiefly relating to Ireland. Dublin 1769. [(H) Eng. 1165, (F) Br. 1083] .....144-145, 160-162

\* **Petty, W:** Quantulumcunque, or a tract concerning money, addressed to the Marquis of Halifax. London 1682. (In McCulloch: A select collection etc.) [(H) Eng. 855, (H) I-2-108, (K) E8-106, (F) III-70]—*do.* (In Writings. II.) [(H) I-2-141, (F) III-76].....144, 146, 163, 170, 171, 172

**Petty, W:** The political anatomy of Ireland. With the establi-



shment for that kingdom when the late Duke of Ormond was Lord Lieutenant. Taken from the records. To which is added Verbum sapienti; or an account of the wealth and expences of England, and the method of raising taxes in the most equal manner. Shewing also, that the nation can bear the charge of four millions per annum, when the occasions of the government require it. London 1691. (*In* Writings. I.) [(H) I-2-141, (F) III-76] — \*do. 2 ed. Sir William Petty's political survey of Ireland, with the establishment of that kingdom, when the late Duke of Ormond was Lord Lieutenant; and also an exact list of the present peers, members of parliament, and principal officers of state. To which is added, an account of the wealth and expences of England, and the method of raising taxes in the most equal manner. Shewing likewise that England can bear the charge of four millions per ann., when the occasions of the government require it. The second edition carefully corrected, with additions. London 1719. [(H) Eng. 1164.] ..... 144-145, 146-147, 148-152, 162-178

**Petty, W:** Several essays in political arithmetick. London 1699. [(H) Eng. 1161, (K) E24-48] — \*do. 4 ed., corrected. To which is prefix'd, memoirs of the author's life. London 1755..... 142, 144, 146, 147-150, 152-158, 162-172, 178-180

**Polexfen, J:** England and East-India inconsistent in their manufactures. 1697. [(H) Eng. 1187, (K) E19-22] ..... 233-234

**Potter, W:** The tradesmans jewel; or a safe, easie, speedy and effectual means for the incredible advancement of trade and multiplication of riches etc., by making bills become current instead of money. London 1650. — \*do. 1659..... 173

\* **Purchas, S:** Hakluytus posthumes, or Purchas his pilgrims, contayning a history of the world in sea voyages and lande travells by Englishmen and others. 1625. — do. Glasgow 1905-7. 20 vols. [(H) II-21-332, (K) G4-68]..... 55, 88

**Raleigh, W:** Works, political, commercial and philosophical; together with his letters and poems. With a new account of his life. London 1751. 2 vols. [(H) Eng. 1231] — \*do. Oxford 1829. 8 vols.... 59-69

\* **Raleigh, W:** The discoverie of the large, rich and beautifull Empire of Guiana, with a relation of the great and golden citie of Manoa (which the Spaniards call El Dorado) and the provinces of Emeria, Aromaia, Amapaia, and other coutries, with their rivers adjoining. Performed in the yeere 1595 by Sir Walter Raleigh Knight, Captaine of Her Majesties Guard, Lorde Warden of the Stanneries, and Her Highnesse Lieutenant Generall of the Countie of Corne-wall. (*In* Hakluyt: Pincipal navigations etc. III. pp. 627 ff.) — do. Everyman's library ed. VII. pp. 272 ff. [(H) I-11-58, (F) XIX-11]..... 44, 66

**Raleigh, W:** Observations touching trade and commerce with the Hollander, and other nations, presented to King James, wherein is proved, that our sea and land commodities serve to enrich and strengthen other countries against our own. (*In* Works. 1751. II. pp. 109 ff. [(H) Eng. 1231] — \*do. (*In* Works. 1829. VIII. pp. 351 ff.) — do. (*In* McCulloch: A select collection etc.) [(H) Eng. 854, (F) III-66, (K) ES-105]..... 60-64

**Raleigh, W:** A discourse of the invention of ships, anchors, compass, etc. (*In* Works. 1751. II. pp. 71 ff.) [(H) Eng. 1231] — \*do. (*In* Works. 1828. VIII. pp. 333 ff.)..... 61

**Raleigh, W:** A discourse of the original and fundamental cause of natural, arbitrary, necessary, and unnatural war. (*In* Works. 1751. II. pp. 21 ff.) [(H) Eng. 1231] — \*do. (*In* Works. 1829. VIII. pp. 257 ff.)..... 67-68

**Raleigh, W:** On the seat of government. (*In* Works. 1751. II. pp. 319 ff.) [(H) Eng. 1231] — \*do. (*In* Works. 1829. VIII. pp. 539 ff.) ..... 65

**Raleigh, W:** The cabinet-council. (*In* Works. 1751. I. pp. 55



- ff.) [(H) Eng. 1231]—\**do.* (*In Works.* 1829. VIII. pp. 49 ff.)...83
- \* **Raleigh, W:** History of the world. 1614.....66, 68
- \* **Ranke, L:** Geschichte Deutschlands im Zeitalter der Reformation.—*do.* (*In Sämtliche Werke.* 2 Ausg. Leipzig 1873-90. I-VII.) [(H) II-17-217, (K) H8-2]—*do.* (*In Rankes Meisterwerke.* München und Leipzig 1914.) [(F) V-82].....40
- \* **Ranke, L:** Fürsten und Völker.—*do.* (*In Sämtliche Werke.* 2 Ausg. XXXV, XXXVI.) Die Osmanen und die Spanische Monarchie im 16. und 17. Jahrhundert. 4, erweiterte Aufl. des Werkes: Fürsten und Völker. [(H) II-17-217, (K) H8-2].....39
- Richelieu, Cardinal de:** Recueil des testamens politiques du Cardinal de Richelieu, du Duc de Lorraine, de M. Colbert et de M. de Louvois, divisé en IV volumes. 2 vols. Amsterdam 1749. [(H) Fr. 1294] ..... 227
- \* **Roberts, L:** The treasure of trafficke, or a discourse of forraigne trade. London 1641. [(H) Eng. 1270]—*do.* (*In McCulloch: A select collection etc.*) [(H) Eng. 856, (H) I-2-108, (K) E8-105, (F) III-66] ..... 95
- \* **Roberts, L:** The merchants mappe of commerce. 1638.—*do.* 3 ed. corr. and much enl. London 1677. [(H) I-2-132, (K) 8X-84]—*do.* 4 ed. carefully corrected and enl. London 1700. [(H) Eng. 1269, (K) 5X-30] .....94
- \* **Roscher, W:** Leben, Werke und Zeitalter des Thukidides. Göttingen 1842. [(H) Mon. 3359].....152
- \* **Roscher, W:** Ueber Korntheuerungen: ein Beitrag zur Wirtschaftspolizei. Stuttgart etc. 1847. [(H) Mon. 3362].....240
- \* **Roscher, W:** Ideen zur Politik und Statistik der Ackerbausysteme. (*In Archiv der politischen Oekonomie und Polizeiwissenschaft.* Neue Folge. III. SS. 158 ff. IV. SS. 1 ff.) [(H) Ztschr. 9].....180
- \* **Roscher, W:** Untersuchungen über das Kolonialwesen. (*In*

- Archiv der politischen Oekonomie und Polizeiwissenschaft. Neue Folge. VI. SS. 1 ff., VII. 1 ff., 263 ff.) [(H) Ztschr. 9].....43
- \* **Roscher, W:** Zur Geschichte der Englischen Volkswirtschaftslehre im sechzehnten und siebzehnten Jahrhundert. Aus dem III. Bande der Abhandlungen der Königlich Sächsischen Gesellschaft der Wissenschaften. Leipzig 1851. [(H) Mon. 3349, (H) I-2-56].....5
- \* **Rymer, T:** Foedera, conventiones, litterae et cujuscunque generis acta publica inter reges Angliae et alios quosvis imperatores, reges, etc. ab. A. D. 1101 ad nostra usque tempora habita aut tractata. 1704-13 .....44
- \* **Saavedra, D:** Idea principis christiani, centum cymbolis expressa. Amsterodamum 1665.—*do.* Editio novissima a mendis accurate expurgata. Jena 1686. [(H) Lat. 312] .....69-70
- \* **Salmasius, C:** De usuris. Lugd. Batav. 1638. [(H) Lat. 317] ..... 80
- \* **Salmasius, C:** De modo usurarum. Lugd. Batav. 1639. [(H) Lat. 314] .....80
- \* **Salmasius, C:** De mutuo. 1640 .....80
- \* **Schön, J:** Neue Untersuchung der Nationaloekonomie und der natürlichen Volkswirtschaftsordnung. Stuttgart etc. 1835. [(H) Lexis 92, (H) Comp. 331].....258
- \* **Smith, A:** An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations. London 1776. [(H) Eng. 1412, (H) I-3-21, (F) II-L111, 112, (K) E15-45].....30, 43, 193, 267
- \* **Smith, J:** Memoirs of wool, woolen manufactures, and trade, particularly in England from the earliest to the present times; with occasional notes, dissertations and reflections. London 1747. [(K) E9-82, (F) IV-124, 125]—*do.* 2 ed. rev., and enl. London 1757. 2 vols. [(H) I-17-52].....33, 39, 61
- \* **Spinoza, B:** Tractatus politicus.—*do.* (*In Spinoza opera im*



Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, herausgeg. von Carl Gebhardt. Heidelberg. III. pp. 269 ff.) [(F) ZZ. 836] — *do.* Germ. tr. Benedict von Spinoza's politische Abhandlung. (*In Philosophische Bibliothek, herausg. bzw. übers., erläutert und mit Lebensbeschreibungen versehen von J. H. Kirchmann. Berlin 1871.*) [(H) II-32-36, (F) I-421, (K) F16-74] — *do.* (*In Benedicti de Spinoza opera quotquot reperta sunt. Recognoverunt J. van Vloten et J. P. N. Land. 2 vols. Hagae comitum 1882. I. pp. 279 ff.*) [(F) ZZ. 835].....264

\* **Stafford, W:** A compendious or briefe examination of certayne ordinary complaints of divers of our countrymen in these our days; which, although they are in some part unjust and frivolous, yet they are all by way of dialogue thoroughly debated and discussed. By W. S. gentleman. London 1581. — *do.* Edited by F. J. Furnivall. London 1876. [(H) Eng. 1467] — *do.* A discourse of the common weal of this realm of England. First printed in 1581 and commonly attributed to W. S. Edited from the MSS. by the late Elizabeth Lamond. Cambridge 1893. [(H) Eng. 1747, (F) III-13] — *do.* German tr. Drei Gespräche über die in der Bevölkerung verbreiteten Klagen. Leipzig 1895. [(H) I-2-178, (K) P7-49, (F) II-24].....32-39.

\* **Steuart, J:** An inquiry into the principles of political economy London 1767. [(H) Eng. 1475, (K) E3-31, (F) III-L 121, 122].....22

**Temple, W:** The works. new ed London 1770. 4 vols. [(H) II-12-20] — *do.* London 1814.....259-278

\* **Temple, W:** Observations upon the United Provinces of the Netherlands. 1672. (*In Works. I.*) [(H) II-12-20].....154, 259

\* **Temple, W:** An essay upon the advancement of trade in Ireland. 1673. (*In Works. III.*) [(H) II-12-20].....261

\* **Tooke, T:** History of prices, and of state of the circulation, from 1793 to 1856. London 1838-57. 6 vols. [(H) I-3-151, (H) Eng. 1531 (K) E7-6, (F) IV-132, 133, 134, 135].....270

**Tucker, J:** Tracts on political and commercial subjects. 2 ed. London 1774. [(H) I-2-157] — *do.* 3 ed. 1776. [(H) Eng. 1566, (K) E24-102] .....78-79

\* **Vanderlint, J:** Money answers all things, or an essay to make money sufficiently plentiful amongst all ranks of people; etc. London 1734. [(H) Eng. 1584] — *do.* *Hollander's reprint.* [(F) II-175i] .....244

\* **Wakefield, D:** An essay upon political economy. 2 ed. 1804. ....256

\* **Young, A:** Political arithmetic, containing observations on the present state of Great-Britain, and the principles of her policy in the encouragement of agriculture. London 1774. [(H) I-2-169, (K) E9-14] ..... 28, 33,

\* **Anonym:** Angliae Tutamen, or the safety of England, being an account of banks, lotteries, mines, diving, draining, metallic, salt, linnen, lifting and sundry other engines and many pernicious projects now on foot tending to the destruction of trade and commerce and the impoverishing of this realm. By a person of honour. London 1695.....299

\* **Anonym:** Britannia languens, or a discourse of trade: shewing the grounds and reasons of the increase and decay of land-rents, national wealth and strength. London 1680. [(H) Eng. 1705, (F) Br. 112] — *do.* (*In McCulloch: A select collection etc.*) [(H) I-2-108, (K) E8-105, (F) III-66, (H) Eng. 856].....160, 233, 235

\* **Anonym:** Considerations upon the East-India trade. London 1701. The advantages of the East-India trade to England considered, wherein all the objections to that trade are fully answered. 1720. (*In McCulloch: A select collection etc.*) [(H) I-2-108, (K) E8-105, (F) III-66] .....247-249

\* **Anonym:** A dialogue between a scholar, gentleman and



lawyer. 1584.....34

\* **Anonym:** A discourse of trade, coyn and paper-credit: and of ways and means to gain and retain riches. London 1697. To which is added the argument of a learned council, upon an action of the case brought by the East-India-Company against Mr. Sands, an interloper. 1696. ....279-300

**Anonym:** Englands great happiness, or a dialogue between Content and Complaint, wherein it is demonstrated, that a great part of our complaints is causeless. By a real and hearty lover of his King and country. London 1677. [(H) Eng. 706] — \*do. (In McCulloch: A select collection etc.) [(H) Eng. 856, (H) I-2-108, (K) ES-105, (F) III-66] .....159-160

\* **Anonym:** Interest of money mistaken: or a treatise, proving, that the abatement of interest is the effect and not the cause of the riches of a nation, and that six percent is a proportionable interest to the present condition of this kingdom. London 1668. [(H) I-2-134, (K) E24-29] .....126

\* **Anonym:** Reasons for a limited exportation of wool. London 1677. (In J. Smith: Memoirs of wool etc. I. ch. LVI.) [(H) I-17-52, (K) E9-82, (F) IV-124] .....138

\* **Anonym:** Virginias Verger, or a discourse shewing the benefits which may grow to this kingdome from American-English plantations, and specially those of Virginia and Summer Islands. (In Purchas: Pilgrims etc. IV. pp. 1809 ff.) [(H) II-21-332, (K) G4-68] .....54-59

欠



欠

人名索引 (27)—(32)

件名索引 (33)—(41)



## 人名索引

### A

アルキビアデス (Alkibiades) .....60  
 アンダーソン (Anderson, Adam) ...  
 ..... 61, 132, 168, 174  
 アンダーソン (Anderson, James)...257  
 アン (Anne, Queen) .....221  
 アルブスノット (Arbuthnot, John)  
 .....227  
 アリストテレス (Aristoteles) ...4,78  
 アスジル (Asgill, John) .....174  
 アツシャー (Asher, C. W.) .....279  
 アテナイウス (Athenaeus).....290

### B

ベイコン (Bacon, Francis).....  
 ..... 71-89, 195, 252  
 バルボア (Balboa, Vasco Nuñez de)  
 ..... 43  
 バンクロフト (Bancroft).....88  
 バーナード (Barnard, John).....257  
 ベントリー (Bentley, Richard) ...227  
 ボダン (Bodin, Jean).....40, 41  
 ブレンタノ (Brentano, Lujo).....34

### C

カルリ (Carli, Gian Rinaldo).....23  
 カーライル (Carlisle, Christopher)  
 ..... 52-54, 56, 86  
 チャーマース (Chalmers) .....246

チェンバーレン (Chamberlen, H.)...174  
 チャーレス一世 (Charles I, King)...215  
 チャーレス二世 (Charles II, King)...  
 ..... 142, 158, 181, 182, 254  
 チャタム (Chatham, Lord) .....  
 ..... 『ピット』を見よ  
 チャイルド (Child, Josiah) .....  
 ...121, 123-140, 153, 154, 171, 197,  
 214, 232, 242, 255, 264, 270, 277  
 チシュル (Chishull, Edmund) .....227  
 チャーチル (Churchill).....199-200  
 サンプル (Cimbre).....40  
 コッケイン (Cockaigne) ..... 61  
 コーク (Coke, Roger) .....  
 ..... 129, 136, 158-159  
 コルベール (Colbert, Jean Baptiste)  
 ..... 123, 134,  
 158, 227, 258, 259, 265, 275, 279  
 コンリング (Conring, Hermann)...149  
 コルテス (Cortes, Hernando).....43  
 コットン (Cotton, Robert) ..... 96  
 クラドック (Cradocke, Francis).. 173  
 クロムウェル (Cromwell, Oliver) ...  
 ..... 11, 112, 243, 258  
 カルペパー (Culpeper, Thomas) ...  
 ..... 121-123, 214

### D

ダンテ (Dante, Alighieri) .....81  
 ダヴナン (Davenant, Charles) .....

133, 134, 155, 225-247, 254, 255, 279  
 デイヴィース (Davies).....227  
 デカルト (Descartes, René)...193, 194  
 ド・ウキット (De Wit, Jean) ...136, 259  
 ディグス (Digges, Dudley) .....92  
 ドッドウェル (Dodwell) .....227

### E

イーデン (Eden, Frederick Morton)  
 .....11, 19, 25, 28, 33,  
 34, 37, 140, 199, 200, 220, 221, 222  
 エドワード六世 (Edward VI, King)  
 ..... 23, 26, 81  
 エリザベス (Elizabeth, Queen) .....  
 ..... 11, 19, 29, 30, 56, 137, 215, 253, 258  
 エルスター (Elster, Ludwig) .....41  
 エラスムス (Erasmus, Desiderius)...8  
 エセックス伯 (Essex, Earl of) .....89  
 エセックス伯 (Essex, Earl of) ..... 261  
 エヴェリン (Evelyn, John) .....  
 ..... 142, 143, 155

### F

ファーマー (Farmer, Richard) .....33  
 ファーミン (Firmin, Thomas) .....222  
 フィッツハーバート (Fitzherbert,  
 Anthony) .....13  
 フリートウッド (Fleetwood) .....30  
 フォルボネー (Forbonnais, François)  
 ..... 93, 134, 264, 265  
 フォートリー (Fortrey, Samuel).....  
 ..... 158, 160

フォックス (Fox, Charles James)...200  
 フランクリン (Franklin, Benjamin) .....  
 ..... 257  
 フロビッシャー (Frobisher, Martin)  
 ..... 48  
 ファーニヴァル (Furnivall, Frederick  
 James) .....34

### G

ガリアニ (Galiani, Ferdinando) ...96  
 ガリレイ (Galilei, Galileo) .....100  
 ガッサンディ (Gassendi, Pierre) ... 100  
 ジー (Gee, Joshua).....140, 298  
 ギルバート (Gilbert, Humphrey)...  
 ..... 45-48, 50  
 ゴッドフリー (Godfrey, Michael) ...173  
 グールド (Gould, Nathaniel).....257  
 グローント (Graunt, John).....  
 ..... 148, 155, 156  
 グロチウス (Grotius, Hugo) .....83  
 ギルフォード伯 (Guildford, Earl of)  
 ..... 『フランシス・ノース』を見よ

### H

ヘインズ (Haines, Richard).....222  
 ハクルート (Hakluyt, Richard).....  
 ... 44, 45, 47, 48-50, 51, 52, 55, 53  
 ヘイル (Hale, Matthew)...133, 221-222  
 ハリファックス (Halifax, Marquis  
 of) .....144  
 ハラム (Hallam, Henry) .....298, 300  
 ハレー (Halley, Edmund).....155, 156



ハミルトン (Hamilton, Robert) ...245  
 ハリントン (Harrington, James) ...  
 ..... 112-119  
 ヘリオット (Harriot, Thomas) ...55-56  
 ハリソン (Harrison, William)...19, 37  
 ハルテンシュタイン (Hartenstein,  
 Gustav) .....194  
 ヘルフェリツピ (Helferich, J.) .....22  
 ヘングステンベルヒ (Hengstenberg,  
 Ernst Wilhelm) .....255  
 ヘンリー七世 (Henry VII, King)...  
 ..... 44, 83, 84, 114, 116  
 ヘンリー八世 (Henry VIII, King)  
 ..... 10, 13, 14, 19, 23, 80, 116  
 ヘルマン (Hermann, Frederick  
 Benedict Wilhelm v.) .....176  
 ホブズ (Hobbes, Thomas)...99-112,  
 ..... 141, 152, 160, 179, 200, 204, 219  
 ハル (Hull, Charles Henry) ...145, 147  
 ヒューム (Hume, David) .....  
 ..... 1, 5, 36, 46, 81, 174, 253, 254  
 ハッチソン (Hutcheson, Archibald)  
 ..... 257

J

ヤコブ (Jacob, W.) ...25-26, 33, 34, 37  
 ジェイムス一世 (James I, King) ...  
 ...29, 54, 61, 62, 86, 89, 121, 215, 289  
 ジェイムス二世 (James II, King) ...  
 ... 181, 182, 196, 228, 243, 251, 259

K

カント (Kant, Immanuel).....195  
 キング (King, Charles) .....298  
 キング (King, Gregory) .....  
 ..... 236, 237, 240, 245, 246  
 クローズス (Krösus, King).....73

L

ラム (Lamb, Samuel).....172-173  
 ラムバード (Lambarde) .....34  
 レイモンド (Lamond, Elizabeth) ...34  
 ランズダウン (Lansdowne, Mar-  
 quis of).....143, 145  
 レイン (Lane, Ralph) .....55  
 ランゲン (Langenn, Friedrich  
 Albrecht v.) .....289  
 ラティマー (Latimer, Hugh).....23-32  
 ロー (Law, John).....21, 294  
 レーザー (Leser, Emanuel) .....34  
 ルキス (Lewis, M.).....173  
 リンガー (Lingard, John) .....89  
 リスト (List, Friedrich v.) .....123  
 リヴィウス (Livius Andronicus)...226  
 ロック (Locke, John) .....  
 ..... 186, 195-223, 254, 290, 298  
 ルキ十四世 (Louis XIV, King) .....  
 ..... 197, 210, 265, 272, 299  
 ルキ十五世 (Louis XV, King) .....80  
 ラウンズ (Lowndes, William).....197  
 ロイド (Loyd, Samuel Jones) .....3  
 リクルゴス (Lycurgus) .....118

M

マコーリー (Macaulay, Thomas  
 Babington) .....181, 182  
 マカロック (Mc Culloch, John Ra-  
 msay).....3,  
 5, 91, 96, 142, 156, 160, 172, 247  
 マキアヴェリ (Machiavelli, Niccolo  
 di Bernardo).....74, 227  
 マレストロア (Malestroï) .....40  
 マルサス (Malthus, Thomas Robert)  
 ..... 1, 3, 66, 130, 174, 175, 264  
 マンダヴィル (Mandeville, Bernard)  
 ..... 256-257  
 マンリウス (Manlius Capitolinus)  
 ..... 114  
 マークランド (Markland, Jeremiah)  
 ..... 227  
 メイリー (Mary, Queen) .....23, 29  
 メリウス (Melius, Spurius) .....114  
 ミル (Mill, James) .....124  
 ミル (Mill, John Steuart).....4-5  
 ミルトン (Milton, John) .....112  
 ミセルデン (Misselden) .....91  
 モーア (More, Thomas) .....7-20  
 モーリッツ選侯 (Moritz, Kurfürs-  
 ten).....289  
 モーゼ (Mose).....118, 127  
 マン (Mun, Thomas).....  
 .....91-97, 171, 232, 286  
 マレー (Murray, R.) .....174

N

ネッカー (Necker, Jacques) ...93, 264

ネポス (Nepos, Cornelius) .....60  
 ニュートン (Newton, Issac) .....194  
 ノース (North, Dudley) .....  
 .....181-194, 254, 280, 298  
 ノース (North, Francis) .....181  
 ノース (North, Roger)...181, 183-18

O

オヘダ (Ojeda, Alonzo) .....43

P

ペイターソン (Paterson, William)  
 ..... 173  
 ペカム (Peckham, George)...50-52, 56  
 ペピース (Pepys, Samuel).....144  
 パーシー (Percy, Thomas).....39  
 ペリクレス (Perikles).....7  
 ペティー (Petty, William)...141-180,  
 194, 204, 206, 236, 245, 254, 298  
 フェリッパ (Philip, King).....29  
 フェリッパ二世 (Philip II, King) ...65  
 ピンダー (Pindar).....77  
 ピット (Pitt, William, Lord Chath-  
 am).....4, 254  
 プリニウス (Plinius) .....76  
 ポレックスフェン (Pollexfen, J.) ...233  
 ポーター (Porter, George Richard-  
 son) .....3  
 ポッター (Potter, John).....227  
 ポッター (Potter, W.).....173  
 プライス (Price).....257  
 プリドー (Prideaux) .....227



パーカス (Purchas, Samuel).....55, 88

R

ラリー (Raleigh, Walter).....

..... 44, 59-69, 83, 86, 259

ランケ (Ranke, Leopold).....39, 40

ローリー (Rawley) .....74

リカルド (Ricardo, David).....

1, 3, 30, 78, 102, 164, 204, 228, 257

リチャード二世 (Richard II, King)...84

リシュリュー (Richelieu, Cardinal

de) .....227

ロバーツ (Roberts, Lewis).....94

ロビンソン (Robinson, Ralph).....8

ロツシャー (Roscher, Wilhelm).....

.....8, 25, 34, 41, 43, 72, 73,

79, 124, 125, 145, 146, 117, 152,

180, 181, 198, 200, 222, 236, 260

ルーソー (Rousseau, Jean Jacques)

..... 200

ラディマン (Ruddiman) .....227

ルーディング (Ruding) .....184

ライマー (Rymer, T.) .....44

S

サーヴェドラ (Saavedra, Diègo)...69-70

サルマシウス (Salmasius) .....80

セー (Say, Jean Baptiste) ...101, 276

セー (Say, Leon) .....41

シュローツァー (Schlözer)..... 151

シェーン (Schön, J.).....258

シーニョア (Senior, William Nas-

san).....3

シェイクスピア (Shakespear,

William)..... 33, 56, 81

シェルブルン男 (Shelburne, Baron

of) .....143

スミス (Smith, Adam).....1, 2, 5,

30, 43, 78, 135, 136, 140, 174, 181,

193, 196, 228, 247, 254, 256, 267

スミス (Smith, James) .....

.....33, 34, 39, 61, 138

ソロン (Solon) .....73

ゾンネンフェルス (Sonnenfels) .....

.....93, 264

サザンプトン伯 (Southampt n,

Earl of) .....92

スペディング (Spedding, James) ...

..... 71, 72, 75, 80, 85

スピノザ (Spinoza, Benedict) .....264

スポン (Sponn) .....227

スタッフオード (Stafford, William)

..... 33-39

ステュアート (Steuart, James)...22, 256

ストルベルク (Stollberg, Graf) ...289

ストラウス (Straus) .....255

スュリー (Sully).....69, 268

T

タキトス (Tacitus).....226

テムプル (Temple, William) .....

..... 134, 259-278

スキディデス (Thukydidēs) .....152

トーランド (Toland, John)...112, 115

トック (Tooke, Thomas).....3, 270

トレンズ (Torrens, Robert).....3

トスカナ大公 (Toscana, Duke of)...

..... 91, 94

タッカー (Tucker, Josiah)...6, 78, 139

V

ヴァンダーリント (Vanderlint) ...244

W

ウェイクフィールド (Wakefield, Da-

niel) .....256

ウォルフォード (Walford) .....125

ホイラー (Wheler).....227

ホイットウース (Whitworth, Char-

les) .....226

ウリアム三世 (William III, King)...

.....197, 228, 253, 259, 298

X

クセノフォン (Xenophon) .....227

Y

ヤング (Young, Arthur) ...28, 33, 34







法制史 .....227

I

英吉利革命.....99, 196, 200

英吉利経済學 .....251, 195

—の始め .....7

—の白銀時代 .....4-5

—の人氣 .....2, 4

—の黄金時代 .....1

印度評議會 .....243

インドストリー・システム .....255

英蘭銀行.....173, 208, 294, 299

愛蘭土拓殖計畫 .....89

遺産分配 .....133

J

ジエスウキット税.....95

實 驗 .....76

地 代.....25, 163

地代論 .....257

ペティーの— .....163-165

ダッドリー・ノースの— .....188

ロックの— .....216-217

人口動態 .....167

人口論 .....257

モーアの— .....15, 20

カーライルの— .....54

『ヴァージニア案内』の— .....59

ラリーの— .....66-67

ベイコンの— .....86

ハリントンの— .....118

チャイルドの— .....129-130

ペティーの— .....167-169

ロックの— .....220

ダヴナンの— .....236-237

テムブルの— .....261-265

スピノザの— .....264

『貿易・鑄貨並に證券信用に關する論策』の— .....282-283

『人類の所有物目録』(ベイコンの).....74-75

地 主 .....188

自 由 .....200, 228, 273

自由貿易 .....135

自由刑 .....18

自由市場 .....190

鋤耕農業 .....122

十六世紀の財政 .....10

K

價 値 .....204

價値説

ホップスの— .....101-102

ペティーの— .....160-162

ロックの— .....205-206

貨幣不足 .....186

貨幣品位輕鑄に關する見解

モーアの— .....13

ラリーの— .....64

トマス・マンの— .....96

コットンの— .....96

ガリアニの— .....96

ペティーの— .....171-172

ノースの— .....192

ラウンズの— .....197

ロックの— .....197-199, 210-211

貨幣價值の下落 .....21-23

貨幣の廢止 .....14

貨幣論

モーアの— .....14, 16

ラリーの— .....45

ホップスの— .....103-105

ペティーの— .....169-171

ノースの— .....185-186

ロックの— .....202-203, 206-212, 213-215

ダヴナンの— .....235-236

貨幣數量説

ウヰリアム・スタッフオードの— .....39

ジャン・ボダンの— .....40-41

貨幣と富とに關する見解

ラリーの— .....45, 65-66

ギルバートの— .....48

ハクルードの— .....48

カーライルの— .....54

『ヴァージニア案内』の— .....55-59

サーヴェドラの— .....69-70

ベイコンの— .....73-74

モーアの— .....13

ペティーの— .....169-170

ダッドリー・ノースの— .....184-185

ロックの— .....209

ダヴナンの— .....234-235

貨幣輸出禁止令 .....138

貨幣の輸出禁止 .....171

懷疑論 .....8

海上權 .....52

價 格 .....160

價格公定 .....83, 138, 214

價格論(ロックの) .....205-207

價格尺度 .....162, 206

快 樂 .....15

過剩人口 .....46

過剩生産 .....269

僭 税 .....244

關 税 .....111, 244, 238, 299

關稅登錄 .....131

觀念論 .....195

間 接 税 .....110, 179, 219, 253, 290

爲替相場 .....132, 171

憲 法 .....229

形而上學 .....166

權利の宣言 .....183

形 相 .....193

經 濟 學 .....73, 115

經濟學の成立 .....7

憲法擁護の戰 .....11

血液循環に關するハーヴェイの説 .....115

缺 性 .....193

金 主 .....188

金納税 .....180

基督教 .....18, 52

毀傷貨幣 .....197, 211

貴族政治 .....105, 113

貴金屬貨幣禁止 .....118

交易尺度 .....185



幸福主義 .....15  
 攻撃戦 .....272  
 工業取締規則 .....137  
 個人結婚 .....16  
 恒常の原則 .....241  
 航海條例 ..... 84,  
 135, 136, 159, 160, 178, 237, 257  
 交換 .....103  
 國法學 .....227  
 刻 印 .....211  
 國家(モーアの見解).....14  
 國家形態 .....105  
 國 庫 .....105  
 國庫閉鎖 .....295  
 國民經濟の基礎 .....64-65  
 國民の價值(ペティーの見解).....165  
 國民資本 .....236  
 穀物貿易 .....239  
 穀物法 .....29, 257  
 國內商業 ..... 188, 233, 287, 288  
 穀莖耕作法 .....10  
 混合君主制 .....113, 117  
 公 債 .....245  
 耕作條例 .....69  
 小作農場 .....10  
 小 作 料 .....24, 25, 30  
 工手學校 .....221  
 公定價格 .....138  
 古典の研究 .....227  
 公有物權 .....69  
 『空虚なる空間』 .....193  
 君主政治 .....105

郷土權 .....135  
 共同社會 .....107  
 恐 慌 .....186  
 共產主義學說普及の條件 .....9  
 強制労働 .....18  
 救貧法 .....10-11, 159  
 救貧院 .....221  
 救貧税 .....221, 222  
 『舊英吉利學派』 .....256  
 舊約聖書 .....81  
 喬木植林 .....122  
 強制作業場 .....222  
 共有財産 .....200

L

レヴァント .....94, 135, 286  
 レヴァント貿易 .....182, 280  
 レヴェラーズ .....11  
 リヴォルノ .....94, 286  
 倫敦手工業者一揆(一五一七年の).....9

M

マーカンティル・システム .....43, 73,  
 123, 139, 171, 172, 255, 256, 258, 272  
 マーカンティリスト .....286, 291  
 milled money .....198  
 民族移動 .....116  
 民主政治 .....105, 113, 117  
 民主主義 .....112  
 密輸入 .....131  
 モーゼの律法 .....127  
 『最も一般的に用ゐらるる實驗目錄』

.....75  
 無差別主義 .....8, 11, 31

N

認 識 .....195  
 農民戦争 .....8, 18  
 農 業 法 .....116  
 農業恐慌 .....269

O

王位繼承の争 .....11  
 王 權 說 .....13  
 王權制度 .....280  
 大藏省證券 .....296, 299  
 王立協會 .....144, 154, 155, 194  
 和 蘭 觀  
 ラリーの—— .....16-64  
 チャイルドの—— .....132-134  
 ペティーの—— .....153-154  
 テンプルの—— .....259-274  
 和蘭の叛亂 .....11  
 フィジオクラット ..... 80  
 フィジオクラシー .....174, 255, 258  
 ボトシ .....21, 70

R

羅紗價格法 .....83  
 リカルド法則 .....164  
 利 率 .....162  
 利子禁止 ..... 81, 118  
 利子論  
 バイコンの—— .....80-83

サルマシウスの—— .....80  
 ダンテの—— .....81  
 グロティウスの—— .....83  
 ラリーの—— .....83  
 トマス・マンの—— .....96-97  
 カルペパーの—— .....121-123  
 チャイルドの—— .....125-128  
 『誤解せられたる金利』の—— .....126  
 ペティーの—— .....162-163  
 ダツドリー・ノースの—— .....  
 ..... 188-190  
 ロックの—— .....213-215  
 勞 働 .....101, 102  
 労働人口 .....163  
 労働の統制 .....15  
 勞 銀 論  
 ペティーの—— .....165  
 ロックの—— .....217-218  
 勞銀の資本化 .....165  
 露西亞會社 .....53  
 流通證券 .....295  
 流刑植民地 .....243

S

歳 入 .....105  
 歳 出 .....105  
 再洗禮論 .....8, 11, 17  
 三分法の先驅 .....101  
 三國同盟 .....259  
 三圃農法 .....10  
 三生産要素の學說  
 ラリーに於ける——の萌芽 .....64-65



ペティーに於ける——162-165  
 ロックに於ける——212-213  
 政治心理學 .....272  
 制規會社 .....240, 241, 293  
 生産論 .....101  
 生産的労働の觀念  
 ペティーに於ける——166-167  
 『貿易 鑄貨並に證券信用に關する論策』に於ける——283-284  
 精神労働 .....165  
 世界君主國 .....230  
 正統派經濟學 .....2, 3  
 『生得の眞理』(ロックの説) .....195  
 ● 專制主義 .....105  
 戦争 .....102  
 社會主義 .....7-20  
 奢侈禁止法  
 ベイコンの見解 .....80  
 ホッブスの見解 .....111  
 ダッドリー・ノースの見解 .....191-192  
 ダヴナンの見解 .....233  
 紙幣 .....294  
 資本貸子 .....188  
 資本の生産能性 .....83  
 死刑 .....18, 19  
 市場指定權 .....178  
 シメラ .....194  
 新發明 .....289  
 『眞空の逃避』(fuga vacui) .....193  
 信教自由に關する見解  
 ロックの—— .....196

モアの—— .....17-18  
 新教的自由 .....158  
 心理學 .....196  
 『新哲學』 .....193  
 質料 .....193  
 使用價值 .....205  
 私有財産 .....15  
 私有財産起源論  
 ホッブスの—— .....107-109  
 ロックの—— .....200-204  
 自然法 .....108  
 自然狀態 .....107  
 自然の權利 .....112  
 自然史 .....76  
 自然神教論 .....196  
 自然哲學 .....254  
 消費に關する見解  
 ベイコンの—— .....79-80  
 モアの—— .....12-13  
 ペティーの—— .....174-176  
 消費減退 .....180  
 商品税 .....218  
 消費税 .....133, 244, 299  
 商業沈滞 .....186  
 商業自由 .....253, 289  
 商業恐慌 .....299  
 商業制度 .....31  
 商業手形 .....134, 296  
 商事裁判 .....133  
 證券信用 .....235, 280, 295  
 商工業の自由 .....137  
 植民學說

T

アダム・スミスの—— .....43  
 ラリーの—— .....44  
 ギルバートの—— .....45-48  
 ハクルートの—— .....48-50  
 ベカムの—— .....50-52  
 カーライルの—— .....52-54  
 『ヴァージニア案内』の—— .....55-59  
 トマス・ヘリオットの—— .....55-56  
 ベイコンの—— .....85-89  
 ホッブスの—— .....112  
 チャイルドの—— .....139-140  
 ペティーの—— .....178  
 ダヴナンの—— .....242-243  
 テムプルの—— .....274-278  
 植民會社 .....52  
 植民政策 .....44  
 所有權 .....103  
 『所有の均衡』(ハリントン) .....113  
 所有者植民地 .....44  
 主權 .....106  
 宗教改革 .....11  
 スミルナ .....182  
 僧院の廢止 .....10, 31, 39, 30, 116  
 相對的人口 .....261  
 租税 .....135  
 租税論  
 ホッブスの—— .....109-111  
 ペティーの—— .....178-180  
 ロックの—— .....218-220  
 ダヴナンの—— .....248  
 租税轉嫁論 .....219  
 シュリー主義 .....258

體僕制度(ラリーの見解) .....67-68  
 定期貸借 .....10  
 抵當權制度 .....134  
 抵當權登記簿 .....220  
 手形流通 .....294  
 哲學 .....175  
 土地臺帳 .....219  
 土地銀行 .....163  
 土地抵當 .....220, 296  
 東印度 .....131  
 東印度會社 .....160, 240, 241, 293  
 東印度貿易 .....247, 251, 280, 287  
 東印度法案 .....200  
 東海貿易 .....135  
 統計 .....151, 245  
 投機的農法 .....10  
 特許貿易會社に關する見解  
 ダヴナンの—— .....240-242  
 『貿易・鑄貨並に證券信用に關する論策』の—— .....292-293  
 富 .....93, 184, 204, 228, 281, 288  
 富の觀念  
 ラリーの—— .....45, 65-66  
 ギルバートの—— .....48  
 ハクルートの—— .....48  
 カーライルの—— .....54  
 『ヴァージニア案内』の—— .....55-59  
 サーヴェドラの—— .....69-70  
 ベイコンの—— .....77  
 トーリー黨 .....229



V

ヴェスヴ .....70  
ヴァージニアの半共有制度 .....88-89

W

ホイッグ黨 .....229

Y

ヤヌス神 ..... 298  
羊 牧 地 .....27  
徭役労働 .....180  
備 兵 .....12  
唯 理 論 ..... 99, 195  
輸 出 入 .....111  
郵 税 .....244

Z

財産の共有 .....15, 18  
絶対君主制 .....113  
造 幣 局 .....185, 186  
造 幣 料 .....212  
ズンド海峡 .....53





昭和4年3月10日 初版發行  
 昭和22年11月25日 再版印刷  
 昭和22年11月30日 再版發行

ロシア—英國經濟學史論

定價一三〇圓

譯者

杉本榮一

發行者

東京都千代田區神田神保町一ノ一  
 株式會社 同文館  
 代表者 服部幾三郎

印刷者

東京都新宿區築地町十三  
 赤城印刷株式會社  
 代表者 登内盛康

配給元

東京都千代田區神田淡路町二ノ九  
 日本出版配給株式會社

發行所

東京都千代田區神田神保町一ノ一  
 株式會社 同文館



東京商大教授 山中篤太郎著

労働組合法の生成と變轉 (増補版)

——資本主義英國に於ける政策形成の研究——

本著は、労働組合の祖國イギリスに於いて、労働組  
合法がその社會的諸條件と如何にかかわり、如何に  
生成され、變轉してきたかを精細に考察し、もつ  
て我國労働組合法の正しき發展に資さんとして記さ  
れた劃期的な大著である。

A5版上製・七五〇頁・定價三〇〇圓

同文館刊



年 月 日 643

12 2	23 5 2	21.19	
19.12	22.7.71	21.12	
		12.20	
		11.14	
21.10.19			

閱覽濟



終

